浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

2009

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
岡山県浅口市教育委員会

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

2009

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
岡山県浅口市教育委員会

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

2009

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
岡山県浅口市教育委員会

1　浅口市鴨方町本庄地区を望む（北上空から）

2　竹林寺天文台遺跡全景（東上空から）

巻頭図版２

１　小田郡矢掛町南山田地区を望む（南上空から）

２　弥生時代の遺構全景（西上空から）

１　竪穴住居１（南から）

２　竪穴住居２（北西から）

竹林寺天文台遺跡出土の土製品・石器・石製品

序

浅口市は、岡山県の南西部、続日本紀にも記されている元浅口郡の西端部（正確には笠岡市大島と里庄町が西端）に位置し、平成18年３月21日、金光・鴨方・寄島の３町が合併して誕生しました。南は、瀬戸内海国定公園の一角で、神功皇后の伝説に彩られた寄島の海岸線、北は山岳仏教の名残を留める遙照山、峰続きに陰陽師安倍晴明縁の阿部山、その間に現代の星の観測所である国立天文台岡山天体物理観測所のある竹林寺山等を擁する遙照山山系の山並み、中央南寄りを西から東へ里見川が流れ、それに沿って山陽本線と国道２号、そのやや北に旧鴨方往来と、自然が豊かで歴史的文化的魅力に富んだ浅口市です。

浅口市教育委員会では各種開発事業に先立って発掘調査を行い、文化財の保護と活用に努めているところです。

本報告書は、浅口市が大学共同利用機関法人自然科学研究機構から委託を受けて、平成20年度に実施した国立天文台新観測施設建設予定地内の竹林寺天文台遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査の結果、太古の先人たちが弥生時代から中世にかけて生活を営んだ集落であることが明らかになりました。特に弥生時代については、標高340mの地点で竪穴住居や掘立柱建物、多種多様な遺物が見つかり、瀬戸内海沿岸地域の高地性集落を考える上で貴重な資料と言えます。

この報告書が今後の文化財の保護・保存とともに学術研究、郷土の歴史研究の資料、また地区住民の心の糧として活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の作成まで、諸々のご指導・ご支援を賜りました岡山県教育庁文化財課・岡山県古代吉備文化財センターをはじめとする関係各位と猛暑の中にも誠心誠意発掘調査に従事してくださった皆様に、衷心より御礼申し上げます。

平成２１年３月

浅口市教育委員会
教育長　工　藤　　進

例　言

1　本書は、国立天文台岡山新観測所建設に伴い、大学共同利用機関法人自然科学研究機構と浅口市の委託契約に基づき、浅口市教育委員会が平成20年度に発掘調査を実施した、竹林寺天文台遺跡の発掘調査報告書である。

2　竹林寺天文台遺跡は岡山県浅口市鴨方町本庄3037-5および小田郡矢掛町南山田2808-27に所在する。

3　試掘調査は平成17年度に岡山県古代吉備文化財センターが実施し、本発掘調査は平成20年度に浅口市教育委員会が行った。調査は水田貴士、三浦孝章、藤原範子の3名が担当し、調査面積は700㎡である。

4　発掘調査および報告書作成にあたっては、各氏から、終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

浅倉秀昭　荒木幸治　安東康広　石田爲成　宇垣匡雅　氏平昭則　大橋雅也　岡田　博
岡本泰典　尾上元規　河合　忍　小嶋善邦　澤田秀実　島崎　東　白石　純　鈴木力郎
高田恭一郎　高田知樹　高橋進一　内藤善史　中野雅美　西野　望　信里芳紀　平井典子
平井泰男　福田正継　間壁忠彦　正木茂樹　光永真一　森岡秀人　山田浩史　米澤誠介
米田克彦　和田　剛　渡邉恵里子
岡山県教育庁文化財課　岡山県古代吉備文化財センター　矢掛町教育委員会
国立大学法人岡山大学

5　本書の作成は平成20年度に実施し、水田、三浦、藤原が担当した。

6　出土遺物の鑑定・分析については、次の諸氏・機関に依頼し有益な教示を得た。また分析結果の一部については報告文をいただき、本書付載に収録した。記して感謝の意を表する。

石器の石材鑑定　　鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科）
炭化材　　古環境研究所

7　本報告書の執筆は、水田貴士、三浦孝章、光永真一が分担して行い、全体の編集は水田が行った。

8　本報告書に関連する出土遺物および図面・写真類は、浅口市教育委員会（岡山県浅口市鴨方町鴨方2244-2）に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標Ｖ系の座標北である。報告書抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

2　遺構および遺物の挿図縮尺は図中に示したが、おおむね次のとおり統一している。

＜遺構＞　竪穴住居：1/80　掘立柱建物：1/60　土壙：1/30、1/40　溝：1/30　柱穴：1/30

＜遺物＞　土器：1/4　瓦：1/6　石器：1/2、1/3、1/6　鉄器：1/2　土製品：1/3

3　遺構全体図に示した遺構略称は、次のとおりである。

住：竪穴住居　建：掘立柱建物　墓：土壙墓　土：土壙　柱：柱穴

4　遺構番号は、遺跡ごとに通し番号とし、土器以外についてはその材質等により番号の前に次の略号を付して別番号とした。

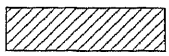
石器・石製品：S　金属製品：M　土製品：C

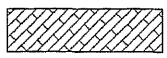
5　土層断面および土器観察表における色調は、『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修)によっている。

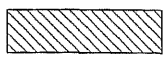
6　本報告書に掲載した写真･地図のうち､第２図は国土交通省国土地理院発行の１/25,000地形図「笠岡」「矢掛」を複製・加筆したものである。また巻頭図版１-１・第５図は国立天文台岡山天体物理観測所の提供による。

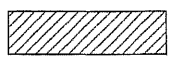
7　本報告に用いた遺構・遺物の時期区分については、一般的な政治区分に準拠したが、古墳時代は７世紀前半まで、古代は７世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指している。

8　本報告書に掲載した遺構・遺物図においては、遺構断面図の地山、基盤層・石器・土・金属器の断面等を次に示すトーンで表現している。


遺構の地山


基盤層


石器の断面


土・金属器の断面

目　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

第２章　発掘調査および報告書作成の経緯と経過
第１節　調査にいたる経緯 …… 7
第２節　発掘調査および報告書作成の経過 …… 9
1　発掘調査 …… 9
2　報告書 …… 9
3　調査・整理体制 …… 9
第３節　日誌抄 …… 10

第３章　発掘調査の概要
第１節　調査の概要 …… 12
1　調査前の状況 …… 12
2　調査の概要 …… 14
第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 14
1　概　要 …… 14
2　竪穴住居 …… 16
3　掘立柱建物 …… 36
4　土　壙 …… 38
5　溝 …… 44
6　柱　穴 …… 45
7　遺構に伴わない遺物 …… 46
第３節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 54
1　概　要 …… 54
2　土壙墓 …… 55
3　土　壙 …… 55

4　溝 …… 59
5　遺構に伴わない遺物 …… 60

第４章　まとめ
第１節　集落構造と変遷 …… 61
第２節　周辺の弥生時代遺跡 …… 61
第３節　竹林寺天文台遺跡からの眺望 …… 62
第４節　竹林寺天文台遺跡出土の石器 …… 64
第５節　水の確保の問題 …… 65
第６節　県内出土の弥生時代後期の土玉 …… 66

付載
天文台遺跡周辺の地形・地質 …… 69
竹林寺天文台遺跡における自然科学分析 …… 72

遺構一覧表
遺物観察表
図版
報告書抄録
奥付

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査地周辺の主要遺跡分布（1/30,000） …… 2
第３図　伝遙照山廃寺の平瓦（１／６） …… 4
第４図　試掘・確認調査位置図（1/3,000） …… 8
第５図　国立天文台岡山天体物理観測所建設以前の地形（1/10,000） … 12
第６図　現在の地形と調査地点（1/10,000） …… 13
第７図　調査地点の調査前地形測量図（1/400） …… 13
第８図　弥生時代の遺構全体と地形断面図（1/200） … 15
第９図　竪穴住居１（1/80）・竪穴住居１の変遷(1/200) … 16
第10図　竪穴住居１ａ（1/80） …… 17
第11図　竪穴住居１ｂ（1/80） …… 18
第12図　竪穴住居１遺物出土状況（1/100・１／４・１／６） …… 19
第13図　竪穴住居１出土遺物①（１／４） …… 20
第14図　竪穴住居１出土遺物②（１／４・１／３） …… 21
第15図　竪穴住居１出土遺物③（１／２・１／３・１／６） …… 22
第16図　竪穴住居２（1/80）・竪穴住居２の変遷（1/200） …… 25
第17図　竪穴住居２ａ（1/80） …… 26
第18図　竪穴住居２ｂ（1/80） …… 27

第19図　竪穴住居２c（1/80）…… 28
第20図　竪穴住居２遺物出土状況
（1/100・１/４・１/６）…… 29
第21図　竪穴住居２出土遺物①（１/４）…… 30
第22図　竪穴住居２出土遺物②（１/４）…… 31
第23図　竪穴住居２出土遺物③（１/４）…… 32
第24図　竪穴住居２出土遺物④（1/4・1/3・1/2）… 35
第25図　掘立柱建物１（1/60）・
出土遺物（１/４・１/３）…… 36
第26図　掘立柱建物２（1/60）…… 37
第27図　土壙１～３（1/30）…… 38
第28図　土壙４（1/40）…… 38
第29図　土壙５（1/40）・出土遺物（１/４）…… 39
第30図　土壙６（1/30）…… 39
第31図　土壙７（1/30）…… 39
第32図　土壙８（1/30）・出土遺物（１/４）…… 40
第33図　土壙９（1/30）…… 40
第34図　土壙10～12（1/30）…… 41
第35図　土壙13～15（1/30）…… 41
第36図　土壙16（1/30）…… 42
第37図　土壙17（1/30）…… 42
第38図　土壙18（1/30）…… 42
第39図　土壙19（1/30）…… 43
第40図　土壙20（1/30）…… 43
第41図　土壙21（1/30）…… 43
第42図　溝１～３（1/30）…… 44
第43図　柱穴１～４（1/30）…… 45
第44図　中央部岩周辺の出土遺物（１/４）…… 48
第45図　遺構に伴わない遺物①（１/４）…… 49
第46図　遺構に伴わない遺物②（１/４）…… 50
第47図　遺構に伴わない遺物③（１/４）…… 51
第48図　遺構に伴わない遺物④（１/４）…… 52
第49図　遺構に伴わない遺物⑤（１/２・１/３）…… 53
第50図　古墳時代以降の遺構全体図（1/200）…… 54
第51図　土壙墓１（1/30）…… 55
第52図　土壙22～26（1/30）…… 56
第53図　土壙27～31（1/30）…… 57
第54図　土壙32・33（1/30）…… 58
第55図　溝４～７（1/30）…… 59
第56図　遺構に伴わない遺物（１/４）…… 60
第57図　竹林寺天文台遺跡からの可視域…… 63
第58図　竹林寺天文台遺跡周辺の湧水地点…… 65

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　浅口市鴨方町本庄地区を望む（北上空から）
２　竹林寺天文台遺跡全景（東上空から）
巻頭図版２　１　小田郡矢掛町南山田地区を望む（南上空から）
２　弥生時代の遺構全景（西上空から）
巻頭図版３　１　竪穴住居１（南から）
２　竪穴住居２（北西から）
巻頭図版４　１　竹林寺天文台遺跡出土の
土製品・石器・石製品

表目次

第１表　文化財保護法に基づく提出書類一覧…… 11
第２表　投弾の大きさと重さの分布…… 24
第３表　竹林寺天文台遺跡周辺の主要弥生遺跡…… 62
第４表　竹林寺天文台遺跡出土石製品一覧表…… 65
第５表　土玉分類表…… 66
第６表　土玉一覧表…… 67

写真目次

写真１　現地説明会の様子…… 11
写真２　作業風景…… 15
写真３　排水作業…… 15
写真４　中央穴　作業風景…… 19
写真５　竪穴住居２　東側掘削部分…… 29
写真６　竪穴住居２　掘削の深さ…… 29
写真７　竪穴住居２　作業風景…… 33
写真８　サヌカイト剝片…… 34
写真９　掘立柱建物１　作業風景…… 36
写真10　サヌカイト剝片…… 37

図版目次

図版１　１　天文台から備讃瀬戸を望む
　　２　弥生時代の遺構全景（上が北）
図版２　１　竪穴住居１（南から）
　　２　竪穴住居１a　中央穴（南東から）
　　３　竪穴住居１壁体溝断面（東から）
図版３　１　竪穴住居１壁体溝工具痕（南西から）
　　２　竪穴住居１中央穴切り合い状況（北から）
　　３　竪穴住居１柱穴（南から）
図版４　１　竪穴住居１b　中央穴遺物出土状況（西から）
　　２　竪穴住居１b　中央穴完掘状況（南から）
　　３　竪穴住居１b　排水溝断面（南西から）
図版５　１　竪穴住居１b　土器出土状況（西から）
　　２　竪穴住居２（北西から）
　　３　竪穴住居２土層断面（南西から）
図版６　１　竪穴住居２土層断面（西から）
　　２　竪穴住居２b・c　壁体溝断面１（西から）
　　３　竪穴住居２b・c　壁体溝断面２（西から）
図版７　１　竪穴住居２中央穴断面（南から）
　　２　竪穴住居２中央穴（南から）
　　３　竪穴住居２　P12断面（南東から）
図版８　１　竪穴住居２　P15（北から）
　　２　掘立柱建物１（北から）
　　３　掘立柱建物１　P2（北東から）
図版９　１　掘立柱建物２（北から）
　　２　土壙７（南西から）
　　３　土壙８（南東から）
図版10　１　土壙11（南から）
　　２　土壙12（西から）
　　３　土壙14（西から）
図版11　１　土壙18（南から）
　　２　土壙20（北東から）
　　３　溝１（南西から）
図版12　１　溝３（西から）
　　２　包含層　土器（108）出土状況（北から）
　　３　包含層　土器（160）出土状況（東から）
図版13　１　古墳時代以降の遺構全景（北西から）
　　２　土壙墓１検出状況（南西から）
　　３　土壙23（南から）
図版14　１　竪穴住居１出土遺物
　　２　竪穴住居２出土遺物
図版15　１　弥生時代　遺構に伴わない遺物
　　２　古墳時代以降　遺構に伴わない遺物
　　３　竪穴住居１　土製品・石器・石製品
図版16　１　竪穴住居２　鉄器・土製品・石器・石製品
　　２　掘立柱建物１　石器
　　３　遺構に伴わない遺物　土製品・石器・石製品

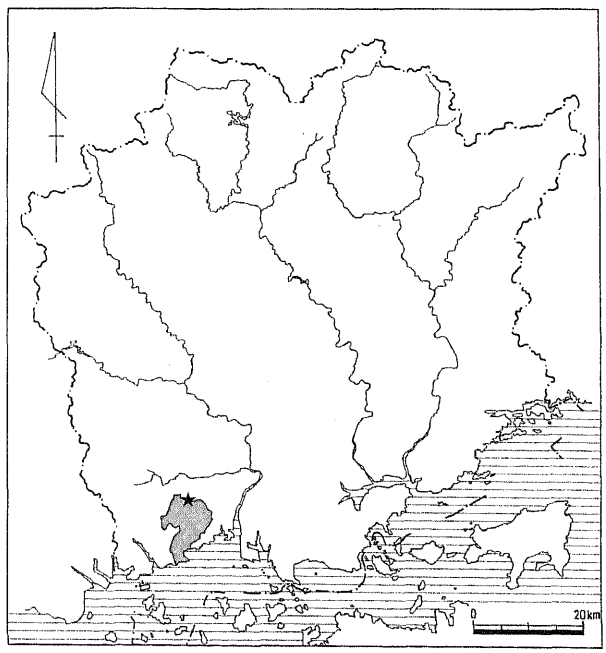
第１章　地理的・歴史的環境

竹林寺天文台遺跡は、岡山県南西部の浅口市鴨方町本庄および小田郡矢掛町南山田に所在する。浅口市と矢掛町は、東を倉敷市、北を井原市・総社市、西を笠岡市・浅口郡里庄町と接している。浅口市と矢掛町の境界に位置する竹林寺山は、遙照山山系に属する標高384mの山で、別名市平山とも呼ばれている。この山の東側山頂標高340mの位置に本書で報告する竹林寺天文台遺跡は所在する。竹林寺山や阿部山が連なる遙照山山系は、標高250m以上の場所では白亜紀の火山活動によって堆積した流紋岩が地質基盤となり、それ以下の場所では白亜紀末に貫入した花崗岩が地質基盤となっている。遙照山山系に堆積している花崗岩は細粒花崗岩類であるが、鴨方町本庄や矢掛町南山田の台地部分に堆積している花崗岩は、やや粗い中粒花崗岩類である。また鴨方町地頭や矢掛町里山田といった低地部分は、川から運ばれた土砂の堆積による扇状地である。竹林寺天文台遺跡周辺には、本庄川・曲田川があり、この二つの川が大殿で合流し鴨方川となり、さらに南部の下名口で鴨方町の北西部を流れる杉谷川、地頭上で北東部を流れる益坂川と合流する。矢掛町では、南山田を流れる道々川が、扇状地を形成し、土生で東西に流れる小田川に合流する。

竹林寺天文台遺跡周辺の遺跡は、古くは旧石器時代から存在する。鴨方町益坂の和田遺跡からはサヌカイト製の槍先形尖頭器が出土し、阿部山ではサヌカイト製のナイフ形石器が採集されている。

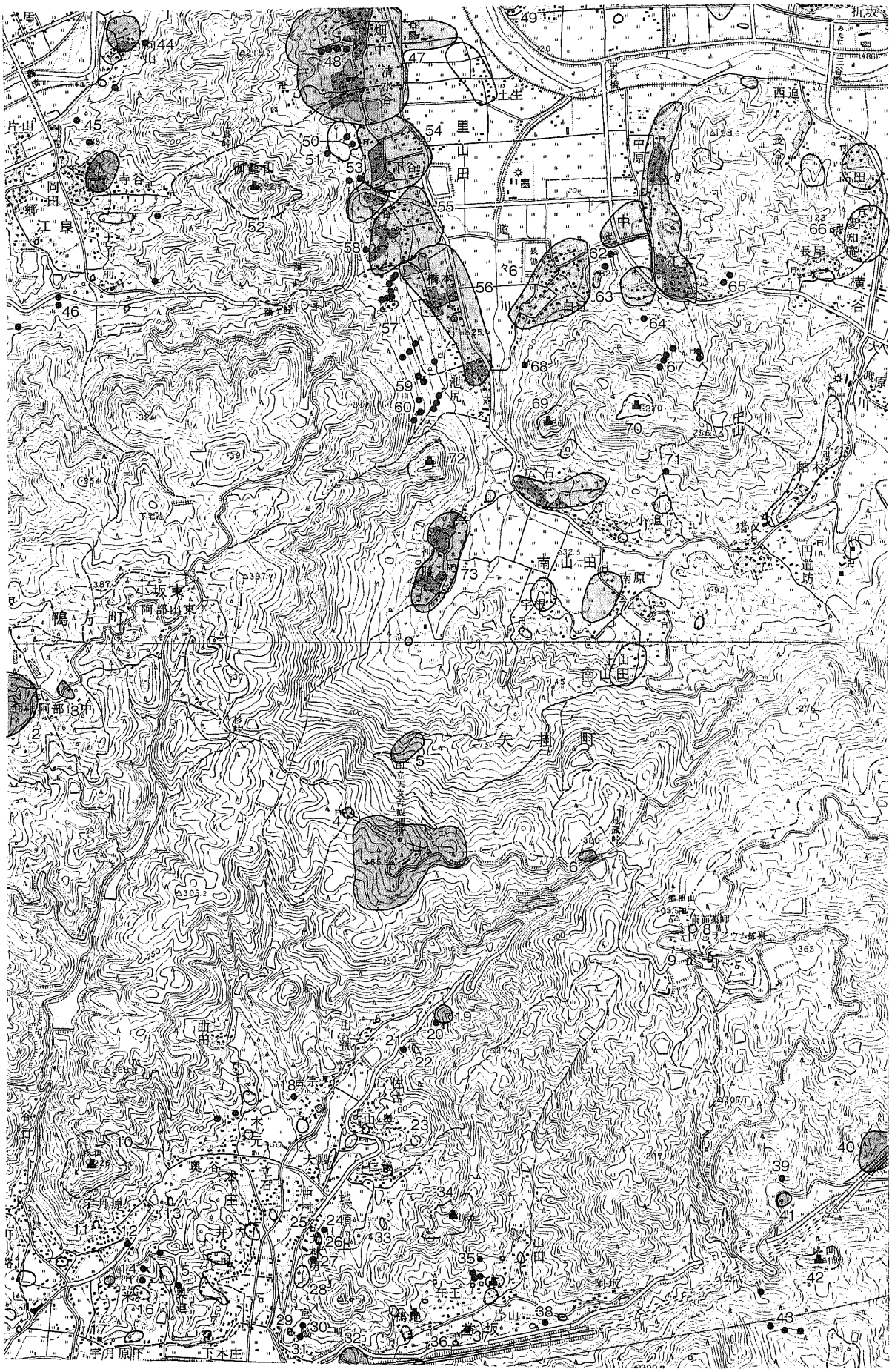
縄文時代になると、金光町占見新田の加賀池遺跡から縄文時代早期の押型文土器が出土し、矢掛町東三成の奥迫遺跡では早期の押型文土器と前期の土器が出土している。また鴨方町益坂の向原遺跡で後期の深鉢が出土し、鴨方町小坂東土井谷では後期の土器が採集されている。さらに奥迫遺跡・矢掛町里山田の清水谷遺跡からも後期・晩期の土器片が出土しており、竹林寺天文台遺跡周辺に分布する縄文時代の遺跡の多くが後期以降のものである。

弥生時代になると、遺跡が飛躍的に増加する。前期には、清水谷遺跡一本木地区に島状の微高地を利用した環濠集落が出現する。この環濠集落からは、６軒の竪穴住居や30棟以上の掘立柱建物・柵などが検出され、集落内における建造物の配置が明らかとなった。環濠内の竪穴住居は、平面形態が円形を呈し、中央穴を挟む２本の柱穴を有する「松菊里型住居」である。微高地西側の低位部からは水田が検出されている。また鴨方町小坂東の犬飼本谷遺跡では、木葉文が施された壺が出土している。



第１図　遺跡位置図

弥生時代中期にはさらに遺跡が増加し、山間部や自然堤防上にも集落が広がる。中期の遺跡として、鴨方町と矢掛町の境界に位置する地蔵峠南の地蔵峠遺跡や、竹林寺山南側に



第2図　調査地周辺の主要遺跡分布（1/30,000）

弥生時代集落・散布地　●古墳　□古墓等　山城

1	竹林寺天文台遺跡	2	阿部山遺跡	3	阿部山遺跡	4	竹林寺遺跡	5	竹林寺・地蔵谷遺跡
6	地蔵峠遺跡	7	遙照山廃寺	8	遙照山山頂遺跡	9	遙照山瓦窯跡	10	杉山城跡
11	宇月原窯跡	12	宇月原塚古墳	13	杉谷焼窯跡	14	向山古墳群	15	奥迫古墳群
16	向山土器棺墓	17	米遺跡	18	坪古墳	19	段林遺跡	20	段林古墳
21	塚地古墳	22	道面遺跡	23	金屋遺跡	24	地頭上八幡塚古墳	25	八幡五輪塔
26	地頭上八幡神社遺跡	27	光林坊古墳	28	光林坊遺跡	29	日吉神社遺跡	30	日吉神社古墳
31	日吉塚古墳	32	和田遺跡	33	桶路遺跡	34	西知山城跡	35	片山塚古墳群
36	向原遺跡	37	向原古墳	38	阿坂古墳	39	大石古墳	40	上竹西の坊遺跡
41	カナクロ田遺跡	42	城山城跡	43	加賀谷古墳群	44	向山古墳	45	片山古墳群
46	郷ノ上古墳群	47	清水谷遺跡	48	畑中古墳群	49	茶臼山城跡	50	四頂山古墳
51	下谷古墳	52	伽藍山城跡	53	三頂山古墳群	54	里山田下谷遺跡	55	里山田上谷遺跡
56	橋本遺跡	57	橋本古墳群	58	橋本荒神塚古墳	59	雷師神社古墳群	60	池尻古墳群
61	白江遺跡	62	芋岡山古墳群	63	芋岡山遺跡	64	中池ノ内遺跡	65	江本祐安寺古墳群
66	妙泉寺境内古墓群	67	安居寺谷古墳群	68	王子の塚古墳	69	船が迫山城跡	70	中山城跡
71	小迫大塚古墳	72	山田古城跡	73	神之脇遺跡	74	上山遺跡		

位置する鴨方町地頭上の段林遺跡・金光町の上竹西の坊遺跡などが知られている。段林遺跡では分銅形土製品や土器が出土し、上竹西の坊遺跡では竪穴住居が６軒検出され、中期中葉の土器、石鏃や石包丁、分銅形土製品等が出土している。また矢掛町南山田の神之脇遺跡・上山遺跡、東三成の奥迫遺跡、里山田の清水谷遺跡で土器が出土したほか、畑中散布地でも中期の土器が採集されている。これらの遺跡の分布から、弥生時代中期には竹林寺山山麓に集落が点在していたことが想定できる。

弥生時代後期になると、平地丘陵と高地に集落が集中する。段林遺跡は標高120m、道面遺跡は標高116mの山塊中腹に立地しており、平地丘陵と高地の中間に位置する集落といえる。段林遺跡では径７m前後の竪穴住居が検出され、鉄鏃や鉄製刀子、玉類・土器などが出土している。道面遺跡では竪穴住居２軒と柱穴列・貯蔵穴が検出されている。竪穴住居は、２軒とも平面形態が円形を呈し、径は5.4mと約７mと推定されている。竹林寺天文台遺跡は、今回の調査地点の西側標高360mの尾根上にも遺跡が広がっており、過去の確認調査において焼失住居を含む竪穴住居２軒が検出されている。矢掛町では、里山田・中・東三成を中心に丘陵部で遺跡が増加し、里山田には清水谷遺跡・里山田上谷遺跡・里山田下谷遺跡、中には中池ノ内遺跡・白江遺跡といった集落が形成された。白江遺跡では溝状の遺構から土器がまとまって出土しており、中池ノ内遺跡では平面形態が円形を呈する径約4.5mの竪穴住居が検出されている。この住居が廃絶した後、住居域の南部に土器棺を囲むように土壙墓を配置した墓域がつくられている。里山田上谷遺跡では竪穴住居内から後期後半の土器が出土し、奥迫遺跡では４軒の竪穴住居が重複して検出されている。また鴨方町六条院中の森山遺跡は、泉山北側から延びる低丘陵に立地する集落遺跡であり、竪穴住居２軒と大量の土器や分銅形土製品が出土している溝などが検出されている。竪穴住居は、平面形態が円形を呈する径約６mのものと3.5m以上のものが検出されている。

弥生時代後期末には、土壙墓が散見できるようになる。矢掛町中白江の芋岡山遺跡は尾根上に位置し、30基からなる土壙墓群が築かれた。土壙墓群周辺の土壙や溝からは土器が出土しており、立坂型の特殊壺・特殊器台が含まれている。また鴨方町益坂の和田遺跡でも土壙墓群が検出され、そのうち１基の土壙墓からは向木見型の特殊器台や勾玉・管玉などの玉類が出土している。

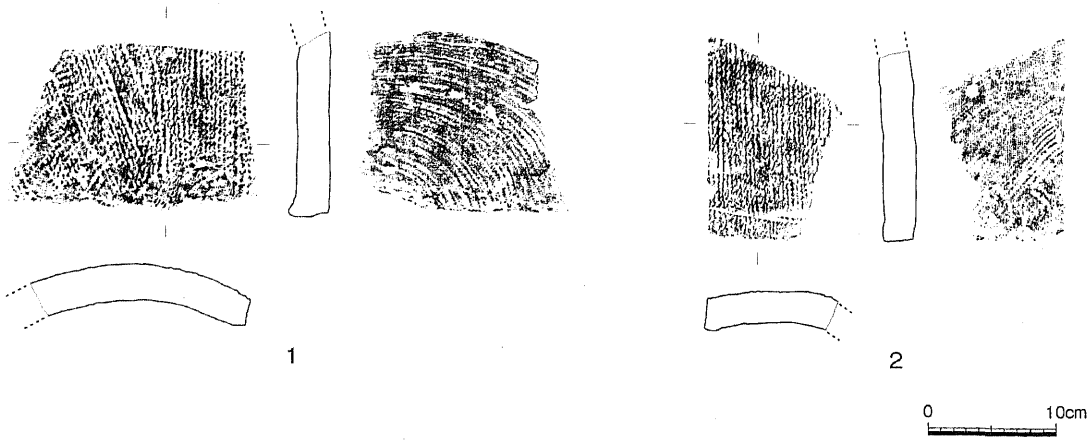
鴨方町では、古墳時代前期になると集落から離れた丘陵上に箱式石棺をもつ円墳が築かれる。小坂東の宇月原向山１号墳は盛土が消失しており墳形は不明であるが、長さ1.7m、最大幅0.45mの組合せ

箱式石棺の中から２体分の人骨と鉄剣・鉇・鎌が出土している。地頭上の光林坊古墳は丘陵頂部に位置し、長さ2.0m、幅0.4mの箱式石棺をもつ。また本庄の坪古墳からは乳文鏡が出土している。このほか、益坂から松井には前期から中期と考えられる直径10m前後の円墳３基からなる安芸守山西南古墳群が築かれている。このうち安芸守山西南２号墳には、竪穴式石室のものと考えられる石材が残存している。また明確に古墳時代中期と位置づけられる古墳は現在のところ不明である。

古墳時代後期になると、山麓や丘陵上に横穴式石室をもつ古墳が築かれる。鴨方町地頭上の段林古墳は、盛土の大半が消失しているが直径８～９ｍの円墳と推定されている。調査時には横穴式石室が2.7m残存しており、石室内から耳環・鉄鏃・農工具・土師器・須恵器が出土している。鴨方町地頭上の宮の脇古墳は直径約14mの円墳と推定されている。石材が抜き去られていたため、石室は残存していないが、調査によって長さ5.4m以上、最大幅1.8mの玄室をもつ横穴式石室であったと考えられている。石室部分からは、耳環・銅釧・大刀・鉄釘や須恵器が出土している。地頭上の塚地古墳は直径約11mの円墳と推定され、長さ6.65m以上、最大幅1.8mの横穴式石室から馬具・耳環・鉄刀・鉄製刀子・鉄鏃・鉄釘・須恵器が出土している。鴨方町益坂の阿坂古墳は、直径約12mの円墳と推定され、全長7.7m、最大幅1.7mの横穴式石室内に耳環・鉄鏃・須恵器が副葬されていた。このほか鴨方町では、杉谷川沿いに小坂東谷口の杉谷古墳群・小坂東犬飼の犬飼古墳群、益坂川沿いには片山古墳群、鴨方川沿いには上名口古墳が築造された。このうち片山２号墳は、幅１ｍの無袖式の横穴式石室であることが確認されている。上名口古墳は、約15mと推定される円墳で、古墳周辺からは、土師器や須恵器が採集されている。鴨方町内では古墳時代を通して前方後円墳は築造されていない。

矢掛町では、鴨方町とは対比的に前方後円墳が築造されている。古墳時代前期には、東三成の丘陵斜面に推定長22mの前方後円墳である奥迫17号墳が築造された。東三成池内の中山２号墳は、全長30ｍの前方後円墳と推定されており、円筒埴輪が採集されている。茶臼山山頂の茶臼山古墳は、墳長20～23mの前方後円墳である。また、鴨方町と同様に箱式石棺をもつ古墳が築かれており、里山田土井の土井１号墳や、宮の下矢掛神社裏山の蛸ノ頭古墳が知られている。中期の古墳として、白江の芋岡山１号墳があげられる。この古墳からは老年男性の人骨と竪櫛が出土している。

後期になり、阿部山東麓に位置する池尻古墳群や橋本古墳群といった群集墳が形成される。橋本古墳群は15基の古墳から構成され、古墳群中最大規模の橋本荒神塚古墳は、約20mの円墳と推定され、



第3図　伝遙照山廃寺の平瓦（1/6）

横穴式石室は7.5mが現存し、石室内には岡山県内で６例しか確認されていない石棚を有する。また古墳時代終末期には南山田の中山南麓に小迫大塚古墳が築かれる。この古墳は矢掛町の後期古墳では最大規模の東西約27m、南北約25mの方墳であり、内部主体は全長10.7m、奥壁幅2.4mの大規模な横穴式石室である。

古代には、須恵器生産に関連する遺構や仏教に関わる遺構・遺物がみられる。上竹西の坊遺跡では７世紀頃の須恵器窯が検出され、灰原からは須恵器のほか、円面硯が出土している。この他にも製塩土器や鉄製の刀子・紡錘車などの遺物も出土している。またこの時代に仏教が広まると、地方でも仏教寺院が建立されるようになり、金光町占見には占見廃寺が建立され、礎石と瓦が検出されている。瓦には、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、平城宮六二二五系軒丸瓦、平城宮六六六三系軒平瓦、均整唐草文軒平瓦がある。占見廃寺の東100mほどの丘陵裾にはロストル式平窯の山崎瓦窯跡群が築かれている。仏教に関わる遺物は、平地部だけでなく、高地でも採集されている。標高約400mの遙照山では蓮華文軒丸瓦や平瓦（第３図－１・２）、阿部山では土製相輪が採集されており、遙照山の山岳宗教を示す資料となっている。また和田遺跡では、炭を製造する横口式製炭窯が検出され、窯の熱残留磁気から８世紀前半に操業していたことが判明している。矢掛町では小田川沿いに旧山陽道が整備された。矢掛町毎戸の毎戸遺跡は旧山陽道に面しており、100m四方の区画内に３棟の掘立柱建物などが配置されている。遺物には大量の瓦のほか、「馬」の文字が書かれた土師器盤が出土しており、旧山陽道の小田駅家に当たると考えられている。また里山田の清水谷遺跡柚木地区では、総柱建物や掘立柱建物が検出され、緑釉陶器や円面硯などが出土している。

中世には、鴨方町小坂西の沖の店遺跡で土師器焼成窯が検出されており、椀や小皿のほかに瓦を生産していたことが判明している。またこの時代には、鴨方町小坂東の杉山城（標高223m）や益坂の西知山城（標高183m）、鴨山城（標高168m）、矢掛町と倉敷市真備町の境界に位置する猿掛城（標高370m）や矢掛町の茶臼山城（標高96m）・山田古城（標高210m）・船が迫山城（標高186m）・中山城（標高270m）といった中世山城が多数築かれている。このうち鴨山城は、一の段を中心に郭が北と南東にのびる連郭式山城で、石垣や堀切がみられる。また庄氏と三村氏との「猿掛合戦」の舞台となった猿掛城は、土塁に囲まれた全長約200mの山城である。猿掛城の南西に位置する御土井では庄氏館跡が発見されている。猿掛城は庄氏の居城であったが、後に毛利氏の配下となった。その後、茶臼山城が毛利氏によって猿掛城の出城として築かれる。茶臼山城は、濠や35以上の郭に囲まれた平山城で、柱穴や礎石などが検出されている。このほか、鴨方町本庄木ノ元のゆるぎ堂にまつられる花崗岩一石を丸彫にした地蔵石仏が彫成された。ゆるぎ堂地蔵石仏は、刻文から正慶元(1332)年の作と確認でき、この時代の丸彫石仏としては大変珍しく、岡山県重要文化財に指定されている。

江戸時代になると鴨方藩が成立し、支藩である鴨方藩と本藩の岡山城下を結ぶ鴨方往来が整備された。鴨方往来に面した高戸家住宅は、江戸時代前期に建築されたものと考えられており、貞享４（1687）年に修理を行ったことが棟札により判明している。高戸家住宅は、岡山県内で最も古い町家であり、現在「かもがた町家公園」として改修され、母屋が県指定重要文化財、新宅が市指定文化財となっている。また矢掛町には旧山陽道の宿駅が置かれ、宿場町として栄え、石井家が大名や幕府の役人などを宿泊させる本陣、高草家が脇本陣をつとめた。現在、本陣・脇本陣は国の重要文化財に指定されている。

（三浦孝章）

主要参考文献

宗澤節雄「浅口郡金光町占見瓦跡発見報告」『吉備考古』第81・２合併号　1951
鎌木義昌「岡山県浅口郡占見廃寺址」『日本考古学年報』２　成文堂新光社1954
間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第１号　倉敷考古館1966
間壁忠彦「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第３号　倉敷考古館1967
間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例（浅口郡鴨方町宇月原）」『倉敷考古館研究集報』第４号
倉敷考古館1968
伊藤晃「加賀池・宮地池遺跡および益坂散布地の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２
岡山県教育委員会1974
下澤公明「毎戸遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』５　岡山県教育委員会1974
石田寛『岡山県の地理』　福武書店1978
平井勝「鴨方町片山古墳群の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10　岡山県教育委員会1980
伊藤晃ほか「和田遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　岡山県教育委員会1981
浅倉秀昭「里山田下谷遺跡・上谷遺跡確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会1982
間壁忠彦ほか『矢掛町史』本編　矢掛町1982
高畑知功「奥迫遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』60　岡山県教育委員会1985
高畑知功「茶臼山城跡」『岡山県埋蔵文化財報告』16　岡山県教育委員会1986
岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会『歴史的町鴨方の変貌－陣屋町から近郊住宅地へ－』
地域研究第29集1987
井上弘「上竹西の坊遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　岡山県教育委員会1988
間壁忠彦「第二章　郷土のあけぼの」『鴨方町史』本編　鴨方町1990
桑田俊明「白江遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』80　岡山県教育委員会1992
尾上元規ほか「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』108　岡山県教育委員会1996
平井勝「岡山県矢掛町橋本荒神塚古墳（橋本15号墳）の測量調査」『古代吉備』第19集　古代吉備研究会1997
鴨方町教育委員会『かもがた町家公園記録集』1998
小林利晴ほか「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132　岡山県教育委員会1998
杉山一雄「清水谷遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化発掘調査報告』134　岡山県教育委員会1998
岡本寛久「道面遺跡・塚地古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』147　岡山県教育委員会1999
直原伸二ほか「清水谷遺跡〈一本木地区〉」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』１　矢掛町教育委員会2001
光永真一ほか「里山田下谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』31　岡山県教育委員会2001
小林利晴「神之脇遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』169　岡山県教育委員会2002
安倍晴明記念公園（仮称）整備計画策定委員会『安倍晴明記念公園（仮称）整備計画』2003
金光町史編纂委員会編『金光町史』本編　金光町2003
藤江望「清水谷遺跡〈柚木地区〉」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』２　矢掛町教育委員会2003
小林利晴「国立天文台岡山天体物理観測所望遠鏡施設建設に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』34
岡山県教育委員会2004
別府信吾『「備中岡山藩」の世界－岡山本支藩の研究』　吉備人出版2008
水田貴士「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』１　浅口市教育委員会2008

第２章　発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

竹林寺天文台遺跡に所在する自然科学研究機構国立天文台岡山天体物理観測所（以下、岡山天体物理観測所という。）と岡山県教育委員会（以下、県教委という。）との、新望遠鏡施設建設に係る協議は、平成13年度に始まる。最高所に位置する188cm反射望遠鏡ドームの北西に続く尾根上に、気象等の観測装置を設置する内容であったが、盛り土による平坦面の造成に留まり、慎重工事での対応とした。

平成14年度には、南へ続く尾根上に２基の新望遠鏡施設建設が計画され、うち１基が京都大学に係るものであった。平成15年度に県教委が実施した確認調査により、２か所とも弥生時代の竪穴住居等が所在することが明らかになり、保存協議の結果、事前の発掘調査が必要と判断された。ところが、年度末になって、いま１基を計画していた広島大学が建設地を変更したため、平成16年度に予定されていた県教委による発掘調査は、急遽中止となった。

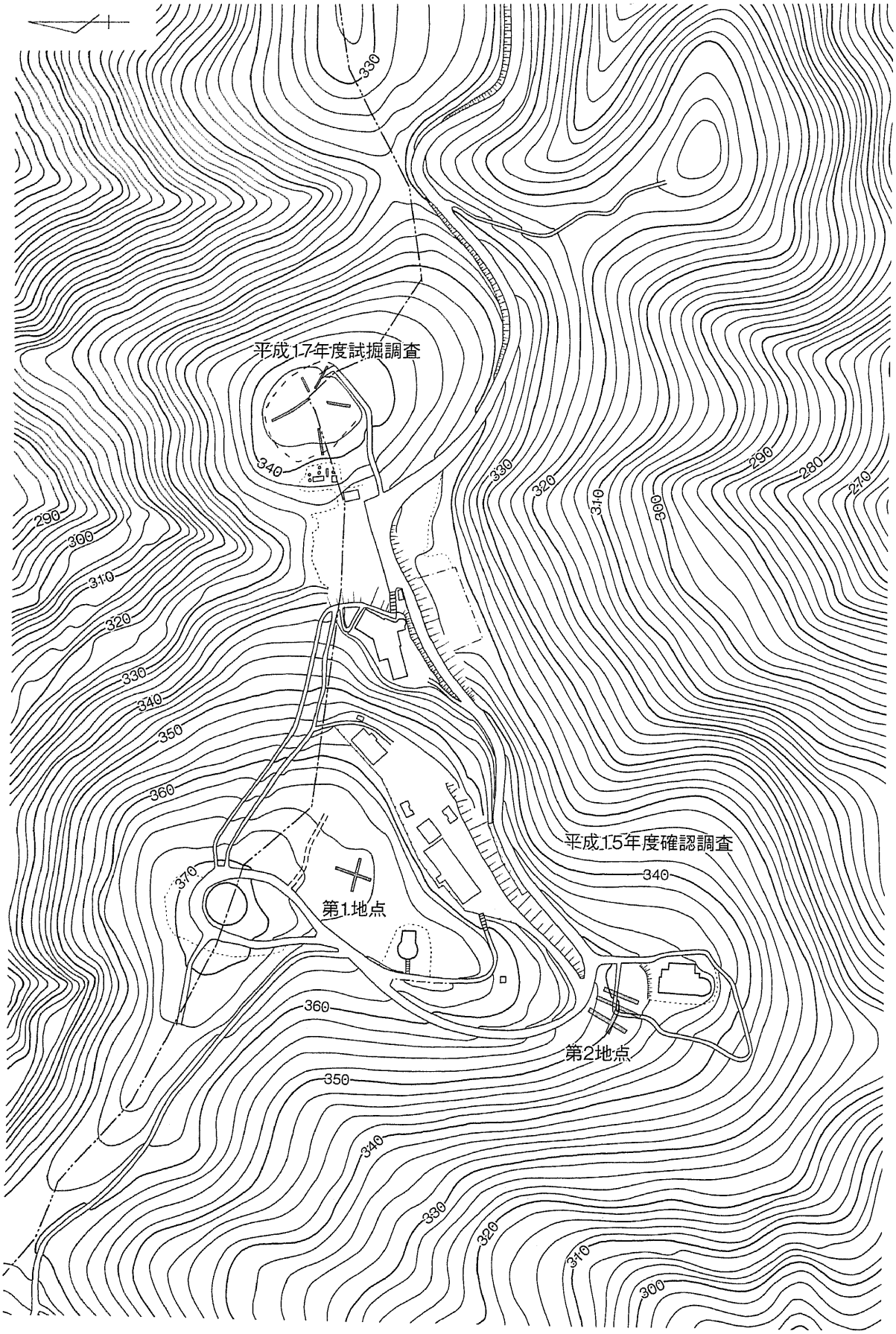
この間に、岡山天体物理観測所は、当時は埋蔵文化財包蔵地としていなかった竹林寺天文台遺跡の東に鞍部を経て所在する山頂を造成し、観測装置を設置した。そして、その観測結果に基づいて、この位置に京都大学が新望遠鏡施設を建設することとした。

平成17年度に県教委が実施した試掘調査の結果、当該地は弥生時代以降の埋蔵文化財包蔵地と判断され、竹林寺天文台遺跡の範囲を拡大することとなった。これを受けた保存協議の結果、約1,000㎡について発掘調査が必要となり、調査対象地が浅口市と矢掛町にまたがることから、県教委が国立大学法人京都大学からの委託を受けて、平成19年度に発掘調査を実施することとした。

平成18年度に入って、新望遠鏡施設は株式会社ナノオプトニクス研究所（以下、ナノオプトニクスという。）が建設し、京都大学へ寄贈する計画であることが明らかとなったが、県教委の調査については、調査面積を約850㎡に縮小して、京都大学からの委託で行うことを再確認した。しかるに、またしても年度末に至って、ナノオプトニクスの資金計画変更と、京都大学の委託不可という原因者側の都合により、調査計画は中止された。このため県教委は、浅口市教育委員会（以下、市教委という。）及び矢掛町教育委員会（以下、町教委という。）と協議の上、以後この事業をナノオプトニクスによる民間開発事業とみなし、対応を市教委に委ねることとした。

その後、平成19年９月に、岡山天体物理観測所から市教委へ発掘調査の打診がなされたため、11月に、岡山天体物理観測所、京都大学、ナノオプトニクスと、県教委、市教委、町教委の６者が協議し、平成20年度に市教委が発掘調査を実施し、その費用をナノオプトニクスが負担することが了解された。紆余曲折は続く。調査着手１か月前の平成20年３月、ナノオプトニクスが資金を国立天文台へ寄付し、岡山天体物理観測所が新施設建設のための土地整備を行うこととなり、調査対象面積も約700㎡に縮小された。このことについては、岡山天体物理観測所、県教委、市教委及び町教委の４者で協議し、変更を了解した。

契約が整い、現地で発掘調査が開始されたのは４月末日である。　（光永真一）



第4図　試掘・確認調査位置図（1/3,000）

第２節　発掘調査および報告書作成の経過

１　発掘調査

発掘調査は、平成20年４月24日付で文化財保護法第99条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を提出し、平成20年４月30日から本市教育委員会事務局国際文化交流課職員３名が調査にあたった。調査着手以前に調査区中央から西側部分において多くの弥生土器片を表採することができた。調査は、調査以前の地形測量をしたのち、人力で遺構の検出・掘り下げを行い、随時、遺構の実測・写真撮影を行った。６月上旬には悪天候が続き、発掘現場での作業が中断することになり、７月中旬まで現地作業を実施することとなった。調査では、弥生時代後期の竪穴住居５軒、掘立柱建物２棟を中心とする遺構が検出され、それに伴って多くの遺物が出土した。竪穴住居が複雑に重なり合っていることも判明し、調査は困難を極めたが、最終的に多大な成果が得られた。弥生時代の調査がほぼ終了した時点で、遺構の遠景・全景の空撮をラジコンヘリにより行った。７月中旬には発掘調査を終了し、その後、調査区の埋め戻しを行い、調査事業を終了した。同年７月30日付で井原警察署長及び玉島警察署長あてに文化財保護法第100条に基づく「埋蔵文化財発見通知」を提出した。成果として、主に弥生時代後期の高地性集落跡や古墳時代以降の遺構を確認した。出土した遺物は、コンテナ箱にして17箱を数えた。

なお、発掘調査期間中に浅口市立寄島中学校生徒による職場体験で出土した土器の洗浄及び注記作業の体験学習が行われた。７月12日には、現地説明会を開催し、遺構や遺物の説明や、出土遺物・写真パネル・発掘調査道具・調査器材等の展示を行い、市内外60名を越える参加者で賑わった。

今回の調査の模様は、浅口市のホームページに「竹林寺天文台遺跡発掘調査速報」を掲載し、随時情報更新を行い、発掘現場の情報を発信した。

２　報告書

報告書作成は、平成20年７月30日から平成21年３月19日までの期間、浅口市教育委員会内(浅口市中央公民館)において行った。

発掘調査は平成20年７月29日に終了していたが、調査の最終段階まで遺構および遺物の検出作業を継続して行っていたことから、発掘調査期間中に全ての遺物の洗浄および注記、遺物整理、遺構図面整理、写真整理といった整理作業を終了することができなかった。そのため、報告書作成業務は、これらの未整理の遺物、図面、写真等の整理作業から開始することとなった。出土した遺物はコンテナ17箱であったが半数が未洗浄であったため、洗浄作業が急務となった。土器の注記・復元・抽出、石製品･金属器の抽出、遺物実測作業を進行した。調査で検出し、整理を行った遺構は、竪穴住居２軒、掘立柱建物２棟、土壙墓１基、土壙33基、溝７条、柱穴４基に及んだ。出土した遺物のうち、土器176点、石製品31点、金属器２点、土製品３点を本書に掲載している。なお、報告書に掲載した出土遺物については、報告書に掲載されている遺構名及び遺物番号で、また、他の遺物は調査時の旧遺構番号で保管している。なお、これらの遺物は図版や写真とともに、本市中央公民館および鴨方郷土資料館収蔵庫で保管している。

（水田貴士）

３　調査・整理体制

平成20年度

浅口市教育委員会

教 育 長	工藤　　進
教育次長	柚木　忠明

国際文化交流課

課　　長	谷本　　靖
埋 蔵 文 化 財 専 門 員	水田　貴士（事務・調査・報告書担当）
埋蔵文化財発掘調査員	三浦　孝章（調査・報告書担当）
埋蔵文化財発掘調査員	藤原　範子（整理・報告書担当）

報告書作成協力者

山本敏夫（浅口市文化財保護委員）

定金司郎

浅口市文化財保護委員会委員

秋田征矢雄（会長）　川﨑恪郎（副会長）　臼井洋輔　大島至孝　貝畑正巳

金光英子　西野良一　花房泰志　原田玲子　藤澤　雅　山本敏夫　弓削　崇

発掘調査作業員　（社団法人浅口市シルバー人材センター派遣）

井上弘保　今井脩二　浦上宗一　太田清明　尾崎満子　吉川潤朗　栗山幸子　小林　紘

定兼清明　佐野友則　清水浩介　平田耕三　山下恵美子　山下　勝　横山昭三

遺物整理作業員　（社団法人浅口市シルバー人材センター派遣）

柚木富喜子

第３節　日誌抄

日誌抄

平成20年4月４日（金）下草刈り

平成20年4月11日（金）調査前地形測量

平成20年4月25日（金）重機による表土掘削

平成20年4月28日（月）発掘資材搬入

平成20年4月30日（水）発掘調査開始

平成20年5月１日（木）古墳時代以降の遺構検出作業

平成20年5月20日（火）古墳時代以降の遺構面調査終了、弥生時代遺構検出作業

平成20年6月19日（木）浅口市立寄島中学校職場体験

平成20年7月12日（土）現地説明会（参加者：61名）

平成20年7月15日（火）航空写真撮影

平成20年7月16日（水）弥生時代遺構面調査終了

平成20年7月17日（木）発掘資材撤収

平成20年7月29日（火）重機による埋め戻し、調査終了

第１表　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（第93条）

岡山県文書番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	主体者	期間	処理の内容・理由
教文埋第115号 H20.4.21	集落跡 竹林寺天文台遺跡	浅口市鴨方町本庄3037-5及び小田郡矢掛町南山田2808-27	700	その他建物（天文台）	大学共同利用機関法人自然科学研究機構 機構長　志村令郎	H20.4.25 ～ H20.7.29	発掘調査

発掘調査の報告（第99条）

文書番号 日付	周知・周知外	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地の有無	主体者	担当者	期間
浅教国第55号 H20.4.24	周知	集落跡 竹林寺天文台遺跡	浅口市鴨方町本庄3037-5及び小田郡矢掛町南山田2808-27	700	その他建物（天文台）	有	浅口市教育委員会 教育長　工藤進	水田貴士 三浦孝章 藤原範子	H20.4.25 ～ H20.7.29

遺物発見通知（第100条）

岡山県文書番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保有場所
教文埋第614号 H20.7.30	弥生土器・須恵器・石製品・金属器・土製品 計整理箱８箱	浅口市鴨方町本庄3037-5 竹林寺天文台遺跡	H20.4.25 ～ H20.7.29	浅口市教育委員会教育長 工藤進	浅口市鴨方町六条院中3050 浅口市長　田主智彦	浅口市教育委員会
教文埋第615号 H20.7.30	弥生土器・須恵器・石製品・金属器・土製品 計整理箱９箱	小田郡矢掛町南山田2808-27 竹林寺天文台遺跡	H20.4.25 ～ H20.7.29	浅口市教育委員会教育長 工藤進	小田郡矢掛町矢掛3018 矢掛町長　山野通彦	浅口市教育委員会

写真１　現地説明会の様子

第３章　発掘調査の概要

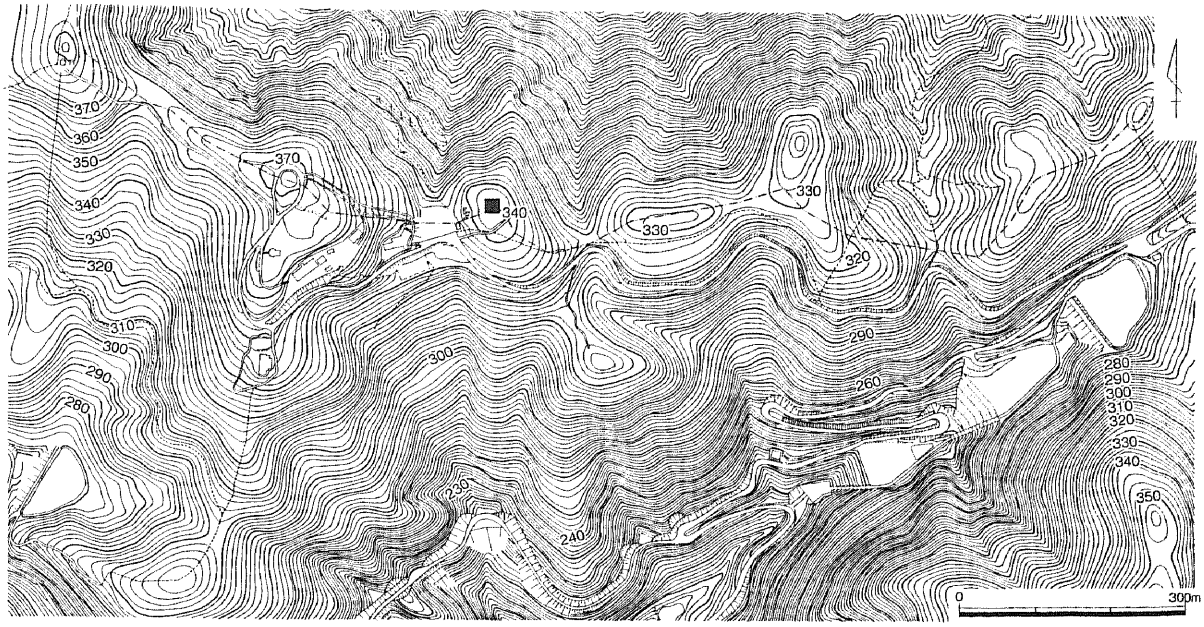
第１節　調査の概要

１　調査前の状況

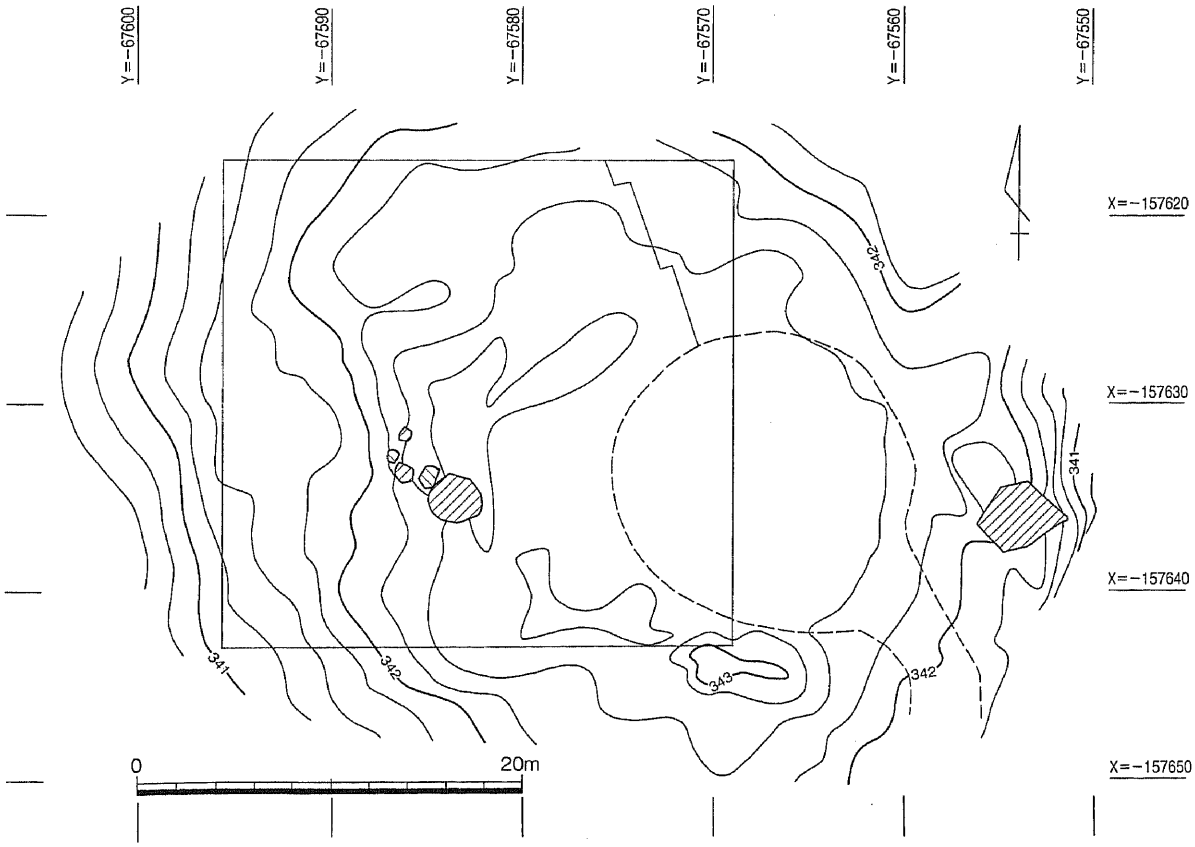
竹林寺天文台遺跡は、標高約380mの竹林寺山から東側へ派生する尾根上に立地する。天文台遺跡という名称のとおり遺跡の大部分が国立天文台岡山天体物理観測所の敷地内に位置する。竹林寺天文台遺跡は、今回の発掘調査により現在３基のドームが設置された標高約360～370mの丘陵頂部平坦地（西側）と今回発掘調査を実施した標高約340mの丘陵頂部平坦地（東側）を中心に遺跡が拡がるものと思われる。

昭和30年代の天文台建設に伴う造成工事により大規模な地形改変を受けていると考えられる。昭和41年に西側の丘陵南端に位置する65㎝クーデ型太陽望遠鏡ドームの建設工事中に弥生土器・石鏃・石包丁等が出土している。また、同時に箱式石棺も不時発見されている。平成15年度に行われた確認調査ではこの場所の北側隣接地で円形を呈する竪穴住居が検出されている。現在は西側と東側は駐車場建設により地形的に断絶しているが、天文台建設以前の地図では西側頂部平坦地から東側へ急斜面となり鞍部を通じて東側頂部平坦地の西側緩斜面へ連なっている。また、当調査地点は昭和30年代の西側造成工事と同時期に頂部の造成工事が実施され、この段階で頂部は大部分が削平を受けているとみられる。頂部には巨大な岩が複数露出している状況である。頂部の円形を呈しているものは観測装置設置に伴うコンクリート造成である。発掘調査着手以前には、調査区内の北側及び西側で地形的に窪む箇所を２箇所確認し、また、調査区内の西側緩斜面では多くの弥生土器を表採することができた。

第5図　国立天文台岡山天体物理観測所建設以前の地形（1/10,000）



第6図　現在の地形と調査地点（1/10,000）



第7図　調査地点の調査前地形測量図（1/400）

2　調査の概要

竹林寺天文台遺跡の当調査区は、標高343mを最高所とする東西70m、南北90mの丘陵頂部に位置する。この丘陵頂部約700㎡の全面調査を実施した。調査区は、丘陵頂部の北側及び西側に延びる緩斜面地が対象となった。頂部は造成工事時の削平により平坦面が広がりをみせる。周辺山麓の水田との比高差は、浅口市鴨方町本庄側で約290m、矢掛町南山田側で約300mを測る。

平成17年度の試掘調査では、75㎡の調査面積で、弥生時代後期の土壙６基･溝３条を確認している。遺物では弥生時代後期の土器やサヌカイト製の石器が出土している。

発掘調査は、梅雨時期が従来よりも早く、また山上の天気は変化しやすいことから天候には悩まされた。また、包含層掘削作業時には、硬質な覆土と樹痕の除去に困難を極めた。しかし、時折みせる瀬戸内海の絶景は、作業によって蓄積された疲労の回復へと繋がった。

調査の結果、弥生時代後期の集落跡、古墳時代以降の遺構を検出した。弥生時代後期は丘陵頂部周辺までに遺構が及び、竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝、数基の柱穴を検出している。古墳時代以降は頂部の削平の影響を受けているとみられるが、調査区の中央部から西側で土壙墓、土壙、溝、数基の柱穴を検出している。

特に弥生時代後期の遺構は調査区の広範囲にわたっており､丘陵頂部全体が弥生時代後期の集落遺跡であることが判明した｡今回の調査や踏査の状況等から同丘陵全域に弥生時代の遺跡の広がりが想定される。

弥生時代の後期の遺構相互では、顕著な切り合い関係をもっておらず、丘陵上の地形利用に一定の規制が存在するようであると考えられる。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

1　概要

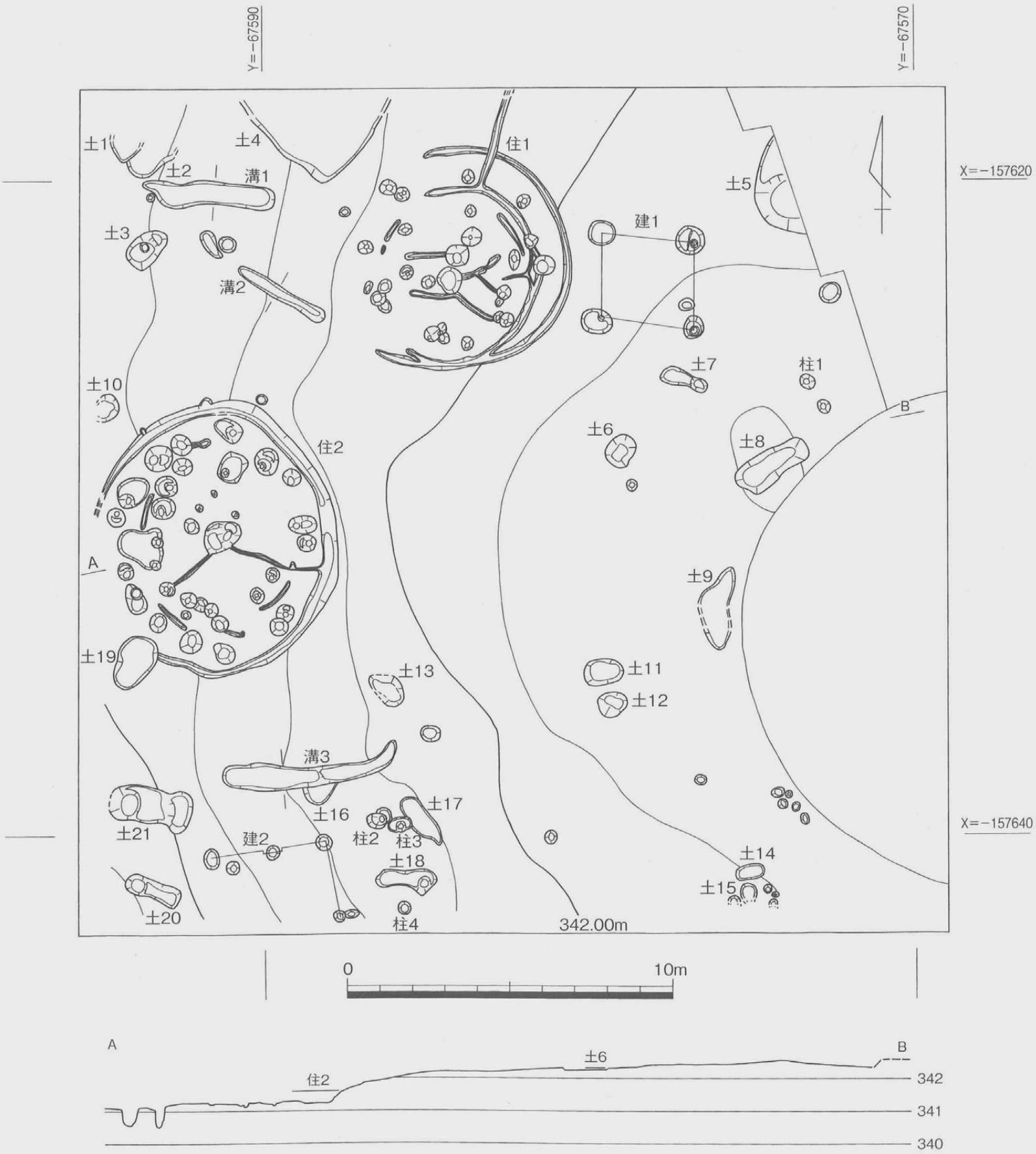
弥生時代の遺構は本遺跡において遺構数が最も多く、その配置は調査区全体で認められた。今回の調査で確認した弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居５軒、掘立柱建物２棟、土壙21基、溝３条、数基の柱穴である。弥生時代の竪穴住居・掘立柱建物の遺構は、強固な岩盤を掘削して構築されている。

竪穴住居は調査区北側と西側に配置される。北側の竪穴住居は標高342m前後の等高線に平行する。２軒分が重複しており、切り合い関係から竪穴住居の規模が縮小しているものとみられる。西側の竪穴住居は標高341.5m前後の等高線に平行する。３軒分が重複しており、切り合い関係から規模が拡張しているものとみられる。掘立柱建物は北側と南側に配置される。北側の掘立柱建物は、標高342.25m前後の頂部平坦地に築かれ、竪穴住居と隣接する。南側の掘立柱建物は、標高341.5m前後の西側斜面地に築かれている。土壙は、丘陵頂部から西側緩斜面にかけて調査区内に散在している。また、袋状土壙は未確認である。柱穴の中には柱痕跡が確認できるものもあったが、掘立柱建物を構成するものではない。調査区中央部の自然露岩周辺の調査では､調査着手以前から岩磐を想定していた。慎重に精査を行ったが、弥生土器や石錘が出土するに留まった。結果、この露岩は弥生時代当時からの風景の一部であると考えられる。

出土遺物は、弥生土器のほか土錘・土玉・土製勾玉、石鏃、石斧、石包丁、石錐、石錘等の石器、鉇とみられる鉄器などがある。弥生土器の多くは赤色顔料で塗布されたものである。

写真２　作業風景

写真３　排水作業



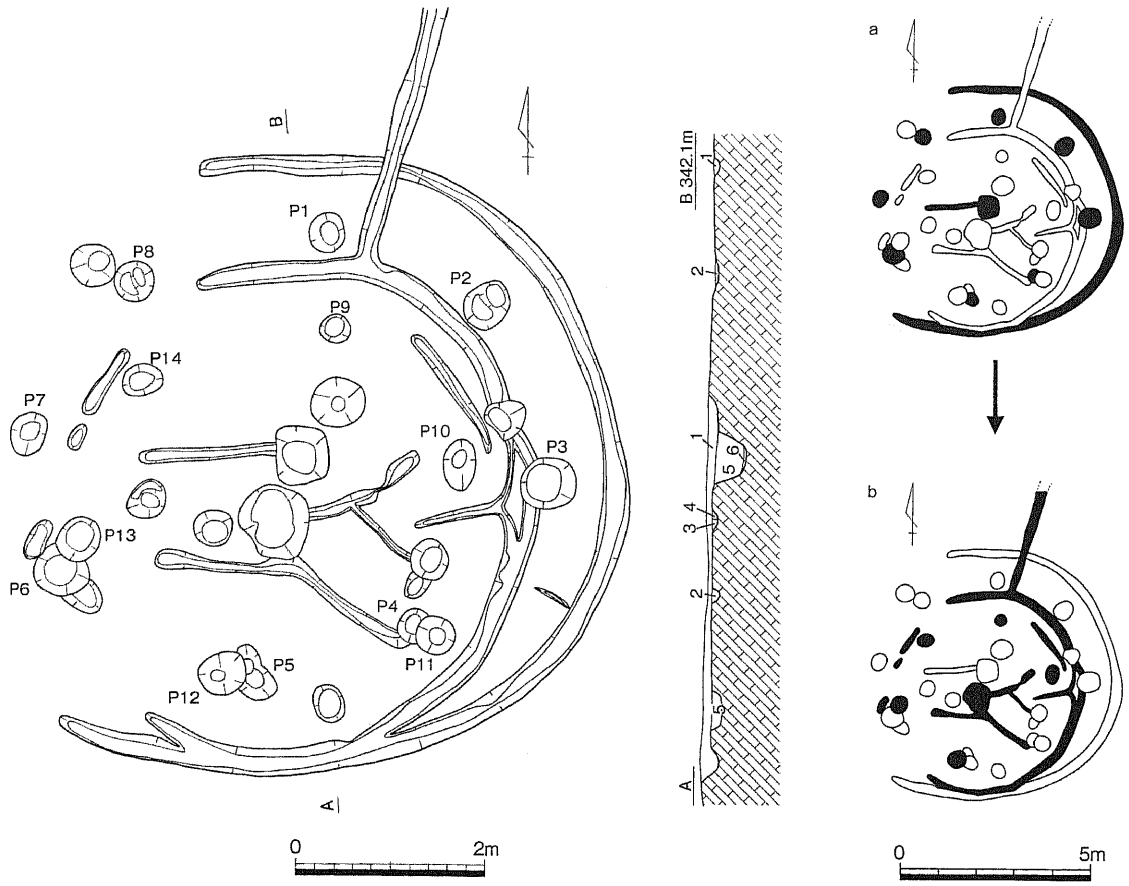
第８図　弥生時代の遺構全体と地形断面図（1/200）

２　竪穴住居

竪穴住居１ａ（第8～15図、巻頭図版３－１、図版２～５）

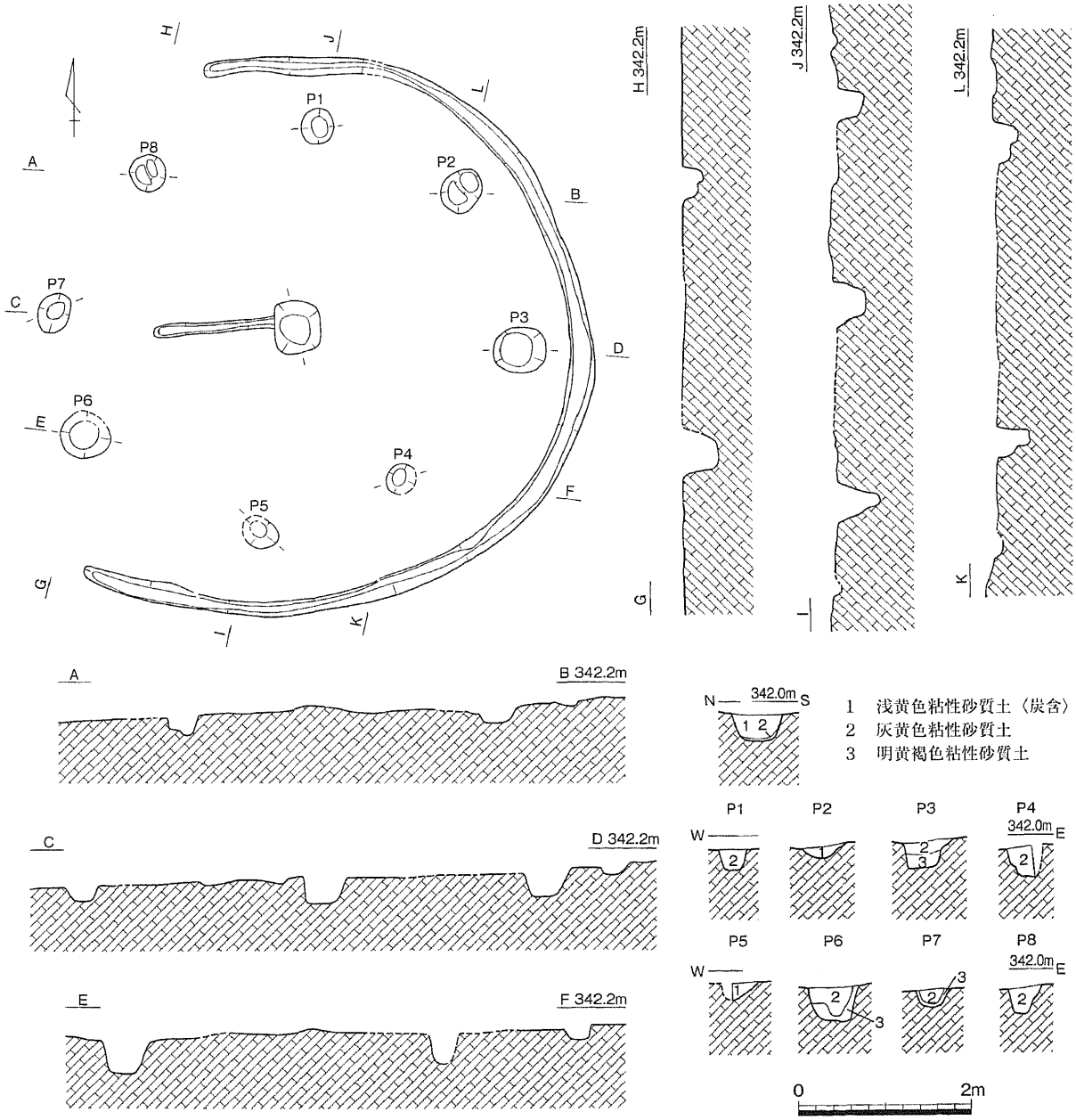
調査区北側、掘立柱建物１の西約１ｍに位置し、西側の緩斜面上に立地する。尾根線上の緩斜面上部を掘削し、低位部を埋め立てて床面を整形したものと考えられる。竪穴住居２と床面で標高差は約70 cmを測る。斜面下方に当たる部分は流失しており、全体像は明らかではない。検出した遺構は、壁体溝が２条、柱穴25本、溝数条を確認した。検出した遺構からみて、２軒分の竪穴住居が考えられた。

竪穴住居１ａの規模は長軸約660 cm、短軸650 cmを測り、円形を呈していたと思われる。溝内の床面積は約34.19 ㎡を測る。埋土は、炭を多く含有する灰黄褐色粘性砂質土である。壁体溝は現状で上幅16～25 cm、下幅９～13 cm、検出面からの深さは６～20 cmを測る。竪穴住居の中央部分には、長軸64 cm、短軸55 cm、床面からの深さ31 cmを測る土壙がある。埋土は２層に分層でき、第１層は浅黄色粘性砂質土に炭粒を多く含み、第２層は灰黄色粘性砂質土が堆積している。主柱穴の中心に配置されることから、土壙は中央穴と考えられる。また、中央穴から西側へ延びる溝１条を検出している。検出した長さは140 cm、規模は上幅15 cm、下幅７cm、検出面からの深さは９cmを測る。埋土は地山ブロックが混入する浅黄色粘性砂質土である。柱穴はＰ１～Ｐ８の８本を検出した。柱穴の掘り方はい



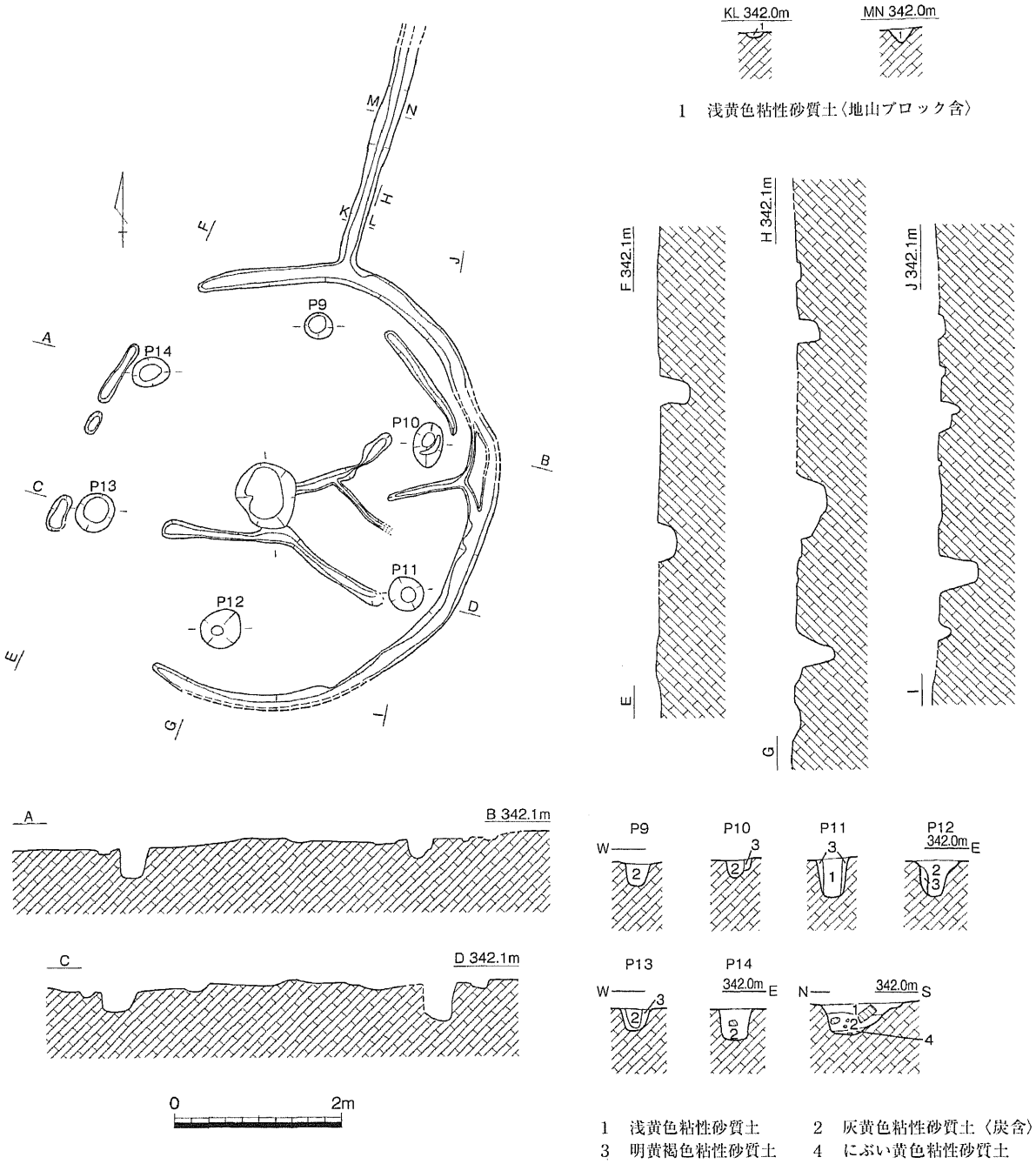
1　灰黄色粘性砂質土〈炭含〉　2　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉　3　にぶい黄褐色粘性砂質土
4　明黄褐色粘性砂質土〈地山ブロック含〉　5　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉　6　灰黄色粘質土

第９図　竪穴住居１（1/80）・竪穴住居１の変遷（1/200）



第10図　竪穴住居１a（1/80）

ずれも円形を呈し、直径39～60㎝、検出面からの深さは20～41㎝を測る。柱間はＰ１－Ｐ２で190㎝、Ｐ２－Ｐ３で200㎝、Ｐ３－Ｐ４で205㎝、Ｐ４－Ｐ５で180㎝、Ｐ５－Ｐ６で230㎝、Ｐ６－Ｐ７で155㎝、Ｐ７－Ｐ８で200㎝、Ｐ８－Ｐ１で205㎝を測る。遺物は、後述する竪穴住居１ｂに削平されていたためにほとんどなく、壁体溝や柱穴から弥生土器の甕**4**、高杯**23**・**25**が出土している。他にも柱穴から弥生土器の小片やサヌカイト剥片総重量４ｇが出土している。甕**4**は口縁端部を欠いている。外面はタテ方向のハケメ、内面はユビオサエを施す。外面には煤がみられる。高杯**23**は北東部から出土している。口縁部が杯部から上方に拡張し、口径は18.8㎝を測る。高杯**25**は脚裾端部を肥厚させ、２条の凹線文を施し、底径12.2㎝を測る。胎土中に角閃石が多く含有され、内外面に赤色顔料を塗布している。本竪穴住居の時期は後述する竪穴住居１ｂよりは古く、出土遺物から弥生時代の後期前葉に位置づけられる。

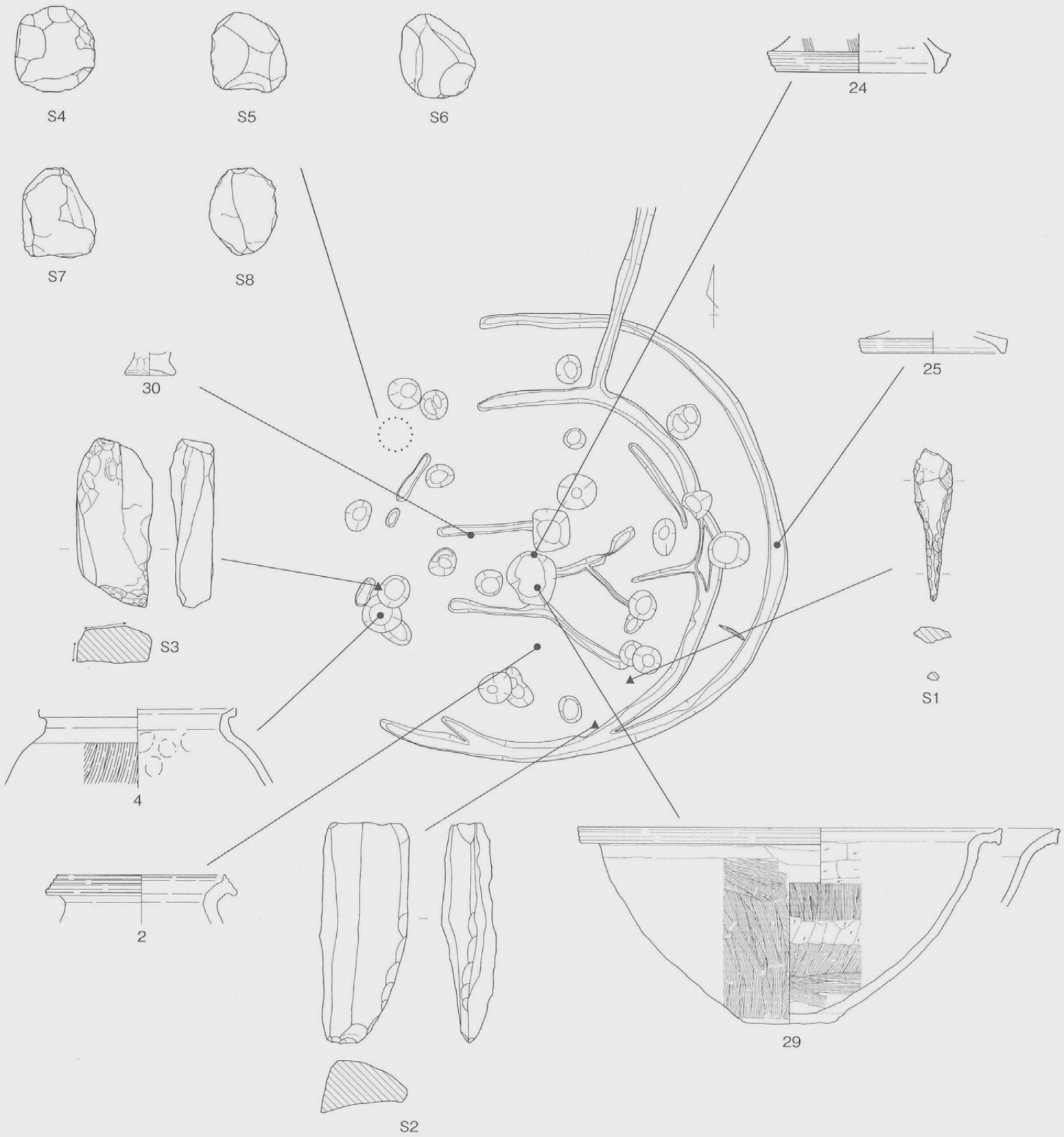


第11図　竪穴住居１b（1/80）

竪穴住居１b（第９・11図、巻頭図版３－１、図版２～５）

調査区北側、掘立柱建物１の西約２mに位置し、西側の緩斜面上に位置し、竪穴住居１ａを切っている。また、竪穴住居１ａと同様に尾根線上の緩斜面上部を掘削し、低位部を埋め立てて床面を整形したものと考えられる。斜面下方に当たる大部分は流失しており、全体像は明らかではない。西側の下方部において断続的に壁体溝を検出している。

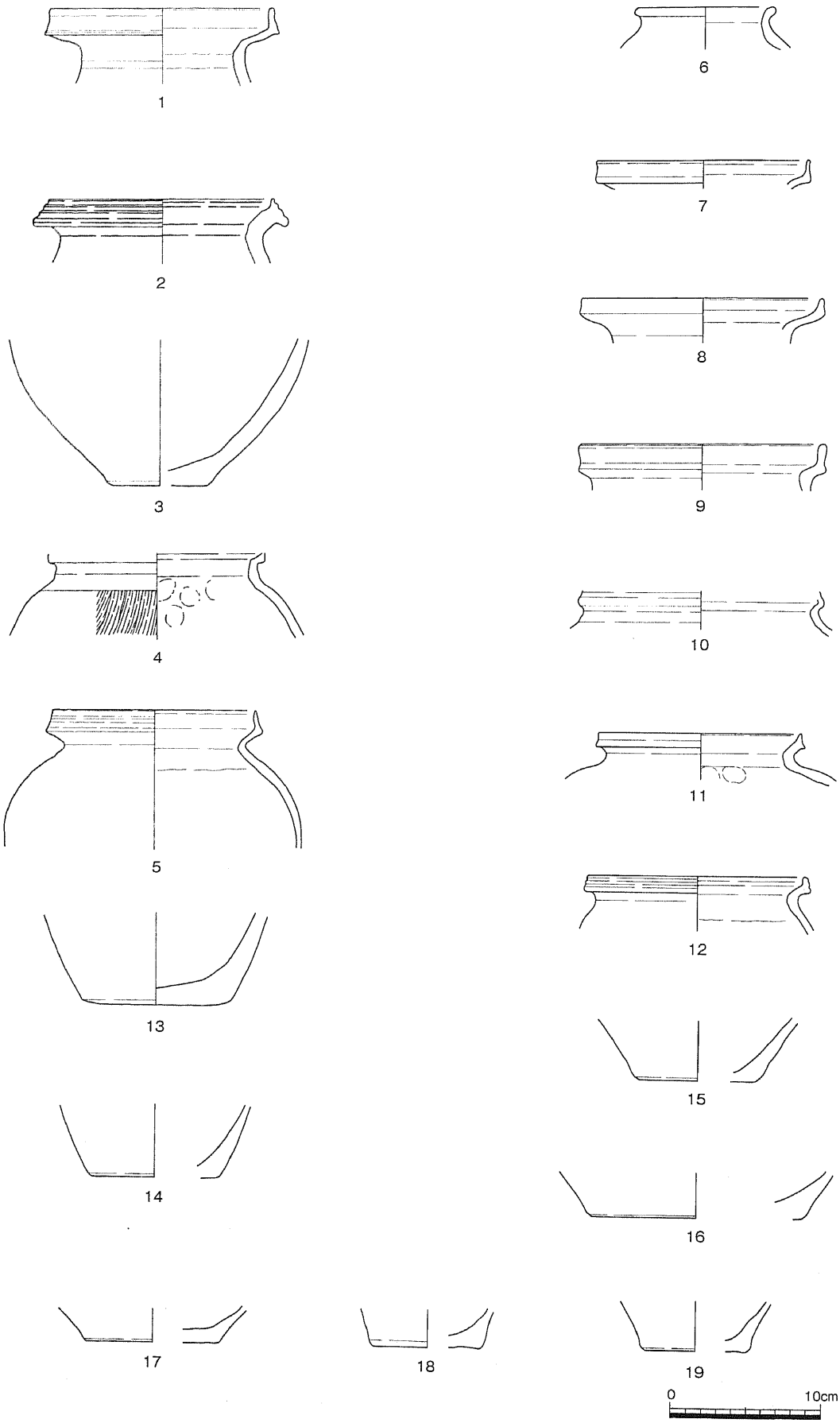
竪穴住居１ｂの規模は長軸約540 cm、短軸485 cmを測り、円形を呈していたと思われる。検出面から床面までの深さは10 cm、溝内の床面積は22.89 ㎡を測る。床面の海抜高は341.8mであり、貼り床は認められなかった。埋土は炭を多く含有する灰黄褐色粘性砂質土である。壁体溝は現状で上幅22～



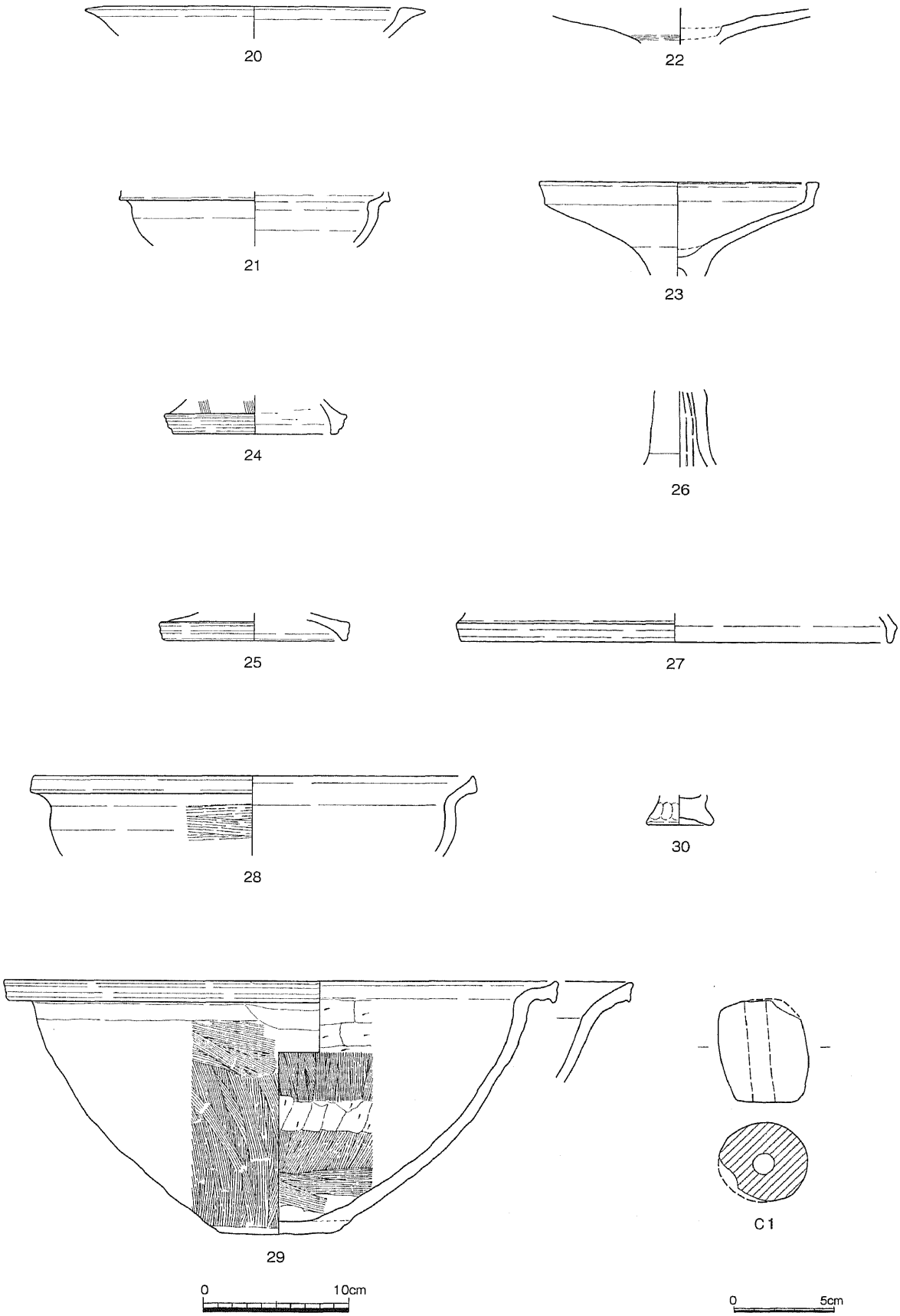
第12図　竪穴住居１遺物出土状況（1/100・１/４・１/６）

26 cm、下幅13～17 cm、検出面からの深さは８～13 cmを測る。南東側の壁体溝の底面には溝条の掘り窪みがみられる。竪穴住居の中央部分には、長軸83 cm、短軸73 cm、検出面からの深さ36 cmを測る土壙がある。埋土は３層に分層でき、第１層は浅黄色粘性砂質土、第２層は灰黄色粘性砂質土に炭粒を多く含み、第３層はにぶい黄色粘性砂質土が堆積している。主柱穴の中心に配置されることから、土壙は

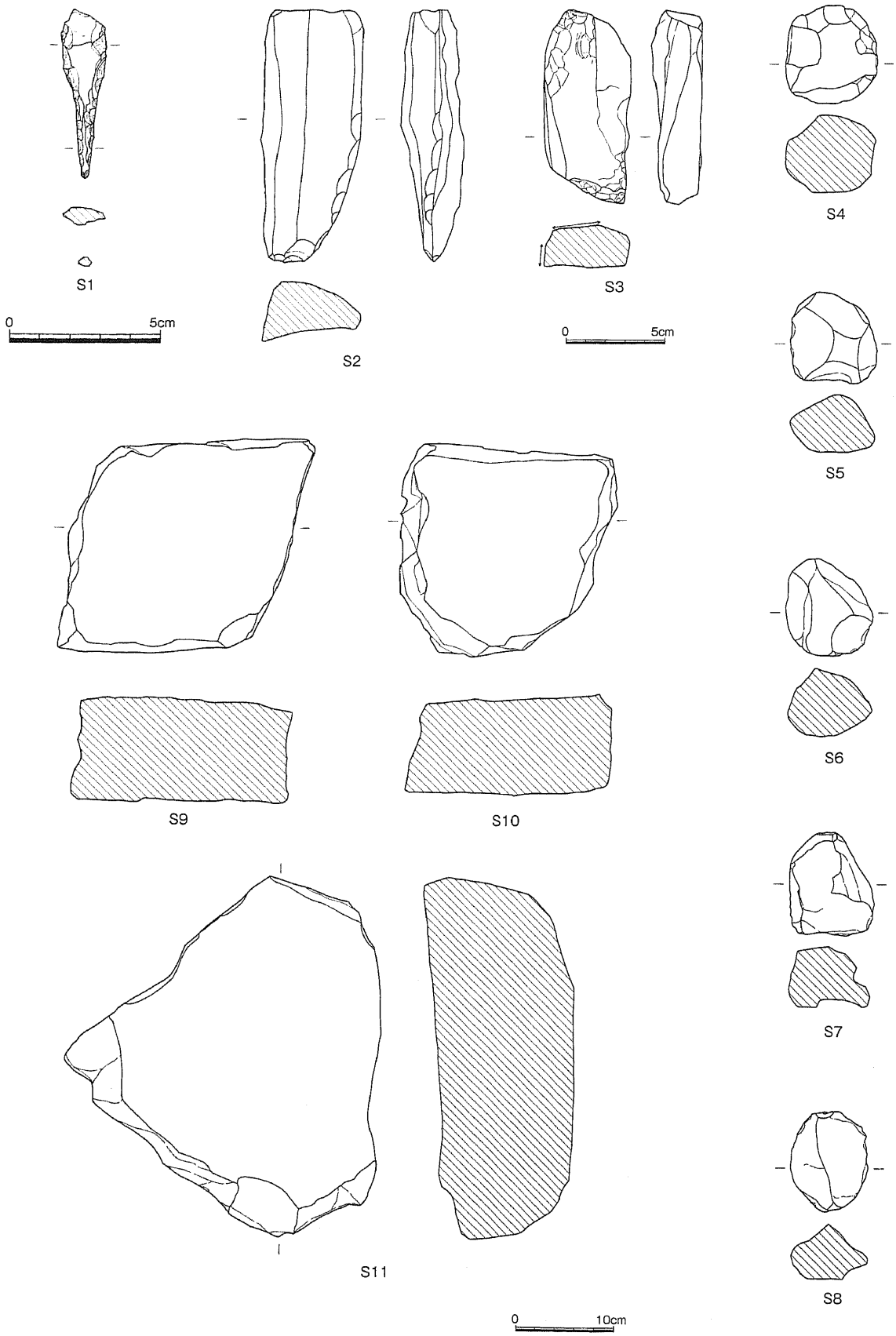
写真４　中央穴　作業風景



第13図　竪穴住居１出土遺物①（1／4）



第14図　竪穴住居１出土遺物②（1／4・1／3）



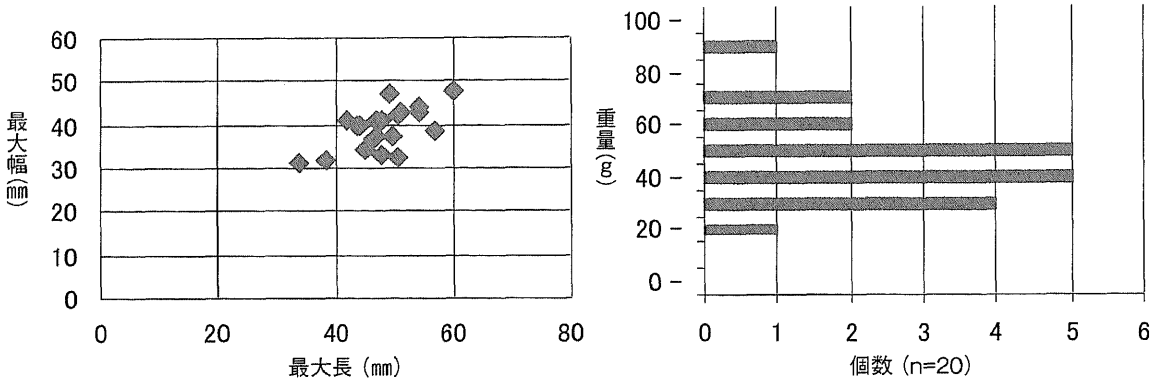
第15図　竪穴住居１出土遺物③（1/2・1/3・1/6）

中央穴と考えられる。また、中央穴から東側へ延びる溝１条を検出している。検出した長さは190 cm、規模は上幅20 cm、下幅８cm、検出面からの深さは５cmを測る。竪穴住居１ａと同様の構造であるが、性格は不明である。柱穴はＰ９～Ｐ14の６本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径21 ～ 25 cm、検出面からの深さは21 ～ 47 cmを測る。柱間はＰ９－Ｐ10で190 cm、Ｐ10－Ｐ11で190 cm、Ｐ11－12で235 cm、P12－13で210 cm、P13－P14で180 cm、P14－Ｐ９で210 cmを測る。住居の北側で壁体溝から北東側へ延びる排水溝を検出した。検出した長さは270 cm、規模は上幅27 cm、下幅10 cm、検出面からの深さは10 cmを測る。埋土は地山ブロックが混入する浅黄色粘性砂質土が堆積している。排水溝が位置する場所は、地形的には平坦な箇所であり、本来なら西側の緩斜面地へ流走するのが妥当だと考えられる。排水溝の底面海抜高は壁体溝側で341.8m、調査区境で341.73mを測る。壁体溝内では４条の溝を検出している。埋土は地山ブロックが混入する浅黄色粘性砂質土が堆積している。北東側の壁体溝に併走する溝は、残存長150 cm、上幅10 cm、下幅５cm、検出面からの深さは10 cmを測る。中央穴の南側の溝は、残存長約280 cm、上幅14 ～ 16 cm、下幅５～９cm、検出面からの深さは３cmを測る。先述した中央穴から延びる溝から派生する溝は、残存長85 cm、上幅６cm、下幅５cm、検出面からの深さは５cmを測る。東側の溝は、二股に分かれ壁体溝に合流する。上幅11 cm、下幅５cm、検出面からの深さは３cmを測る。北側へ取り付く溝は残存長65 cm、上幅９cm、下幅４cm、検出面からの深さは４cmを測る。南側の溝は残存長40 cm、上幅13 cm、下幅５cm、検出面からの深さは８cmを測る。壁体溝の内側で４条の溝を検出したが、竪穴住居１ａとの切り合い関係等とは考えにくく、性格は不明である。

遺物は、弥生土器の壺１～３、甕４～19、高杯20 ～ 26、器台27、鉢28・29、製塩土器30、土錘Ｃ１、Ｓ１石錐、石斧Ｓ２、砥石Ｓ３、投弾Ｓ４～８、台石Ｓ９～11が出土している。このほか、サヌカイト片は総重量５ｇが出土している。壺１は口縁端部が上方に拡張する。口径は14.5 cmを測る。赤色顔料を塗布する土器である。壺２は口縁端部に凹線文を３条施す。内外面に赤色顔料を塗布する。壺３は底部であり、底径は6.2 cmを測る。甕５は口縁部を上方へ拡張し、口縁端部には２条の凹線文を施す。口径は13.4 cmを測る。甕６は口縁部を肥厚させて丸く納める。口径は９cmを測る。甕７～12は口縁端部を肥厚し、凹線文、沈線を施す。甕９・10は胎土中に角閃石を多く含有し、赤色顔料を塗布している。甕13 ～ 19の底部は平底で、体部外面最下部に指頭痕を施すことにより、底部を明瞭にしている。甕13・15は外面に黒斑がみられる。高杯20は口縁端部を外方に拡張する。高杯21は杯部から外方に屈曲し、端部を拡張する。井原市の高越遺跡や矢掛町の芋岡山遺跡で出土している形態に類似する。高杯22は杯部の下部にヘラガキ沈線を施す。高杯24は脚裾端部を肥厚させ２条の凹線文、裾にヘラを深めに用いたタテの沈線を施す。底径は11.8 cmを測る。26は高杯の脚柱部である。27は器台の脚端部であり、底径29 cmを測る。高杯20 ～ 22・24・26・27は外面に赤色顔料が塗布されている。鉢28は口径30.0 cmを測り、外面にヨコ方向のハケメを施す。鉢29の口縁部は僅かに張り出しが認められ、片口となる。外面調整は、下半はタテ方向のハケメ、上半はヨコ方向のハケメ、内面はヘラケズリの後にタテ方向のハケメを施す。口径38.6 cmを測る。30は製塩土器の脚部である。脚部外面には指頭圧痕・指ナデ、脚端部は丸く成形が施されている。残存高は2.1 cm、底径は4.4 cmを測る。製塩土器はこの１点のみである。

Ｃ１は円柱形を呈する管状土錘である。重さは87ｇ、穿孔幅は1.1 cmを測る。外面には、黒斑や破裂痕がみられる。Ｓ１は長さ55 mm、幅14 mm、厚さ６mm、重さ３ｇを測るサヌカイト製の石錐である。

Ｓ２は壁体溝の埋土中から出土した流紋岩製の石斧で、各部に敲打痕が顕著に残る。長さ127㎜、幅51㎜、厚さ31㎜、重さ239ｇを測る。Ｓ３は長さ90㎜、幅43.5㎜、厚さ26㎜、重さ144.5ｇを測る流紋岩製の砥石である。Ｓ４～Ｓ８は竪穴住居の北西部の埋土中から出土した流紋岩製の円形礫であり、投弾と考えている。出土状況は、まとまった状態で20個出土している。その内ここでは５個を掲載する。出土した石は表面が滑らかな面ではなく、凹凸が顕著である。大きさは長径33～60㎜、短径31～48㎜であり、重量は29～96ｇを測り、この範疇で収まる。長径45～55㎜、短径35～45㎜、重さは40～50ｇの範囲のものが全体の半数を占める。これらの結果から投弾は、大きさや重さ等が極めて類似したものが選択された可能性が考えられる。Ｓ９～11は竪穴住居１ｂの中央穴から出土している流紋岩製の台石である。Ｓ９は長さ21.6㎝、幅21.6㎝、厚さ10.5㎝、重量5.6㎏である。Ｓ10は長さ22.4㎝、幅21.2㎝、厚さ10.6㎝、重量6.8㎏である。Ｓ11は長さ36.6㎝、幅31.2㎝、厚さ15.2㎝、重量19.4㎏である。遺構の時期は、出土遺物等から弥生時代後期中葉～後葉に位置づけられる。



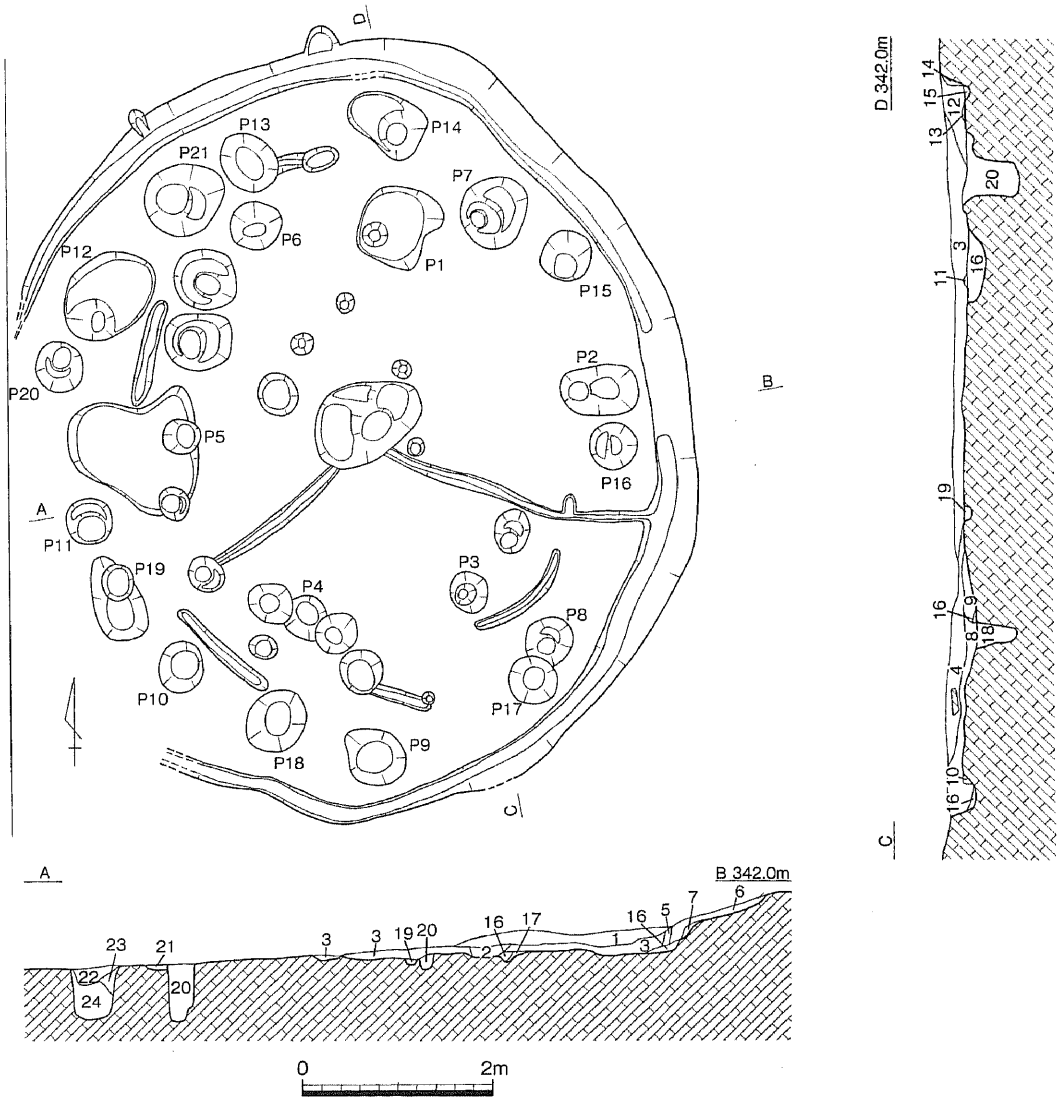
第２表　投弾の大きさと重さの分布

竪穴住居２ａ（第８・16～24図・巻頭図版３－２・図版５～８）

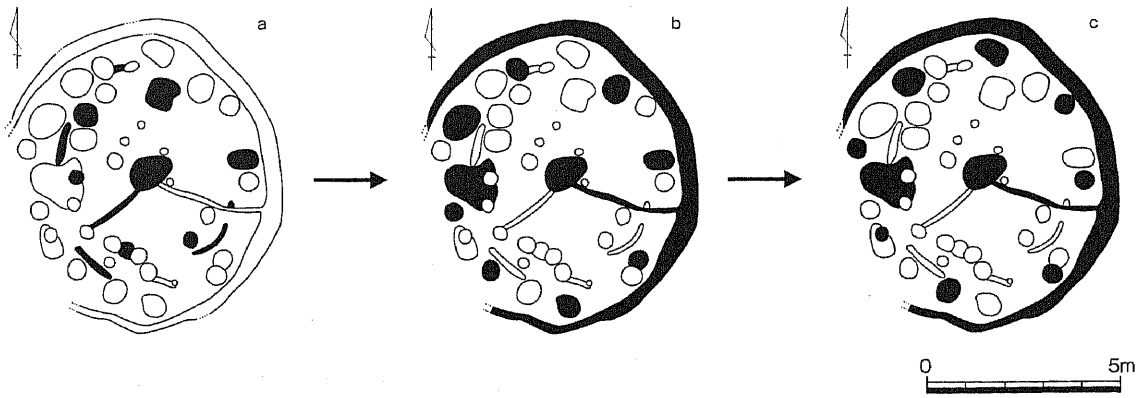
調査区西側、溝３の北側約３ｍに位置し、西側の緩斜面上に立地する。東側約1.5ｍには巨大な露岩があり、地形的な規制を受けている。また、土壙19によって南西部分を切られている。竪穴住居１とは3.5ｍの距離を測る。竪穴住居２は３軒重複しており、２回建て替えられているとみられる。竪穴住居２ａ～２ｃの新旧関係は壁体溝と柱穴の切り合いや埋土から判断している。２ａが最も古く、２ｂ・２ｃの順で建て替られ拡張されたと考えられる。竪穴住居２ａから２ｂへの建て替えの段階で、斜面上部の大規模な掘削が行われているとみられる。竪穴住居２の埋土については２ｃで後述する。

竪穴住居２ａの規模は、長軸486㎝、短軸約480㎝を測り、円形を呈する。検出面からの深さは64㎝、溝内の床面積は約18.51㎡を測る。床面の海抜高は314.19ｍであり、床面の貼り床はみられなかった。

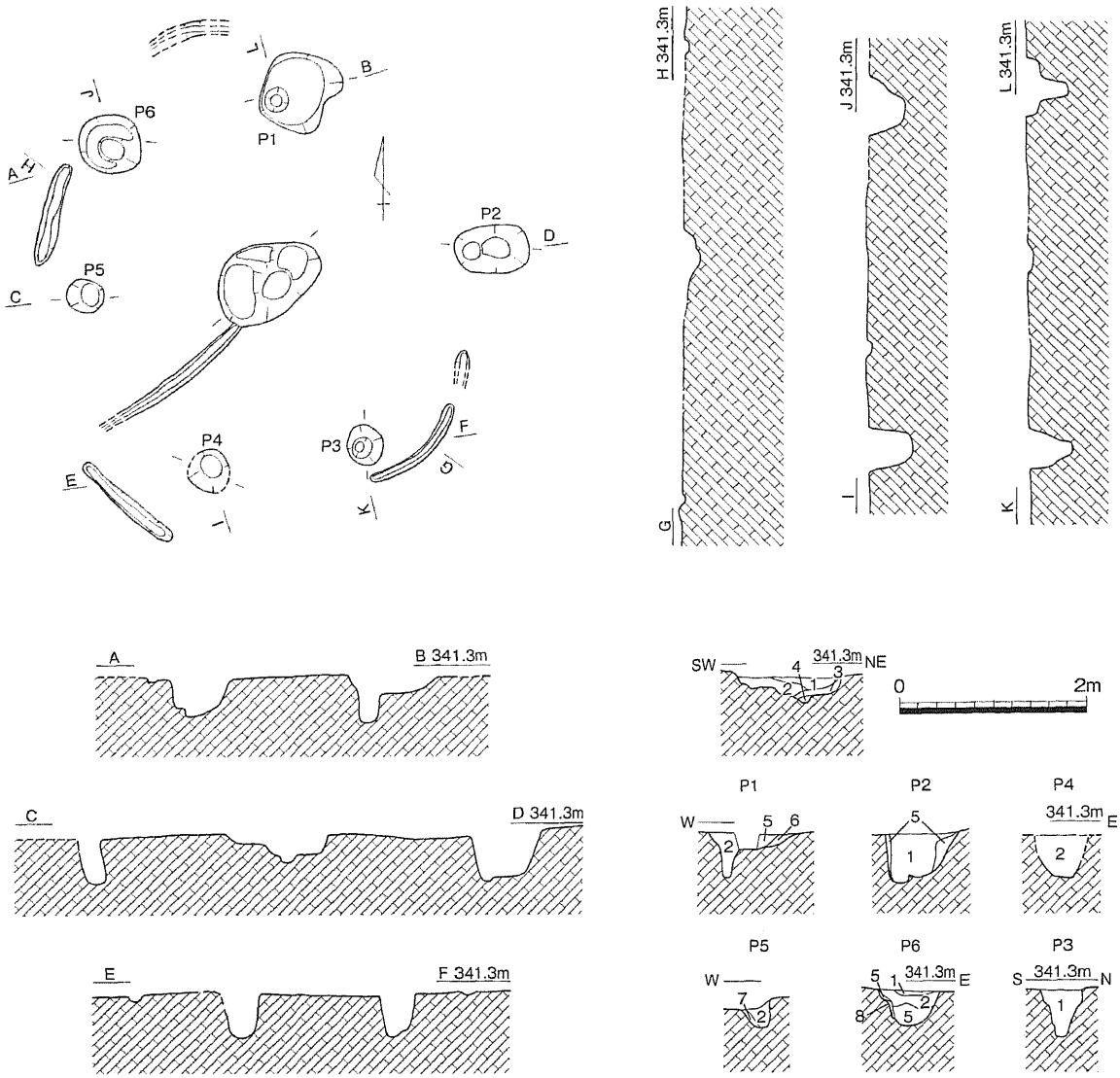
断続的に検出している壁体溝の規模は上幅12～18㎝、下幅５～９㎝、検出面からの深さは３～５㎝を測る。竪穴住居の中央部分には、長軸111㎝、短軸80㎝、検出面からの深さ28㎝を測る土壙がある。埋土は４層に分層でき、第１層は浅黄色粘性砂質土に炭粒を多く含み、第２層は灰黄色粘性砂質土、第３層は黄灰色粘性砂質土、第４層は明黄褐色粘質土が堆積している。主柱穴の中心に配置されることから、土壙は中央穴と考えられる。中央穴は底部の窪みが顕著であることから数回の掘削が推測できる。また、中央穴から南西方向へ延びる溝１条を検出している。これは、竪穴住居１ａ・１ｂでも認められた。検出した長さは163㎝、規模は上幅16㎝、下幅７㎝、検出面からの深さは４㎝を測る。埋土は炭粒を多く含む灰黄色粘性砂質土である。柱穴はＰ１～Ｐ６の６本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径40～90㎝、検出面からの深さは32～54㎝を測る。Ｐ１・３は



1　にぶい黄色粘性砂質土〈炭含〉
2　浅黄色粘性砂質土
3　灰黄色粘性砂質土〈炭含〉
4　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉
5　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
6　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
7　灰黄色粘性砂質土
8　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
9　明黄褐色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
10　明黄褐色粘性砂質土
11　灰黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
12　浅黄色粘性砂質土〈礫多く含〉
13　にぶい黄色粘性砂質土〈炭含〉
14　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
15　浅黄色粘性砂質土
16　明黄褐色粘性砂質土
17　浅黄色粘性砂質土
18　浅黄色粘性砂質土
19　灰黄色粘性砂質土〈炭含〉
20　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
21　灰黄色粘性砂質土〈炭含〉
22　にぶい黄色粘性砂質土
23　明黄褐色粘性砂質土
24　灰黄色粘性砂質土



第16図　竪穴住居２（1/80）・竪穴住居２の変遷（1/200）



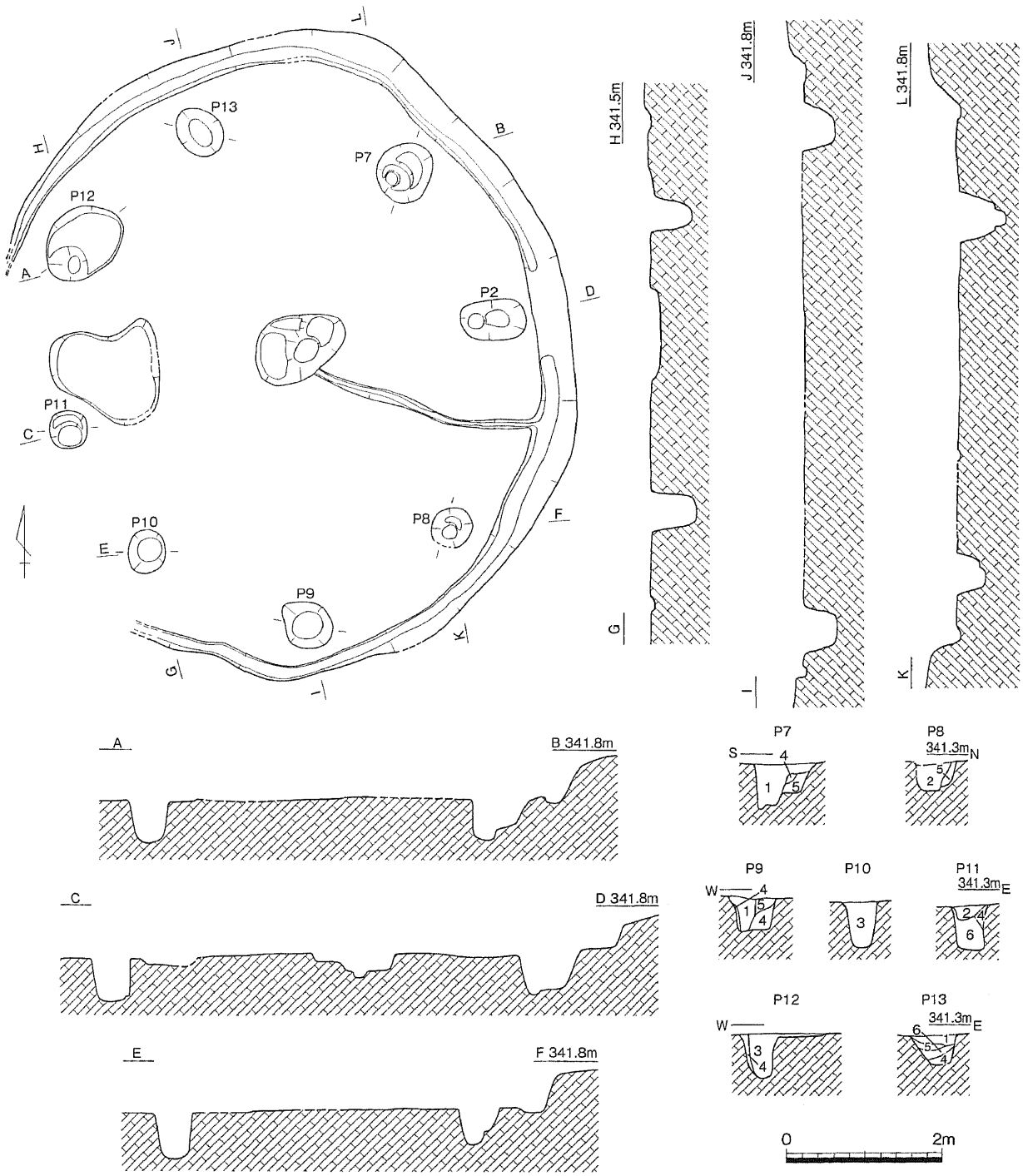
第17図　竪穴住居２a（1/80）

柱痕跡が確認でき、直径約15㎝の材を使用していたとみられる。柱間はＰ１－Ｐ２で270㎝、Ｐ２－Ｐ３で245㎝、Ｐ３－Ｐ４で165㎝、Ｐ４－Ｐ５で225㎝、Ｐ５－Ｐ６で160㎝、Ｐ６－Ｐ１で185㎝を測る。

遺物は、Ｐ５からサヌカイト片が出土している。

竪穴住居２ｂ（第８・16～24図・巻頭図版３－２・図版５～８）

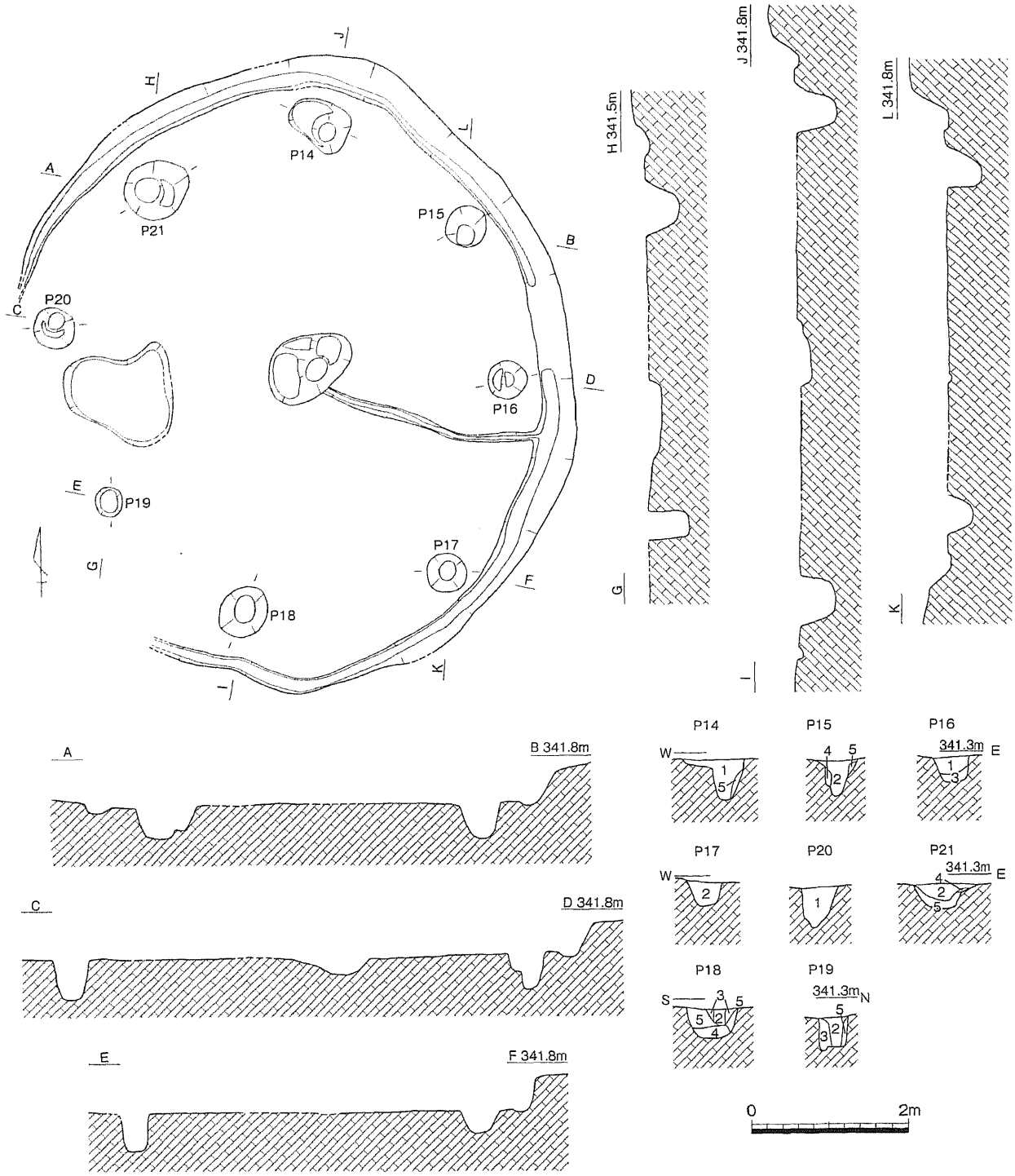
竪穴住居２ｂの規模は、長軸800㎝、短軸約700㎝を測り、円形を呈する。西側の一部は、調査区外へ続く。先述したが、竪穴住居２ａからは規模的に拡張している。東側では断面形態は床面からやや外方に斜面地上部の基盤層をＬ字形に掘削しており、検出面から床面までの深さは64㎝を測る。東側の斜面地上部で住居と併行するように巡るテラスを検出した。テラスの幅は65～80㎝を測り、東側の壁際部分が広くなっている。内側に向かって傾斜しており、住居に伴うものと判断する。溝内の床面積は約50.24㎡を測る。床面の海抜高は314.19mであり、床面の貼り床はみられなかった。中



1　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉　2　にぶい黄色粘性砂質土〈炭含〉　3　灰黄色粘性砂質土〈炭含〉　4　明黄褐色粘性砂質土
5　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉　6　灰黄色粘性砂質土

第18図　竪穴住居２b（1/80）

央穴から東側の壁体溝へ延びる溝１条を検出しており、前段階の２ａの溝とは方向が異なる。このことから中央穴を再度使用していると考えられる。検出した長さは287 cm、規模は上幅16 cm、下幅７cm、検出面からの深さは５cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土である。底面の海抜高は東側の壁体溝側で341.22m、西側の中央穴側で341.08mと14 cmの差が生じている。柱穴はＰ２・Ｐ７～Ｐ13の８本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径47～72 cm、検出面からの深さは37～58 cmを測る。Ｐ７・８・９・12は直径約10～13 cmの柱痕跡が確認できる。柱間はＰ７－

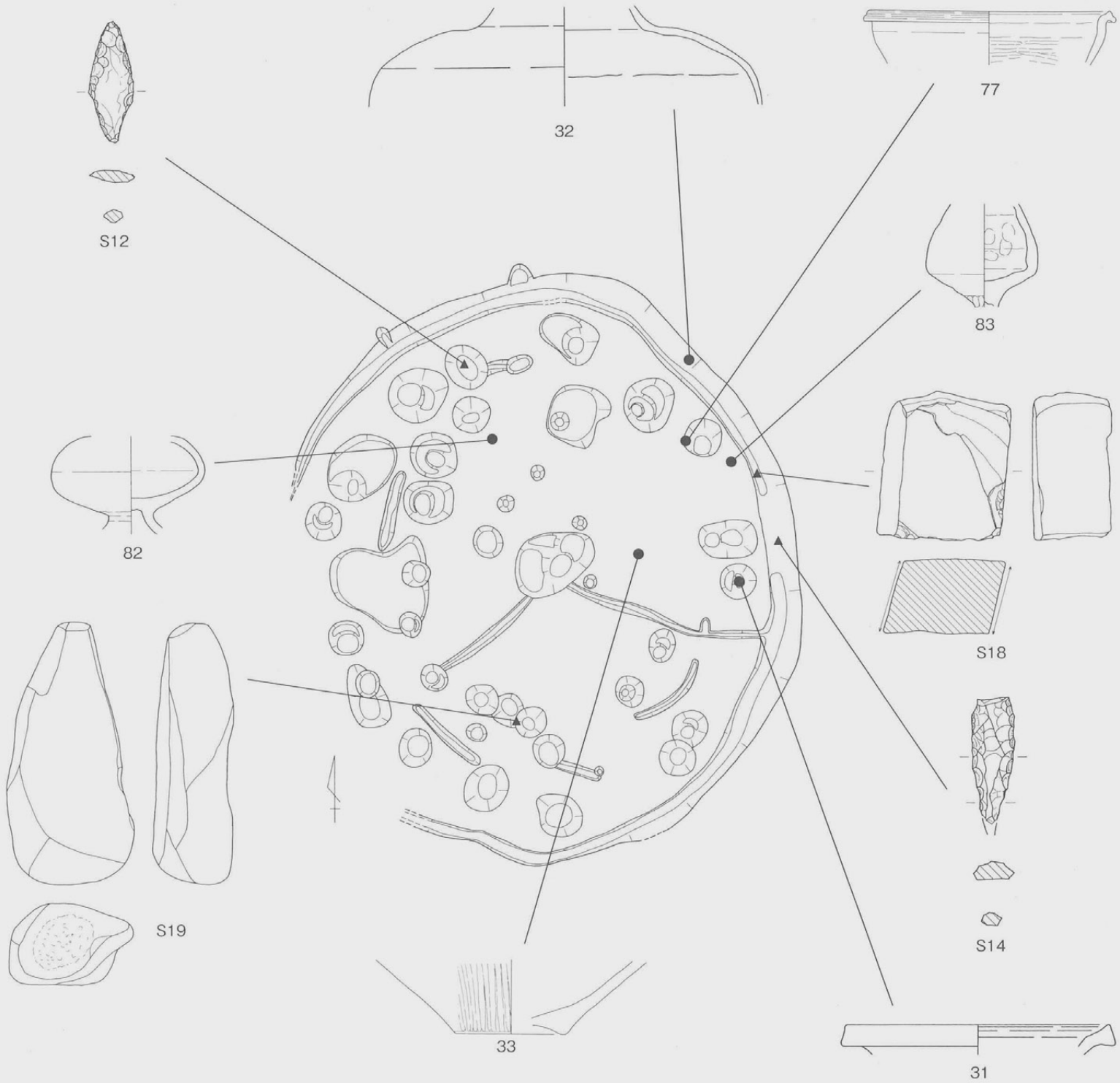


1　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉　2　灰黄色粘性砂質土〈炭含〉　3　灰黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
4　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉　5　明黄褐色粘性砂質土

第19図　竪穴住居２c（1/80）

Ｐ２で220 cm、Ｐ２－Ｐ８で275 cm、Ｐ８－Ｐ９で215 cm、Ｐ10－Ｐ11で230 cm、Ｐ11－Ｐ12で220 cm、Ｐ12－Ｐ13で230 cm、Ｐ13－Ｐ７で250 cmを測る。

遺物は、Ｐ13からサヌカイト製の石鏃**Ｓ12**やＰ10からサヌカイト片が出土している。石鏃**Ｓ12**は凸基式で、長さ43.5 mm、幅46 mm、厚さ18 mm、重さ130.5 gを測る。



第20図　竪穴住居２遺物出土状況（1/100・１/４・１/６）

竪穴住居２ｃ（第８・16～24図・巻頭図版３－２・図版５～８）

竪穴住居２ｃの規模は、竪穴住居２ｂと同規模の長軸800 cm、短軸約700 cmを測り、円形を呈する。柱穴は竪穴住居２ｂと同じく８本を検出しており、前段階から建て替えと考えられる。尾根線上の緩斜面上部を等高線に沿って掘削し、西側の低位部にあたる側壁は盛土造成で構築しているものとみられる。

写真５　竪穴住居2　東側掘削部分

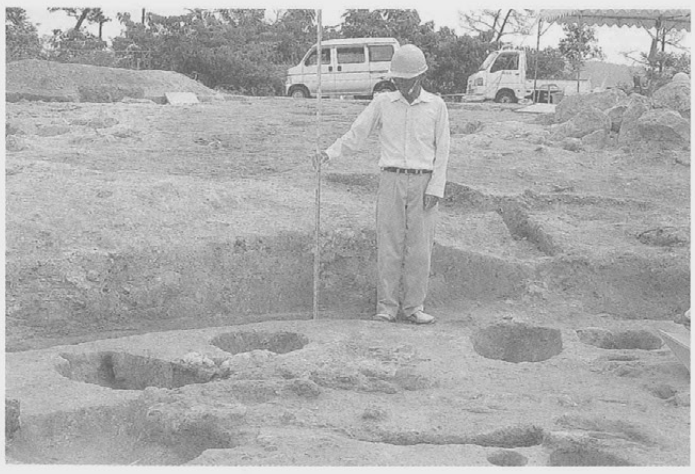
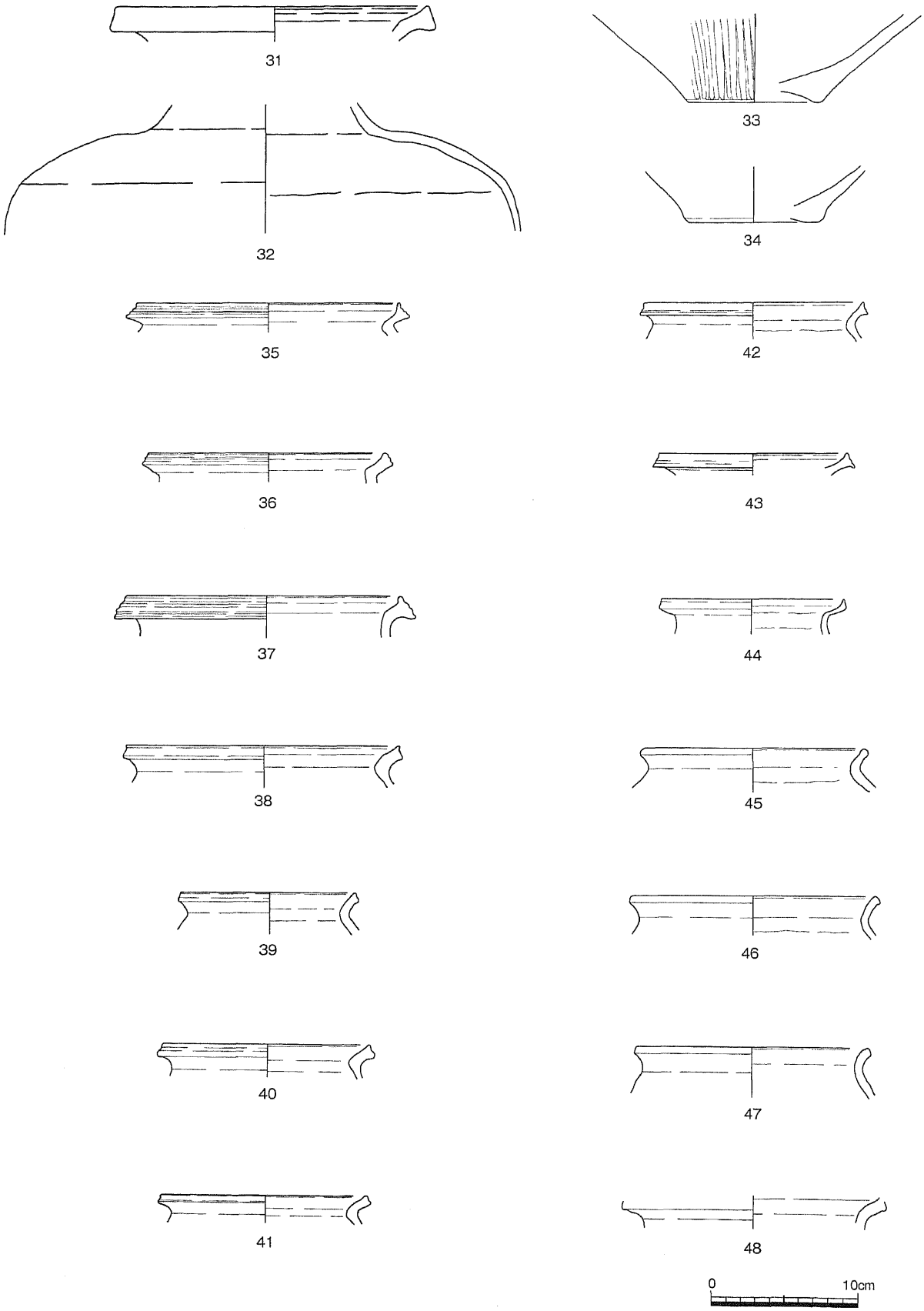
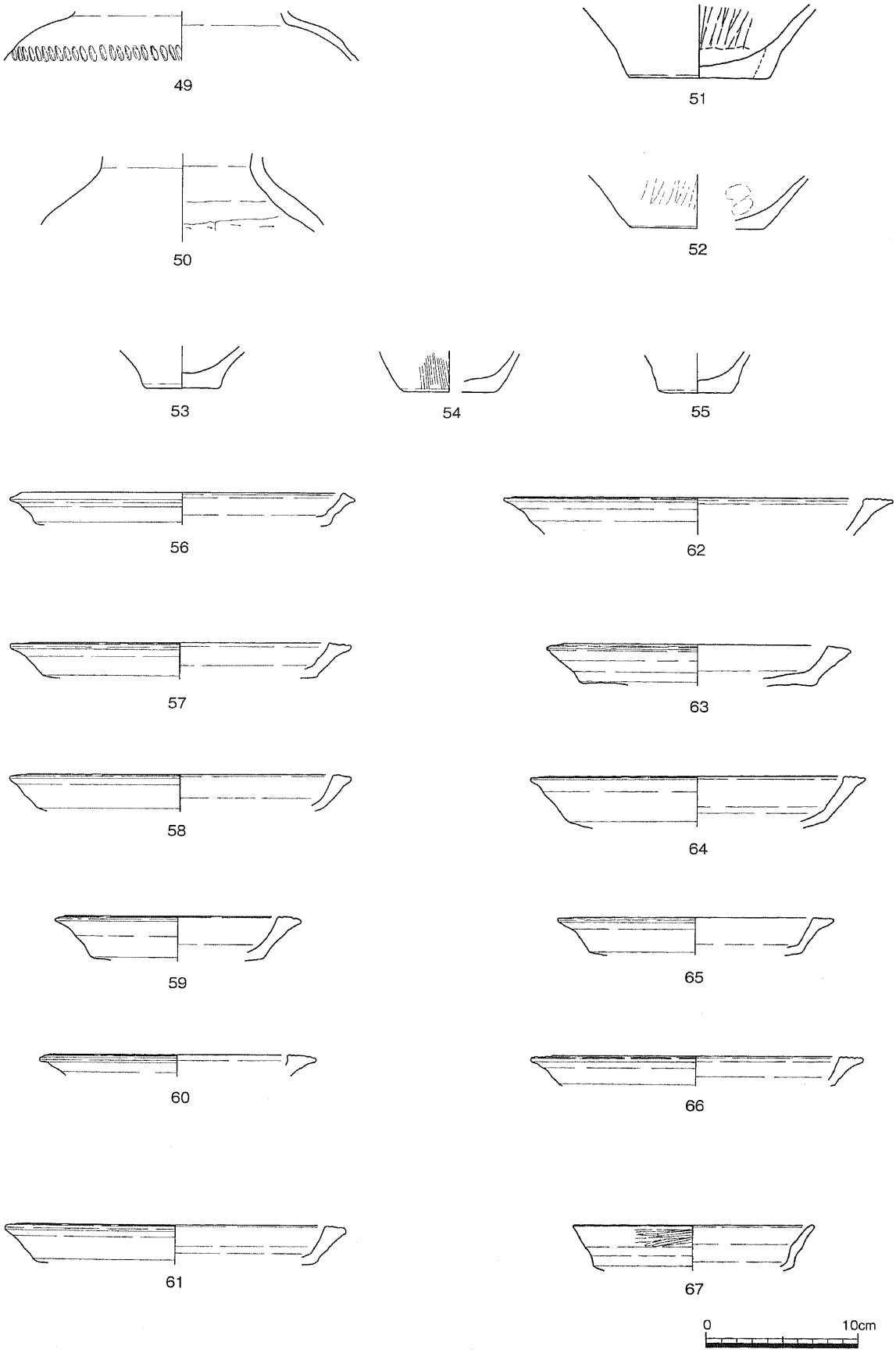


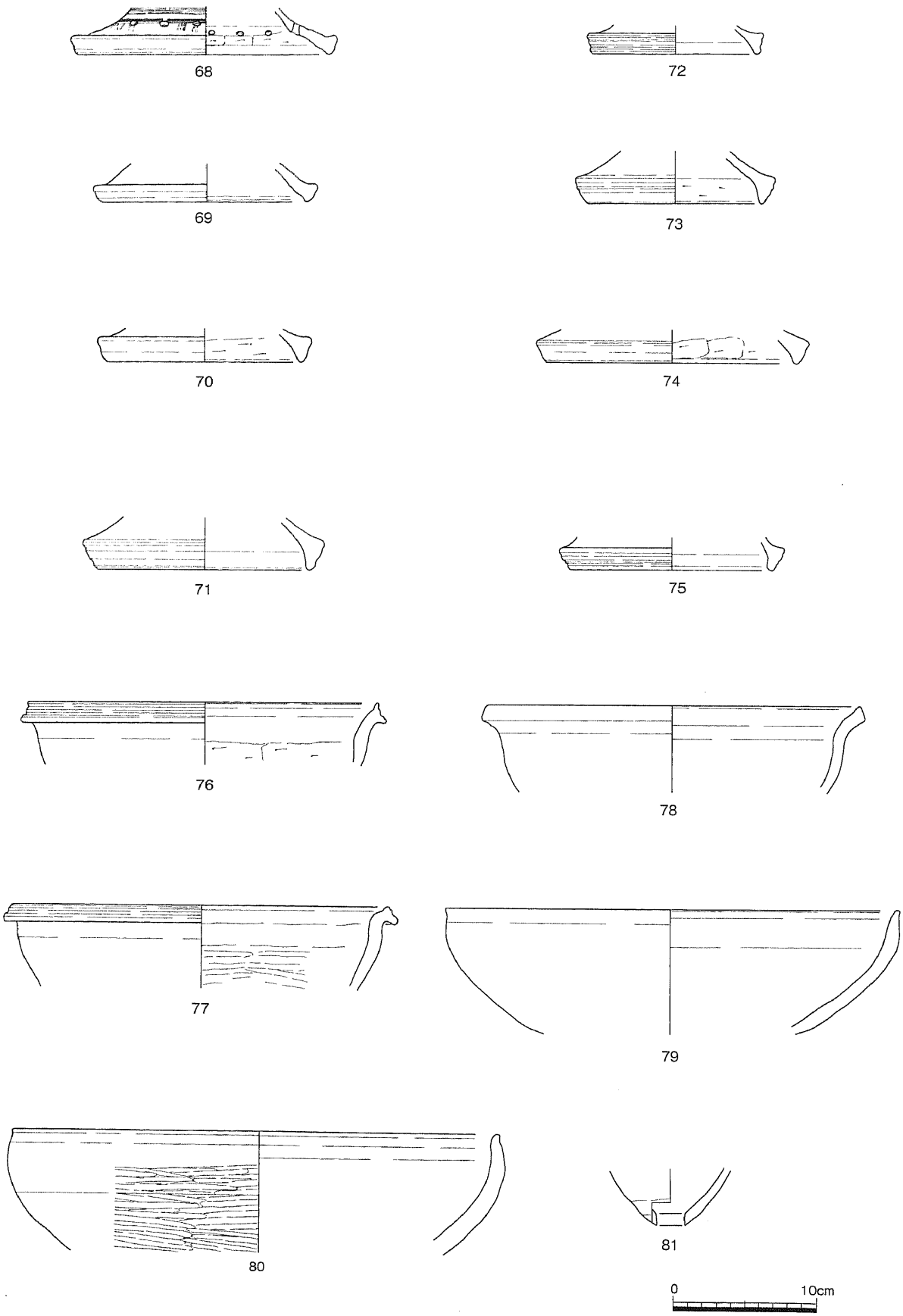
写真６　竪穴住居2　掘削の深さ



第21図　竪穴住居２出土遺物①（１／４）



第22図　竪穴住居２出土遺物②（1／4）



第23図　竪穴住居２出土遺物③（1／4）

写真７　竪穴住居２　作業風景

南北トレンチの観察から壁体溝の規模は上幅20～30㎝、下幅10～25㎝、検出面からの深さは７～12㎝を測る。また、東側では壁体溝の断絶がみられる。中央穴及び中央穴から壁体溝に付随する溝はこの段階においても機能したものとみられる。柱穴はＰ14～Ｐ21の８本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径39～85㎝、検出面からの深さは30～80㎝を測る。Ｐ14・15・18・19は直径約11～14㎝の柱痕跡が確認できる。柱間はＰ７－Ｐ２で220㎝、Ｐ２－Ｐ８で275㎝、Ｐ８―Ｐ９で215㎝、Ｐ10－Ｐ11で230㎝、Ｐ11－Ｐ12で220㎝、Ｐ12－Ｐ13で230㎝、Ｐ13－Ｐ７で250㎝を測る。

住居内の西側で土壙を検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸151㎝、短軸130㎝、検出面からの深さは17㎝を測る。埋土は炭粒を含む灰黄色粘性砂質土が１層堆積しており、サヌカイト片が出土している。この遺構の掘り下げで、竪穴住居２ａのＰ５を検出している。また、竪穴住居２ａの壁体溝がこの土壙に切られており、竪穴住居２ａよりは新しい時期に掘削されている。竪穴住居２ｂに伴うものと考えられるが性格は不明である。

竪穴住居の北側での壁体の２箇所で柱穴状の穴を検出した。西側の柱穴の規模は長軸30㎝、短軸17㎝、検出面からの深さは14㎝、海抜高は341.14ｍを測る。東側の柱穴の規模は長軸32㎝、短軸25㎝、検出面からの深さは17㎝、海抜高は341.24ｍを測る。柱間は西側と東側では210㎝を測る。

遺物は、弥生土器の壺31～34、甕35～55、高杯56～75、鉢76～81、台付直口壺82・83、ミニチュア土器84・85、鉇Ｍ１・２、土製勾玉Ｃ２、石鏃Ｓ13、石錐Ｓ14、石斧Ｓ15・16、砥石Ｓ17・18、敲石Ｓ19・20が出土している。このほかサヌカイト片は総重量90ｇが出土している。

壺31はＰ16から出土している。口縁端部を肥厚し上方へ摘み上げ、ヨコナデによる条線が認められる。壺32の器面調整は剥離のため不詳である。また頸部には一部赤色顔料が残存している。壺33・34は底部である。33は外面にタテ方向のヘラミガキを施し、底径は9.4㎝を測る。甕は口縁端部の特徴から３分類できる。口縁端部を肥厚し、上方へ摘み上げ凹線文を施す35～37、上方へ摘み上げ沈線を施す38～44、口縁端部の拡張部が無い45～48がある。甕35は口縁部端部に凹線文３条を施し、胎土中に角閃石を多く含有し、赤色顔料を塗布している。甕36は口縁端部に凹線文２条を施し、口径は16㎝を測る。甕37は口縁端部に凹線文３条を施している。甕41は内面上部までヘラケズリを施している。甕49の体部上半には工具による列点文が施される。甕50の内面はヨコ方向のヘラケズリが施されている。51～55は甕の底部である。甕51の断面では粘土紐の接合痕、外面には黒斑がみられる。底径は９㎝を測る。甕52の外面はタテ方向のヘラミガキが施されており、煤が付着している。甕54の外面はタテ方向のハケメが施されている。甕55は重厚な底部であり、底径は4.1㎝を測る。高杯56～66は杯部であり、口縁端部を肥厚させ拡張させているものである。高杯56は口縁部が外方に開き、端部を肥厚させヨコナデを施し、口径は21.7㎝を測る。調整は剥離により不明瞭である。高杯57は口縁端部を肥厚させ、凹線文３条を施す。高杯58は口径20.6㎝を測る。高杯59は口縁端部に凹

線文２条を施す。口径は13.6 cmと小形である。高杯60は口縁端部に凹線文５条を施す。高杯61は口径20.2 cmを測る。高杯62は口縁端部に凹線文４条、内面にはヘラミガキを施す。口径は22.6 cmを測る。高杯67は口縁部が上方へ立ち上がるものであり、ヨコナデにより稜をもつ。口縁部外面にはヨコ方向のヘラミガキを施している。内外面には赤色顔料を塗布している。口径は15.8 cmを測る。68 ～ 75は高杯の脚部である。脚端部を肥厚し、凹線文及び沈線を施す。高杯68はヘラガキ沈線と裾にヘラを用いたタテの沈線で施文し、円形透かしは内面に抜ける。高杯69 ・ 73 ・ 74は内面にヘラケズリを施す。高杯57 ～ 65 ・ 68 ～ 75は、胎土中に角閃石を含有し、内外面には赤色顔料を塗布している。鉢76 ～ 78は口縁端部を肥厚し、２条～３条の凹線文や沈線を施す。鉢76は口径24.2 cmを測り、内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。内外面に赤色顔料が残着し、口縁部外面の一部に黒斑がみられる。鉢77は口径26.4 cmを測り、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。内外面に赤色顔料が塗布されている。鉢78は口径25.8cmを測る。鉢79・80は屈曲する頸部を持たないものである。鉢79は口径31.6cmを測る。鉢80は口径34 cmを測り、外面はヨコ方向のヘラミガキを施している。外面には煤が顕著に付着を認められる。有孔鉢81は底部に径２cmの穿孔があり、胎土は精良な粘土が使用されている。台付直口壺82は精製された粘土を使用作成されたものである。頸部は欠損しているが長く立ち上がる口縁部を有し、下部は低脚が付くとみられる。台付壺83は胴部が無くなり受部と口頸部が接合した形態を呈する。体部が強い算盤玉状を呈し、内面はユビオサエが顕著である。82とは胎土が異なり、精製された粘土ではない。84・85はミニチュア土器の底部であり、内面は押圧痕を顕著に残す。底径は1.5cm、1.8 cmを測る。84の外面には黒斑がみられる。

Ｍ１・２は鉈の先端部とみられる。Ｍ１は長さ26 ㎜、幅8 ㎜、厚さ6 ㎜、重さ2.5ｇを測る。Ｍ２は長さ52 ㎜、幅23 ㎜、厚さ6 ㎜、重さ9.0ｇを測る。

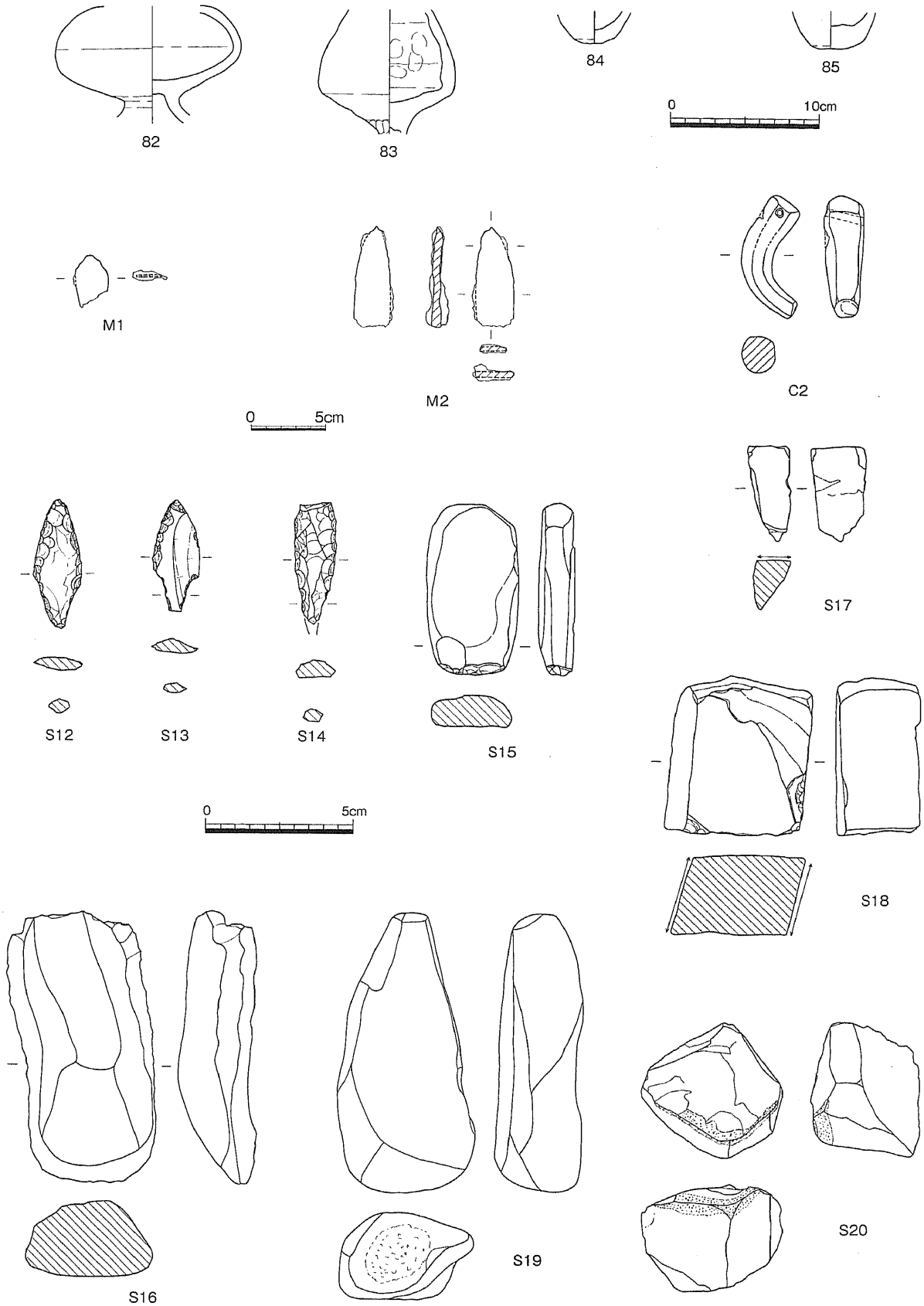
土製勾玉Ｃ３は完形で重量は19ｇを測る。中央の屈曲が大きく、上部に5 ㎜の穿孔が施される。

Ｓ13は長さ38 ㎜、幅16 ㎜、厚さ５㎜、重さ2.5ｇを測るサヌカイト製の有茎式の石鏃である。Ｓ14は長さ40.5 ㎜、幅14 ㎜、厚さ5.5 ㎜、重さ3.5ｇを測るサヌカイト製の石錐であり、先端部が折損している。Ｓ15は長さ87 ㎜、幅46 ㎜、厚さ18 ㎜、重さ130.5ｇを測る泥岩製の石斧であり、基部周辺に敲打痕がみられる。Ｓ16は長さ139 ㎜、幅70 ㎜、厚さ38.5 ㎜、重さ477ｇを測る流紋岩製の扁平片刃石斧である。Ｓ17は長さ49 ㎜、幅21.5 ㎜、厚さ28 ㎜、重さ25ｇを測る流紋岩製の砥石である。Ｓ18は長さ81 ㎜、幅68.5 ㎜、厚さ43 ㎜、重さ444ｇを測る泥岩製の砥石である。Ｓ19は長さ143 ㎜、幅68 ㎜、厚さ44 ㎜、重さ545ｇを測る砂岩製の敲石であり、基部周辺に敲打痕がみられる。Ｓ20は長さ72 ㎜、幅63 ㎜、厚さ58 ㎜、重さ289ｇを測る流紋岩製の敲石である。また、中央穴、Ｐ15、Ｐ21からはサヌカイト片が出土している。竪穴住居２から出土したサヌカイト片の総重量は91.5ｇである。

また、埋土中からは炭化材が出土しており、放射性炭素年代測定では1880±40年、樹種同定ではコナラ属アカガシ亜属という結果を得た。

時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉に構築され始め、後期後葉に廃絶したと位置づけられる。

写真８　サヌカイト剥片



第24図　竪穴住居２出土遺物④（1／4・1／3・1／2）

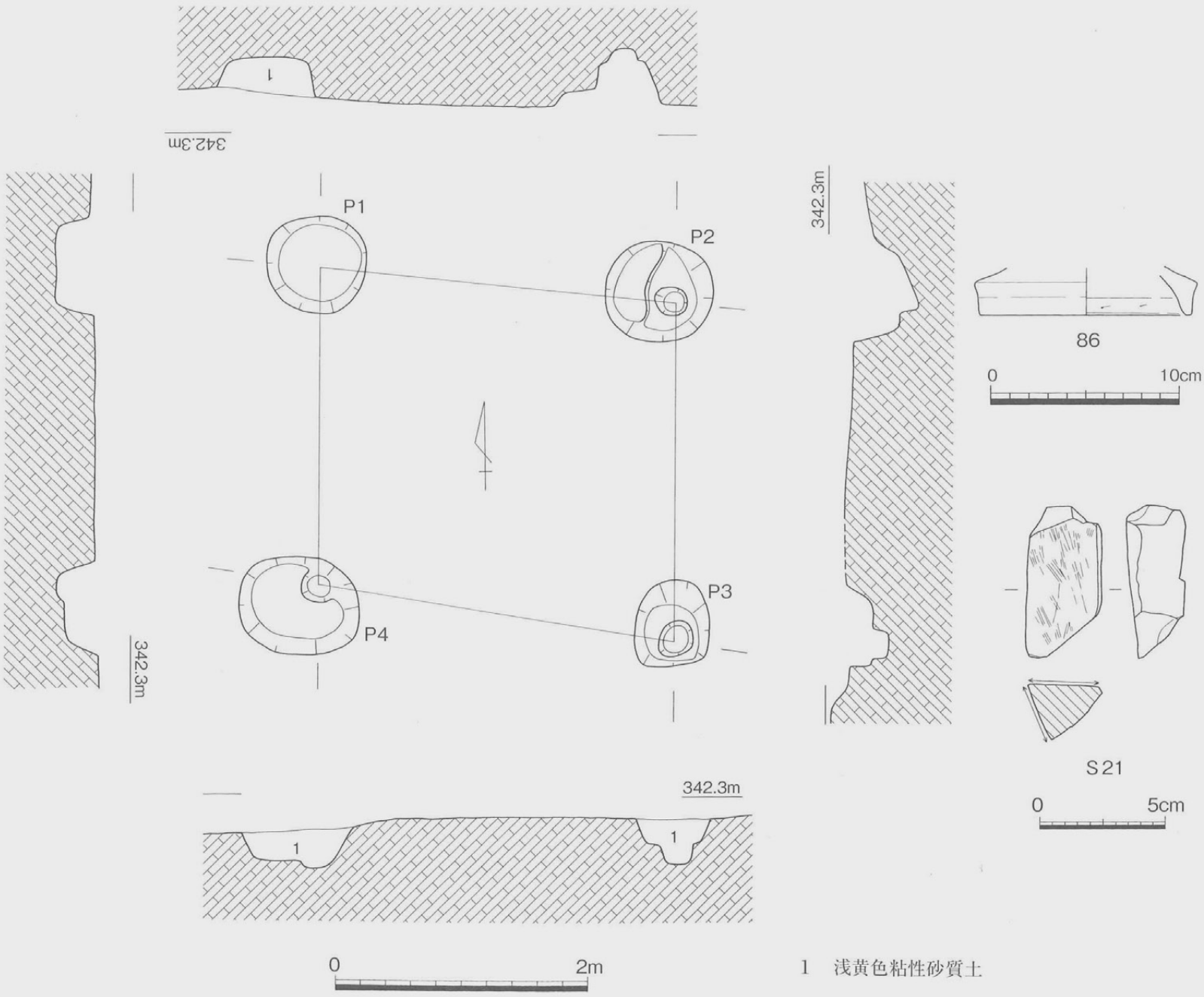
３　掘立柱建物

掘立柱建物１（第８・25図、図版８－２・３）

調査区の北東部、竪穴住居１の東１ｍ、土壙５の南西２ｍ、土壙７の北１ｍに位置する１×１間の掘立柱建物である。Ｐ２は平成17年度に実施された試掘調査の際に土壙として確認されていたものであるが、周辺に柱穴が認められ、柱としてまとまったため、掘立柱建物と認識した。

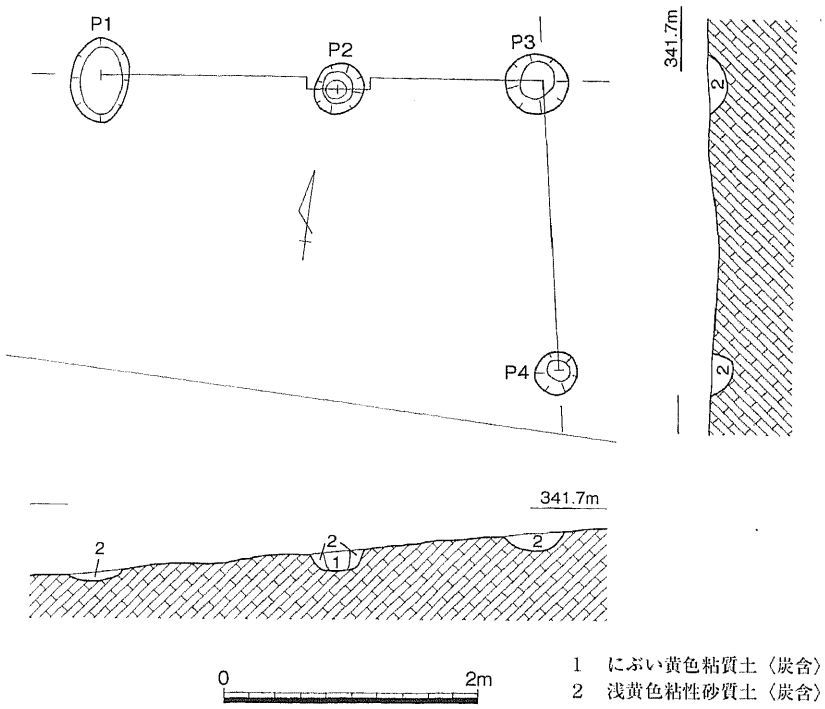
建物の規模は、桁部の柱間距離がＰ１－Ｐ２で283cm、Ｐ３－Ｐ４で285cm、梁部の柱間距離がＰ１－Ｐ４で252cm、Ｐ２－Ｐ３で269cmを測り、平面形は正方形に近い形を呈している。建坪は7.29㎡で、棟方向はN－１°－Wである。柱穴掘り方は、Ｐ１・Ｐ２は円形、Ｐ３はやや不整な楕円形、Ｐ４は楕円形を呈す。Ｐ１は径80cm前後、検出面からの深さ30cmを測る。Ｐ２

写真９　掘立柱建物１　作業風景



第25図　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1／４・1／３）

は岩盤を掘削しており、径80cm前後、検出面からの深さ45cmを測る。Ｐ３は長軸70cm、短軸60cm、検出面からの深さ32cmを測る。Ｐ４は長軸96cm、短軸80cm、検出面からの深さ30cmを測る。Ｐ２～Ｐ４では柱痕跡を検出しており、25～30cmの柱材が使用されていたと考えられる。柱穴の底面はおおよそ同じ標高である。また柱穴の埋土はいずれも浅黄色粘性砂質土の単層である。柱穴や柱間の距離ともに１×１間の掘立柱建物としては規模の大きな建物と言えるだろう。



第26図　掘立柱建物２（1/60）

遺物はＰ１・Ｐ２・Ｐ４から弥生土器の小片と砥石が出土している。86・S21ともにＰ１からの出土である。86は高杯の脚部であり、脚端部を肥厚し強いナデが施されている。内面にはヨコ方向のヘラケズリを施している。外面には赤色顔料が塗布されており、胎土は角閃石を多く含有する。特徴から弥生時代後期の範疇でとらえることができる。S21は最大長59mm、最大幅29.5mm、重さ42gの流紋岩質凝灰岩の砥石であり、多くの面に擦痕が認められる。今回の調査において流紋岩質凝灰岩が出土したのは、掘立柱建物１のみである。

出土遺物から、時期は弥生時代後期の範疇に位置づけられる。

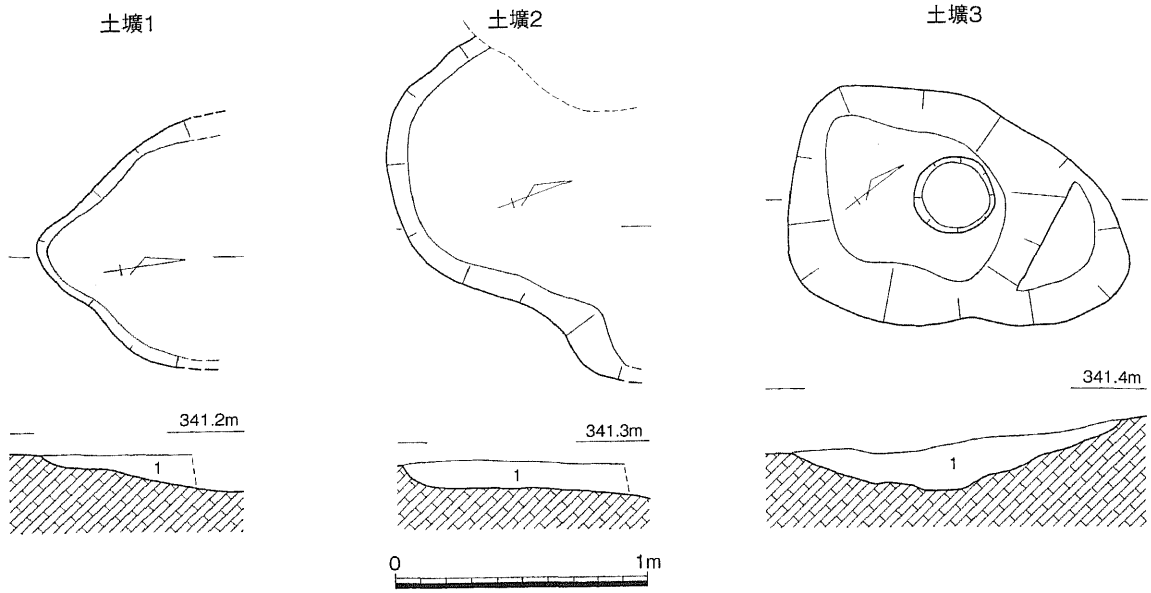
掘立柱建物２（第８・26図、図版９－１）

調査区の南西部、土壙20・21の東１ｍ、溝３・土壙16の南１ｍに位置する２×１間以上の掘立柱建物である。調査区外の南側へとつづく可能性があるため、２×１間以上としておく。

建物の規模は、桁行全長が345cm、柱間距離はＰ１－Ｐ２で181cm、Ｐ２－Ｐ３で164cm、梁部の柱間距離はＰ３－Ｐ４で230cmを測る。建坪は7.94㎡で、棟方向はN－82°－Wである。柱穴掘り方は、Ｐ１が楕円形、Ｐ２～Ｐ４は円形を呈している。Ｐ１は長軸70cm、短軸45cm、検出面からの深さ10cmを測る。Ｐ２は径40cm、検出面からの深さ15cmを測る。またＰ２では径15cmの柱痕跡が認められた。Ｐ３は径50cm前後、検出面からの深さ15cmを測る。Ｐ４は径30cm前後で、検出面からの深さ17cmを測る。柱穴の底面は西へ向かって低くなっている。柱穴の埋土はＰ２の柱痕部分がにぶい黄色粘質土であり、その他は浅黄色粘性砂質土である。いずれの土層も炭を含有している。検出面からの深さが東から西へ向かって浅くなることから、後世に削平された可能性が考えられる。

出土遺物はＰ３・Ｐ４から弥生土器片が出土しているが、小片のため図化できるものではない。

出土遺物、埋土等から時期は弥生時代後期の範疇でとらえることができる。



1　灰黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉　1　灰黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉　1　浅黄色粘性砂質土

第27図　土壙１～３（1/30）

4　土壙

土壙１（第８・27図）

調査区の北西隅、土壙２の西側に位置する。土壙２を切っている。平面形が不整な楕円形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸102 cm、短軸70 cm、検出面からの深さは15 cmを測る。埋土は地山ブロックを含む灰黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙２（第８・27図）

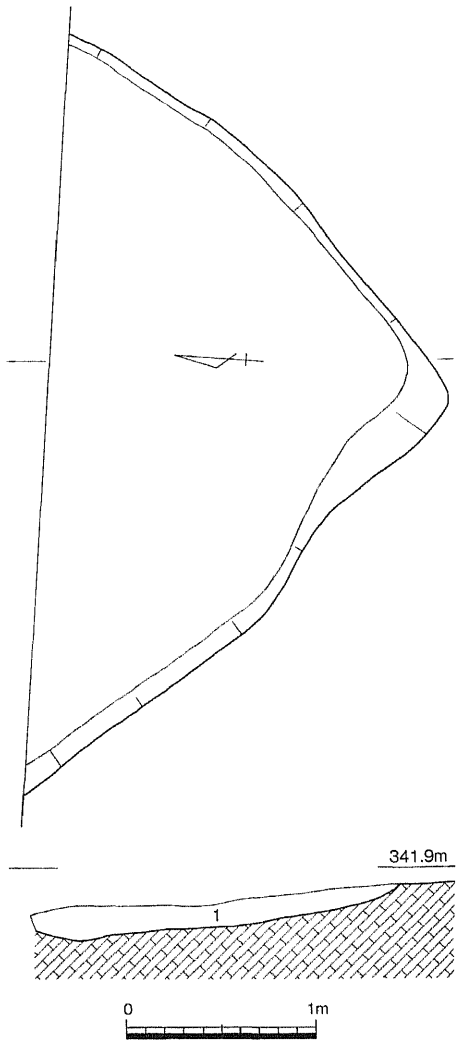
調査区の北西隅、土壙１と溝１の間に位置する。土壙１に切られている。平面形は不整な楕円形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸103 cm、短軸93 cm、検出面からの深さは12 cmを測る。埋土は地山ブロックを含む灰黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙３（第８・27図）

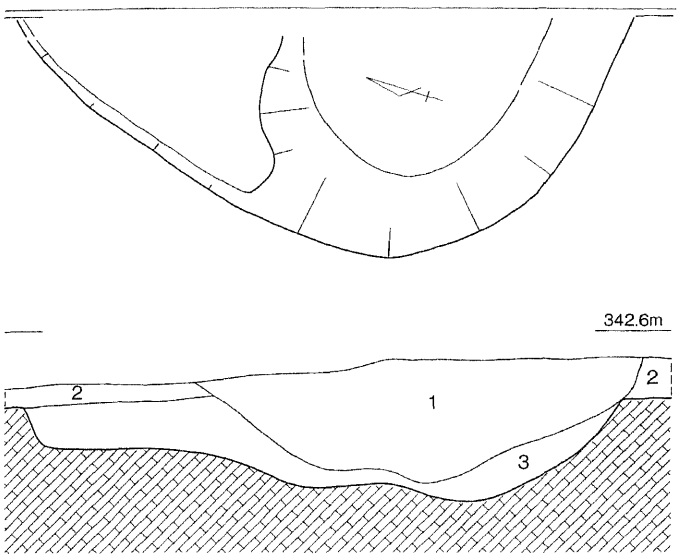
調査区の北西部、溝１の南0.7mに位置する。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸135 cm、短軸94 cmを測る。また断面形は段状を呈しており、３段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で19 cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層である。

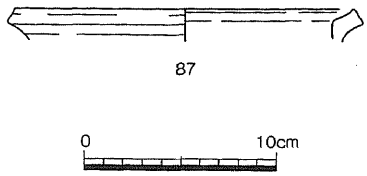
時期は弥生時代後期に位置づけられる。



1　灰黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉

第28図　土壙４（1/40）





1　にぶい黄色粘質土〈近代の撹乱〉
2　明黄褐色粘性砂質土
3　浅黄色粘性砂質土

第29図　土壙５（1/40）・出土遺物（１／４）

土壙４（第８・28図）

調査区の北西部、竪穴住居１の北西2.5mに位置する。北側は調査区の外へと延びる。平面形は不整形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸200 cm、短軸105 cm、検出面からの深さは９cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

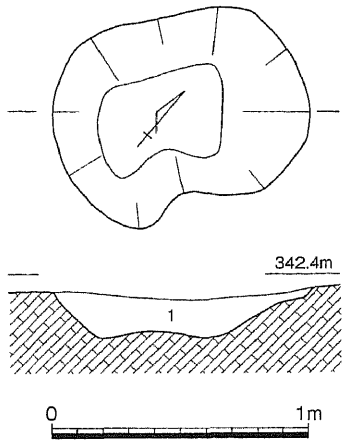
土壙５（第８・29図）

調査区の北東部、掘立柱建物１の北東1.8mに位置する。東側は調査区の外へと延びるとみられる。平面形は楕円形を呈している。規模は現存長であるが、長軸302 cm、短軸110 cmを測る。断面形は段状を呈しており、２段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で74 cmを測る。埋土は３層からなる。２・３層が弥生時代の土壙に伴う埋土であり、１層は近代の撹乱である。埋土は明黄褐色粘性砂質土と浅黄色粘性砂質土である。

出土遺物は、弥生時代後期の土器が１点出土している。87は甕の口縁部であり、内外面ともにヨコナデで調整されている。内外面に赤色顔料が塗布されており、胎土は角閃石を含有する。

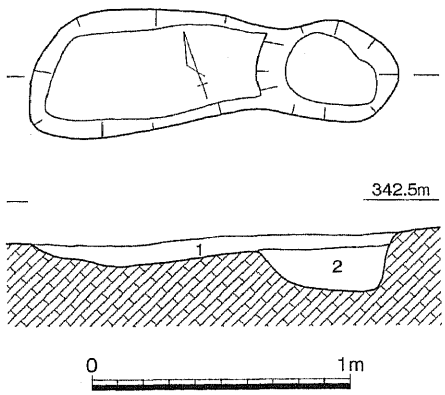
土壙６（第８・30図）

調査区の北東部、掘立柱建物１の南3.4m、土壙７の南西1.9mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈



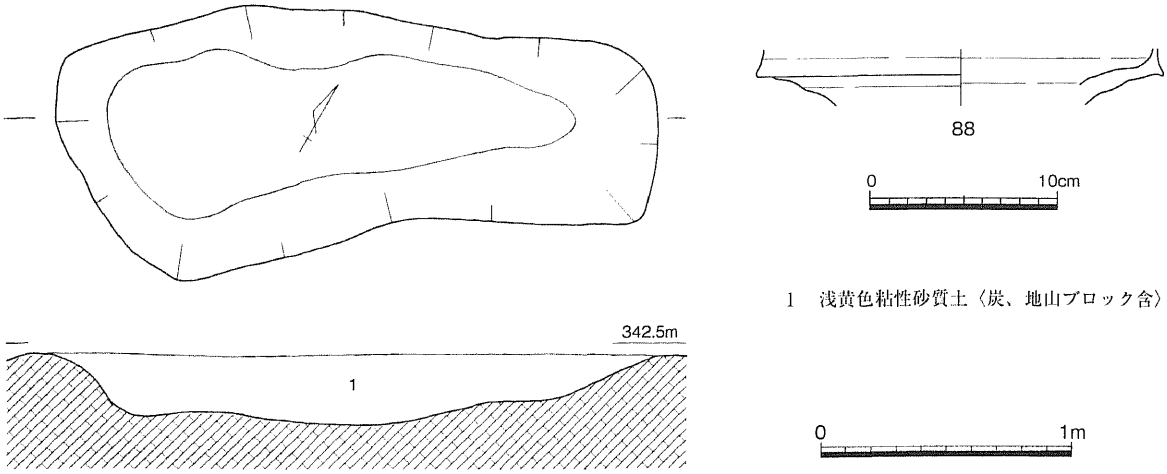
1　灰黄色粘性砂質土

第30図　土壙６（1/30）



1　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
2　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉

第31図　土壙７（1/30）



第32図　土壙８（1/30）・出土遺物（１／４）

している。規模は長軸100 cm、短軸82 cm、検出面からの深さは18 cmを測る。埋土は灰黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙７（第８・31図・図版９－２）

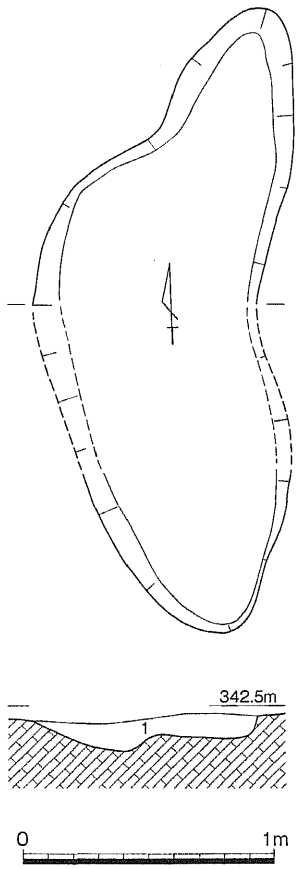
調査区の北東部、掘立柱建物１の南１ｍに位置する。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は長軸144 cm、短軸50 cmを測る。断面形は段状を呈しており、２段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で23 cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土と炭を含む浅黄色粘性砂質土からなり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙８（第８・32図・図版９－３）

調査区の北東部、土壙６の東3.4ｍに位置する。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸238 cm、短軸103 cm、検出面からの深さは21 cmを測る。埋土は炭粒と地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

遺物は、弥生土器が１点出土している。88は壺の口縁部であり、口縁端部は上方へつまみ上げられている。胎土は角閃石を含む。

時期は弥生時代後期の範疇に位置づけられる。



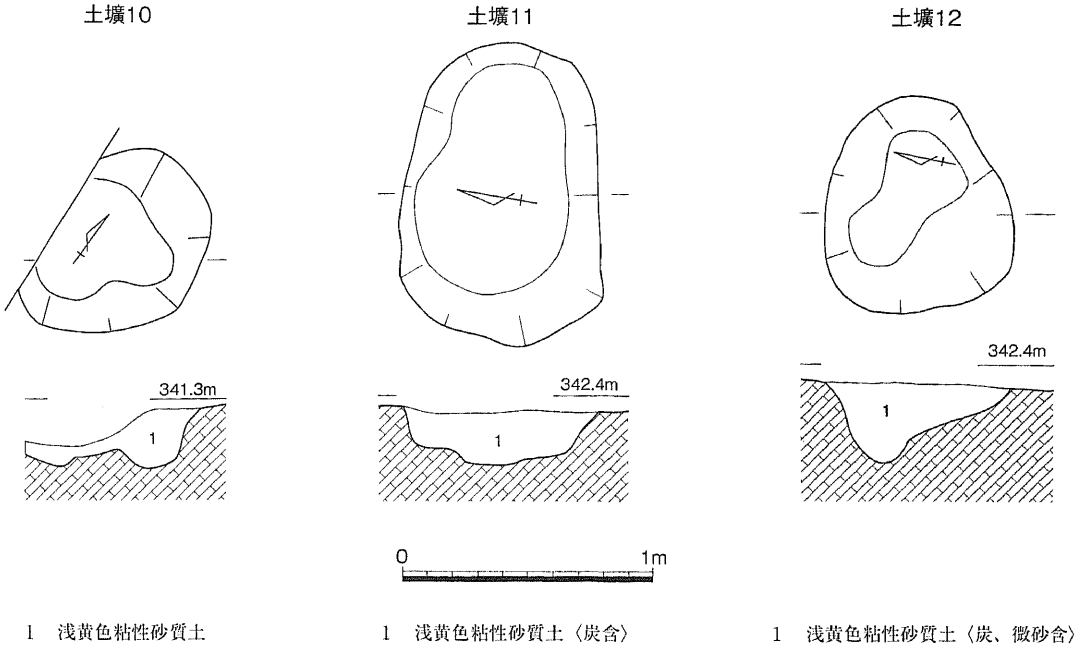
第33図　土壙９（1/30）

土壙９（第８・33図）

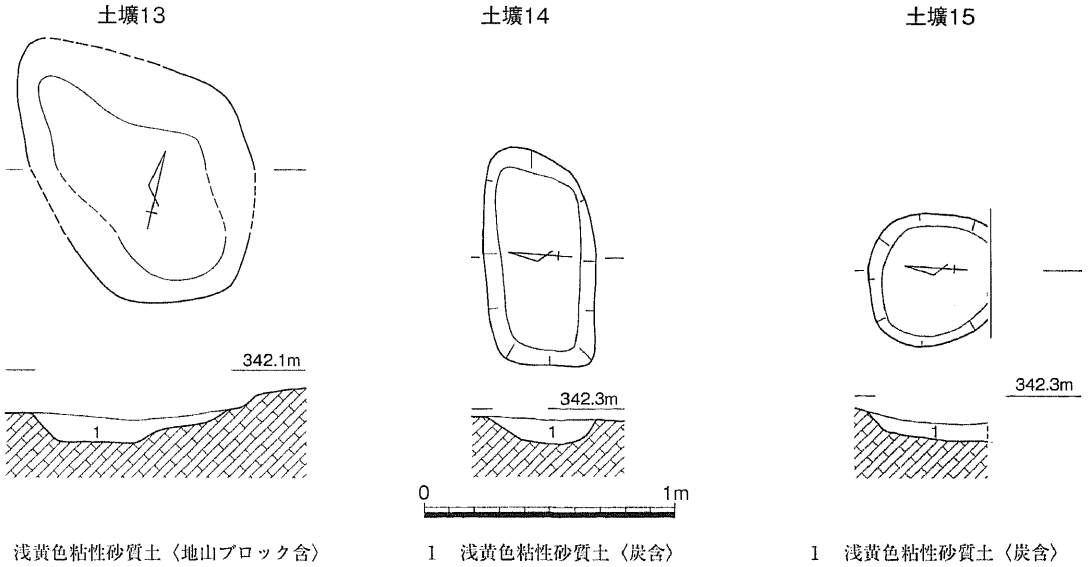
調査区の南東部に位置する。平面形は不整形を呈しており、南側が広く、北側が狭くなっている。規模は長軸249 cm、短軸91 cm、検出面からの深さは12 cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙10（第８・34図）

調査区の西側中央部、竪穴住居２の北0.9ｍに位置する。西側は調査区の外へと延びる。平面形は



第34図　土壙10～12（1/30）



第35図　土壙13～15（1/30）

円形を呈しており、規模は現存長であるが、直径70 cm、検出面からの深さは24 cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

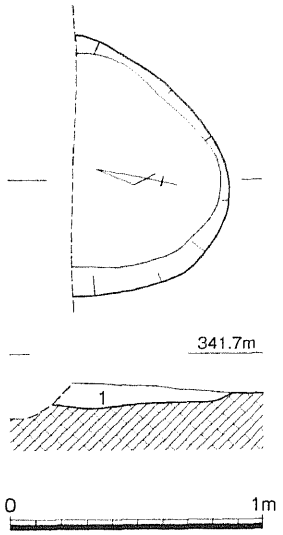
土壙11（第８・34図・図版10－１）

調査区の南東部、土壙12の北0.25mに位置する。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸120cm、短軸80 cm、検出面からの深さは21 cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

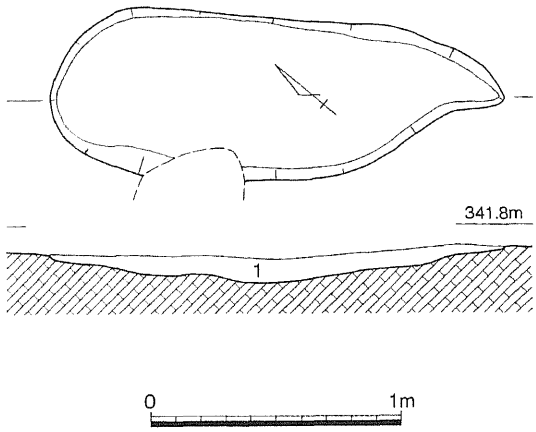
土壙12（第８・34図・図版10－２）

調査区の南東部、土壙11の南0.25mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈しており、規模は長軸86 cm、短軸74 cm、検出面からの深さは32 cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、



1　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉

第36図　土壙16（1/30）



1　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉

第37図　土壙17（1/30）

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

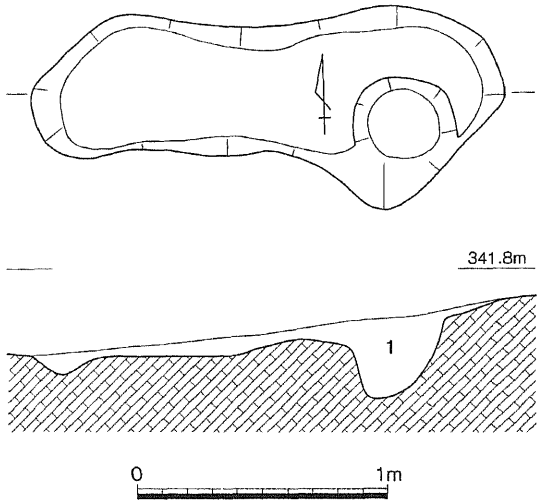
土壙13（第８・35図）

調査区の南西部、溝３の北１ｍに位置する。平面形は不整な楕円形を呈している。基盤層の岩盤を掘り込んでおり、北側はやや不明瞭である。規模は長軸125 cm、短軸91 cm、検出面からの深さは10 cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙14（第８・35図・図版10－３）

調査区の南東部、土壙15の北0.1ｍに位置する。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸81 cm、短軸44 cm、検出面からの深さは10 cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。



1　浅黄色粘性砂質土〈炭、地山ブロック含〉

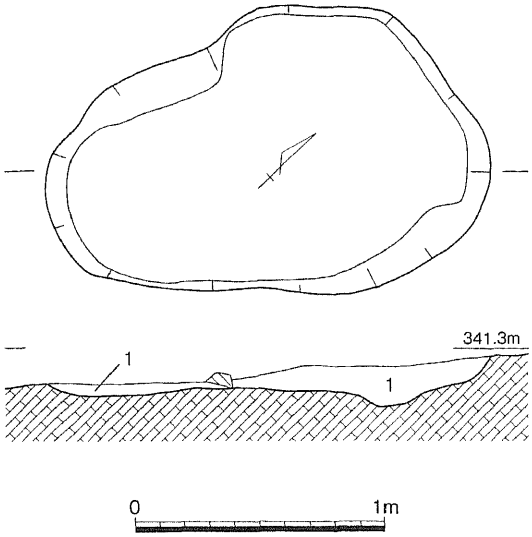
第38図　土壙18（1/30）

土壙15（第８・35図）

調査区の南東部、土壙14の南0.1ｍに位置する。南側は調査区の外へと延びる。平面形は不整な円形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸53 cm、短軸48 cm、検出面からの深さは８cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

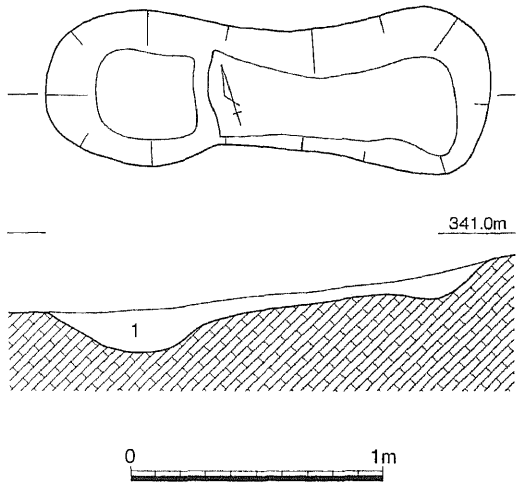
土壙16（第８・36図）

調査区の南西部、掘立柱建物２の北0.85ｍに位置する。溝３に切られている。平面形は不整な円形を呈していたと考えられる。規模は現存長であるが、長軸105 cm、短軸62 cm、検出面からの深さは10 cmである。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づ



1　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉

第39図　土壙19（1/30）



1　浅黄色粘性砂質土〈地山ブロック含〉

第40図　土壙20（1/30）

けられる。

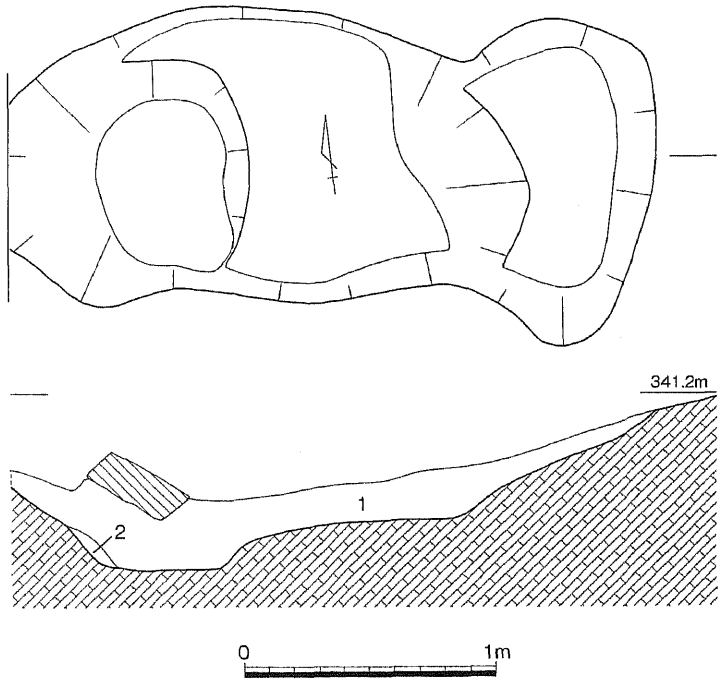
土壙17（第８・37図）

調査区の南西部に位置する。柱穴３に切られている。平面形はやや不整な楕円形を呈しており、規模は長軸182cm、短軸65cm、検出面からの深さは10 cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙18

（第８・38図・図版11－１）

調査区の南西部、掘立柱建物２の東1.2m、土壙17の南1.1mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈しており、規模は長軸188 cm、短軸81 cmを測る。また断面形は段状を呈しており、２段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で32 cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。



1　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉
2　明黄褐色粘性砂質土〈地山ブロック含〉

第41図　土壙21（1/30）

土壙19（第８・39図）

調査区の南西部に位置する。竪穴住居２を切っている。平面形は楕円形を呈している。西側は基盤層の岩盤を掘り込んでいる。規模は長軸178 cm、短軸114 cm、検出面からの深さは16 cmを測る。遺物

は出土していないが、埋土が地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙20（第８・40図・図版11－２）

調査区の南西隅、土壙21の南1.6m、掘立柱建物２の西１mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は長軸175 cm、短軸66 cmを測る。断面形は段状を呈しており、２段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で16 cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壙21（第８・41図）

調査区の南西部、土壙20の北1.6m、掘立柱建物２の北西0.8mに位置する。西側は調査区の外へと延びる。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は残存長であるが、長軸256 cm、短軸130 cmを測る。また断面形は段状を呈しており、３段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で28 cmである。埋土は２層からなり、１層上面で50 cm程度の礫を検出した。礫は自然石であり、加工痕、使用痕等は確認できなかった。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土と明黄褐色粘性砂質土である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

５　溝

溝１（第８・42図・図版11－３）

調査区の北西部、土壙２と土壙３の間に位置し、東から西へと流走する溝である。全長は4.1mであり、上端幅69 cm、底面幅65 cm、検出面からの深さは７cmを測る。埋土は地山ブロックを含む灰黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

溝２（第８・42図）

調査区の北西部、竪穴住居２の北3.5mに位置し、南東から北西へと流走する溝である。溝の西側において一度途切れているが、一連の溝であると考えられる。

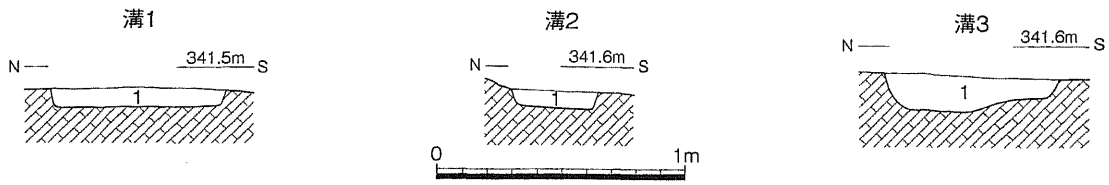
全長は3.9mであり、上端幅35 cm、底面幅30 cm、検出面からの深さは７cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

溝３（第８・42図・図版12－１）

調査区の南西部、竪穴住居２の南2.8m、掘立柱建物２の北1.7mに位置し、東から西へと流走する溝であり、土壙16を切っている。東側の端部において、北へと湾曲する。

全長は5.5mであり、上端幅68 cm、底面幅23 cm、検出面からの深さは15 cmを測る。溝の中央部において底面に段が存在し、西側が一段低くなる。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。竪穴住居２に付随する溝の可能性もある。



1　灰黄色粘性砂質土（地山ブロック含）　　1　浅黄色粘性砂質土（地山ブロック含）　　1　浅黄色粘性砂質土

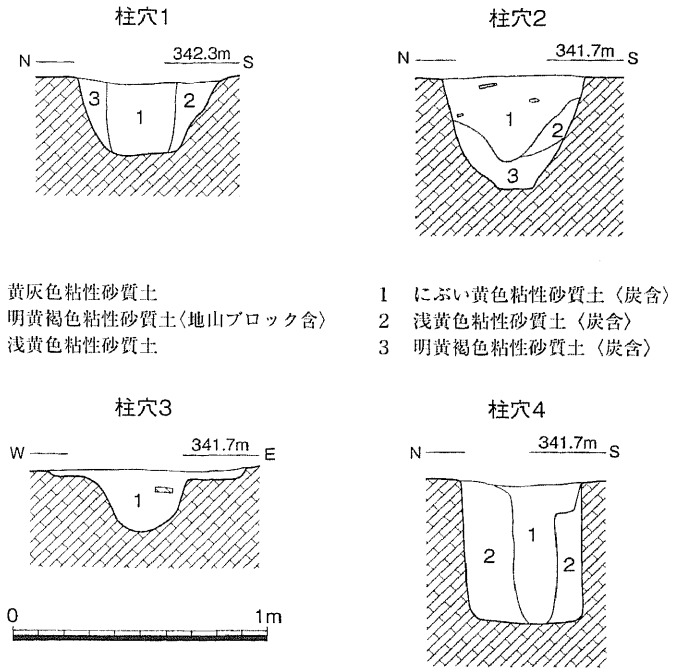
第42図　溝１～３（1/30）

6　柱穴

柱穴１（第８・43図）

調査区の北東部、土壙８の北東1.5m、掘立柱建物１の南東４ｍに位置する。今回の調査において、標高の最も高い場所で検出した遺構である。また、この柱穴は平成17年度に実施された試掘調査の際に検出されていたものである。

平面形は円形を呈している。規模は長軸55cm、短軸42cm、検出面からの深さ28cmを測る。埋土は黄灰色粘性砂質土、地山ブロックを含む明黄褐色粘性砂質土、浅黄色粘性砂質土の３層からなり、第１層の黄灰色粘性砂質土は柱痕跡であると考えられる。柱痕跡の直径は約25cmである。



1　黄灰色粘性砂質土
2　明黄褐色粘性砂質土〈地山ブロック含〉
3　浅黄色粘性砂質土

1　にぶい黄色粘性砂質土〈炭含〉
2　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉
3　明黄褐色粘性砂質土〈炭含〉

1　灰黄色粘質土〈炭含〉

1　浅黄色粘性砂質土〈炭含〉
2　明黄褐色粘質土〈地山ブロック含〉

第43図　柱穴１～４（1/30）

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期の範疇と考えられる。

柱穴２（第８・43図）

調査区の南西部、土壙16の南東1.3mに位置する。他の柱穴と切り合い関係にある。平面形は不整な円形を呈している。規模は長軸61cm、短軸48cm、検出面からの深さ45cmを測る。埋土はにぶい黄色粘性砂質土、浅黄色粘性砂質土、明黄褐色粘性砂質土の３層からなり、いずれの層も炭粒を含んでいる。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期の範疇と考えられる。

柱穴３（第８・43図）

調査区の南西部、土壙18の北１ｍに位置し、土壙17を切っている。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸78cm、短軸46cm、検出面からの深さは25cmを測る。検出面から４cmのところから深く掘りこまれており、断面形は段状を呈している。埋土は炭粒を多く含む灰黄色粘質土の単層からなる。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期のものと考えられる。

柱穴４（第８・43図）

調査区の南西部、土壙18の南0.6mに位置する。平面形は円形を呈している。規模は径40cm、検出面からの深さ56cmを測る。埋土は炭粒を多く含む浅黄色粘性砂質土と地山ブロックを含む明黄褐色粘質土の２層からなり、浅黄色粘性砂質土は柱痕跡であると考えられる。柱痕跡の直径は上端約30cm、下端約10cmである。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期のものと考えられる。

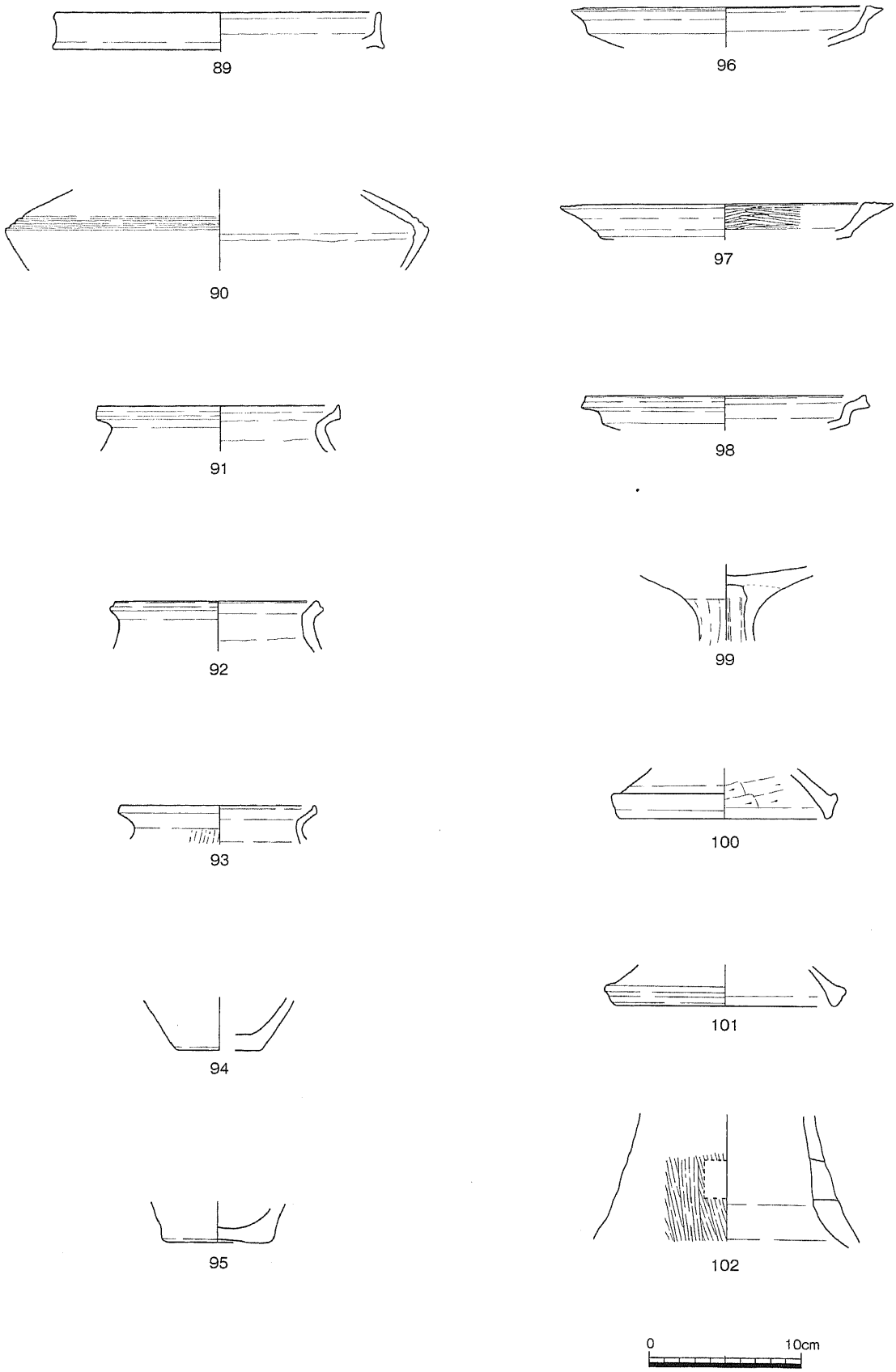
7　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第44 ～ 49図、図版12・16）

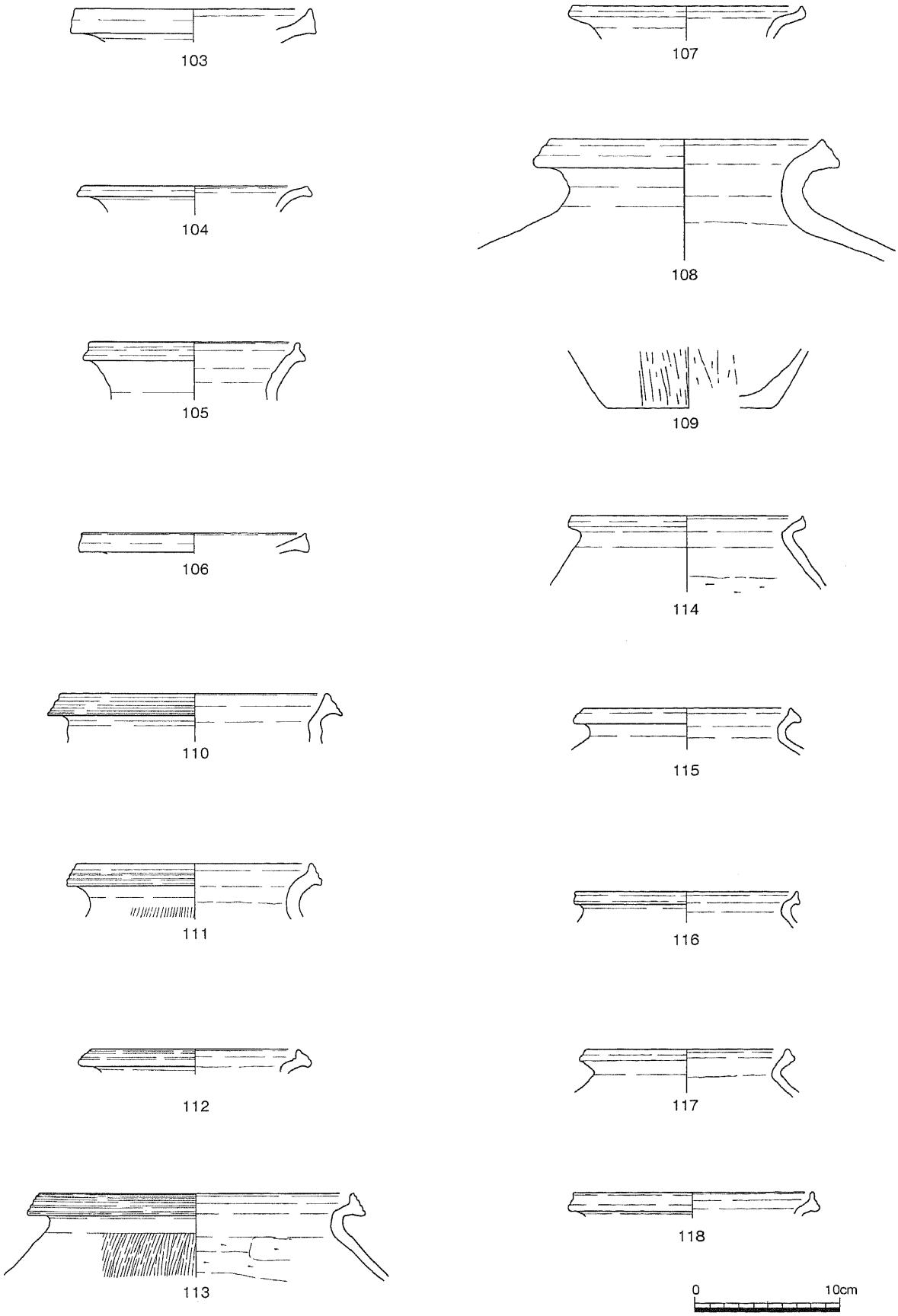
遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器を取り上げる。このようにして出土した土器の大半は弥生時代後期に属する遺物であり、遺跡の消長を反映している。ここでは当該期の遺物の中から、残存状況のよいもの、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げている。弥生土器89 ～ 102は調査区中央部の露岩周辺出土のものであり、これ以外は表土中及び遺構検出中出土のものである。壺89は口縁部を上方へ拡張する。90は算盤玉形を呈する胴部をもつ直口壺である。外面には３条の沈線を施文する。91 ～ 95は甕である。甕91・93は口縁端部を上方へわずかに摘みあげ、沈線を施す。甕92は口径13.2 cmを測る。甕93の外面にはタテ方向のハケメを施す。甕94 ・ 95は底部であり、95は底径2.6 cmを測る。96 ～ 101は高杯である。高杯96は口縁部が外方に開き、端部を肥厚させる。高杯97は口縁端部を外方へ拡張し、凹線文４条を施文し、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。高杯98は杯部から外方へ屈曲し、口縁端部を拡張し、沈線を施す。高杯99は脚柱部である。外面はタテ方向のナデ調整を施す。高杯100は裾端部を肥厚し、外方へ張り出す。内面はヘラケズリを施す。高杯101は裾端部を肥厚させ凹線文を施す。102は器台の脚柱部から裾部にかけての破片である。外面調整はタテ方向のハケメを施す。調整後に長方形の透かし孔が穿たれる。岩周辺部の包含層出土遺物は甕91 ～ 95以外は胎土中に角閃石を含み、内外面には赤色顔料を塗布する土器である。103 ～ 109は壺である。103は口縁端部に沈線を施す。壺104は口径15.4 cmを測る。壺105は口縁端部を上方へ摘み上げ、ヨコナデで成形をする。胎土には角閃石を含み、赤色顔料を塗布している。壺106は口縁端部を肥厚し、内面には赤色顔料が残着する。壺107は口縁端部を上方へわずかに摘み上げる。108は竪穴住居２の北側付近で出土した短い頸部をもつ壺である。口縁部から胴部上半部にかけて残存している。口縁端部は肥厚し、沈線を施す。調整は器壁の剥離が著しく不明瞭である。胎土中に角閃石は含有しないが、赤色顔料を塗布している。壺109は底部であり、外面はタテ方向のハケメ、内面はタテ方向のヘラケズリを施す。110 ～ 145は甕である。甕110 ～ 113は口縁端部を肥厚し、２～４条の凹線文を施す。甕111は外面にタテ方向のハケメを施す。甕113の外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。口径21.8 cmを測る。甕114 ～ 118は口縁端部を上方へ摘み上げ、ヨコナデで凹部を成形する。甕114の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。口径は16.2 cmを測る。甕116の内面はヘラケズリを施す。甕119は口縁部を上方に拡張する。口径は13 cmを測る。甕120は口縁部を肥厚し、凹線文２条を施文する。甕121は口縁部を肥厚し、ヨコナデにより端部を成形する。甕122は口縁端部を上方へわずかに摘み上げる。内面は胴部上半までヨコ方向のヘラケズリを施している。口径は17 cmを測る。甕123の口縁部は外方に短く直線的に延ばす形態をとる。甕126は口縁部を上方へ摘みあげ拡張し、内面はヘラケズリを施す。甕127は口径12.4 cmを測り、短く外上方に延びる形態をとり、逆「ハ」字形の肥厚した口縁端部をもつ。外面の調整は不明瞭であるが、内面は胴部上半までヘラケズリを施す。胎土は暗褐色を呈し、金雲母が顕著である。この土器は県南部での出土例は少なく、山陰地域の影響を受けた県北部の山間地域からの搬入品と考えられるものであり、これ１点のみである。甕128の断面は「く」の字状の形態を呈し、口縁端部の拡張がないものである。口径は14.4cmを測る。甕129の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。外面には楕円形を呈する黒斑がみられる。130 ～ 145は甕の底部である。甕131の外面はタテ方向のハケメ、内面はナナメ方向のヘラケズリを

施す。甕132は底径5.5 cmを測る。外面はタテ方向のハケメを施し、外面には黒斑がみられる。甕135の外面はタテ方向のナデを施す。甕136の底径は5.2cmを測る。甕141・145は焼成後の穿孔がみられる。甕143外面には黒斑がみられる。甕144の内面はヘラケズリを施す。甕110 ～ 113・115・116・118・120・121・123・128・129・137・139は胎土中に角閃石を含み、内外面に赤色顔料の残着がみられる。146 ～ 165は高杯である。146 ～ 152は口縁端部を肥厚または拡張させるものである。高杯146は口縁端部を肥厚し、外面に凹線文を施文する。高杯152は口縁端部を外方へ拡張し、凹線文３条を施文する。内外面の調整はタテ方向のヘラミガキを施す。153 ～ 158は、杯部から脚柱部にかけてのものである。中には円盤充填が認められる。高杯159は脚柱部に櫛描きの沈線文を巡らす。高杯160は北側の調査区境で出土し、裾端部を内傾して肥厚させ、凹線文を施す。脚柱部の文様は螺旋の櫛描き沈線と裾にタテ方向の沈線を施文する。円形の透かし孔を４個もつが貫通はしていない。円盤充填が認められる。高杯161は裾端部が外方へ張り出し、円形の透かし孔は内面に抜ける。タテ方向の沈線を施す。高杯163は外面に櫛描沈線を施文する。内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。高杯164は、裾端部を肥厚し凹線文２条、脚柱部には櫛描き沈線を施文する。内面は脚裾部にヨコ方向のヘラミガキ、脚柱部にタテ方向のナデを施す。高杯165は裾端部を肥厚させる。高杯158以外は胎土に角閃石を含み、赤色顔料を塗布しているものである。166 ～ 168は鉢である。鉢166は口径18.8 cmを測る。内外面に赤色顔料がみられる。鉢167は口縁端部を肥厚させ、上方へ少し拡張をする。鉢168は口縁端部を肥厚し凹部を形成する。内外面に赤色顔料が残着している。Ｓ22は長さ36 ㎜、幅19 ㎜、厚さ４㎜、重さ３ｇを測るサヌカイト製の平基式の石鏃である。Ｓ23は南側の調査区境で出土した粘板岩製の石包丁で長さ60 ㎜、幅35 ㎜、厚さ９㎜、重さ21.5ｇを測る。他にも平成17年度の試掘調査ではサヌカイト製の石包丁が出土している。Ｓ24は長さ89.5 cm、幅39 cm、厚さ20 cmを測る安山岩製の蛤刃石斧である。Ｓ25は用途不明石製品である。長さ79 ㎜、41 ㎜、厚さ９㎜、重さ32.5ｇを測る。石材は粘板岩を使用しており、中央部側面の括れ部は両端に抉り調整を施し、一見左右対称となっている。表面・側面ともに丁寧な研磨調整が施されている。天地は不明であるが横軸の幅が大きい方を任意で天としている。形態的に類似するものでは、岡山市の百間川兼基遺跡大上田調査区土器溜り３出土の人形土製品が挙げられる。Ｓ26・Ｓ27は流紋岩製の石錘である。やや楕円形の円礫を使用し、縄掛け用の溝を施す。Ｓ26は長さ41 ㎜、幅36.5 ㎜、厚さ31 ㎜を測る。Ｓ27は半分が欠損した状態で出土している。残存長は、56.5 ㎜、残存幅43 ㎜、厚さ19 ㎜、重さ62ｇを測る。Ｓ28は花崗岩製の敲石であり、外周には敲打痕がみられる。長さは104 ㎜、幅81.5 ㎜、厚さ44 ㎜、重さ556ｇを測る。Ｓ29 ～ 31は砥石である。Ｓ29は長さ59 ㎜、幅39 ㎜、厚さ25 ㎜、重さ86.5ｇを測り、石材は泥岩である。Ｓ30は長さ71 ㎜、幅31 ㎜、厚さ29 ㎜、重さ95ｇを測り、石材は砂岩である。Ｓ31は長さ104.5 ㎜、幅68 ㎜、厚さ28 ㎜、重さ250ｇを測り、石材は泥岩である。Ｃ３は球形の土玉で穿孔があり貫通している。表面には規則的な20個の刺突文を施しているが貫通はしていない。包含層のサヌカイト片は総重量367.5ｇを測る。

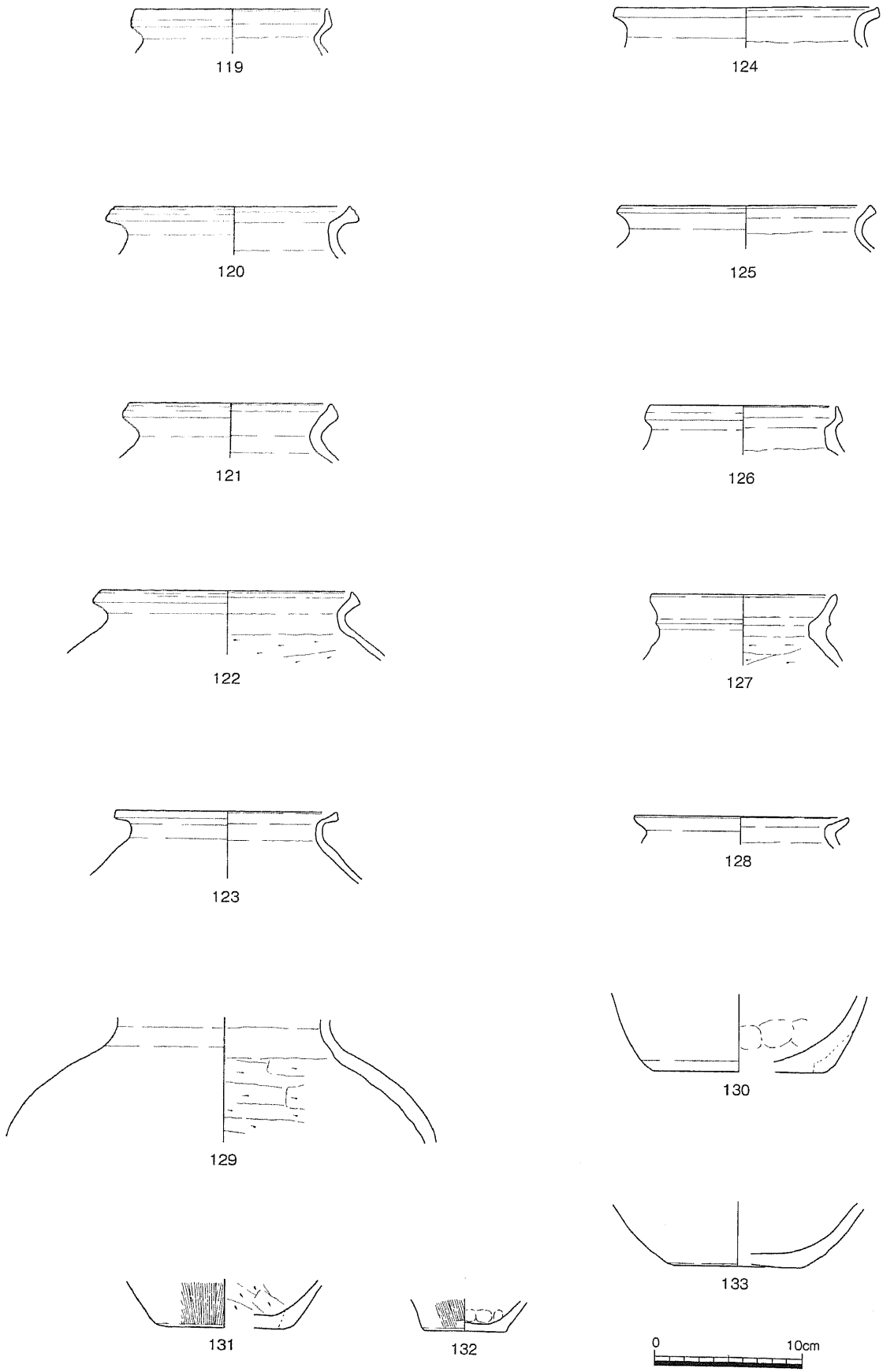
写真10　サヌカイト剥片



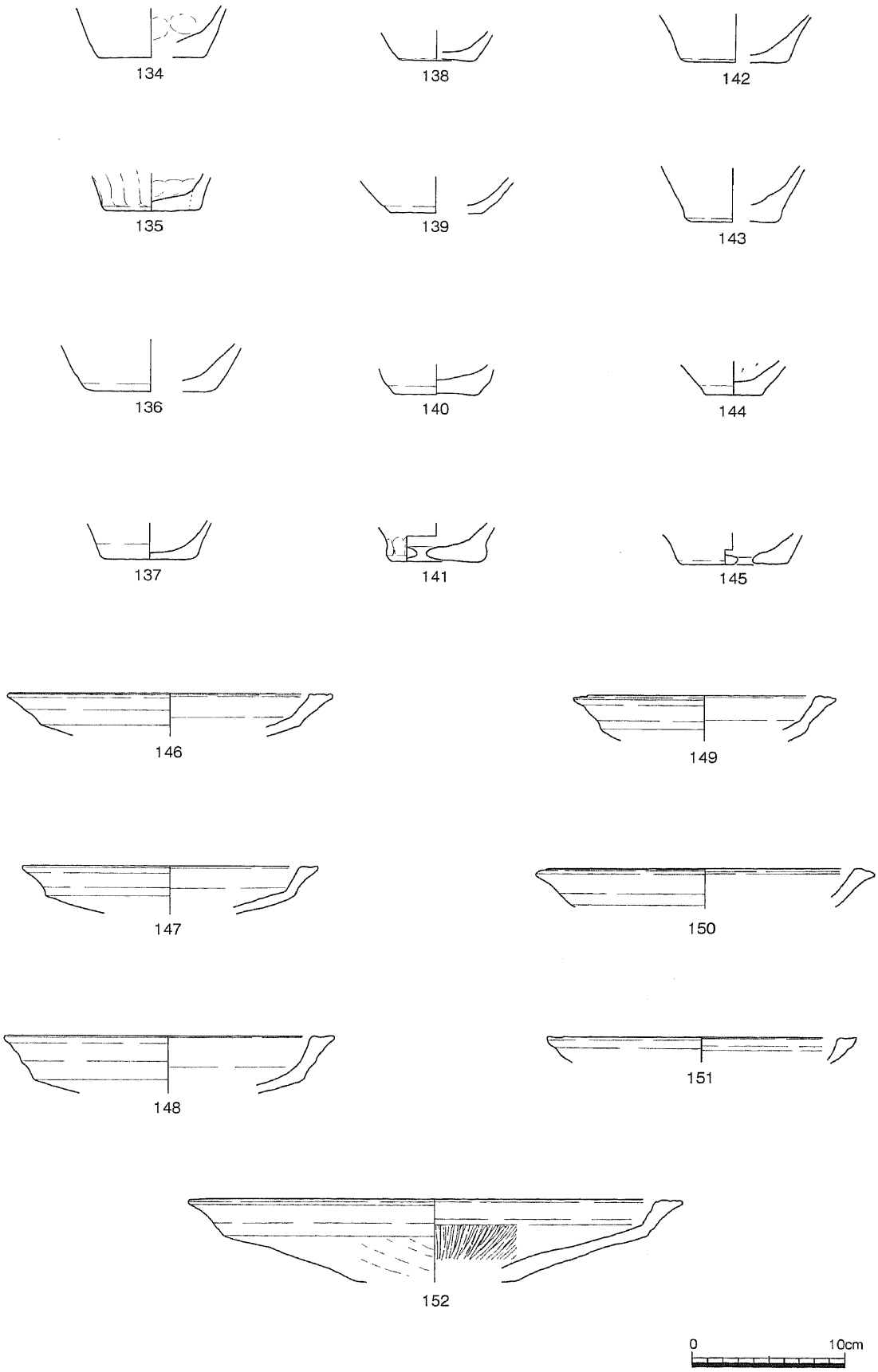
第44図　中央部岩周辺の出土遺物（1／4）



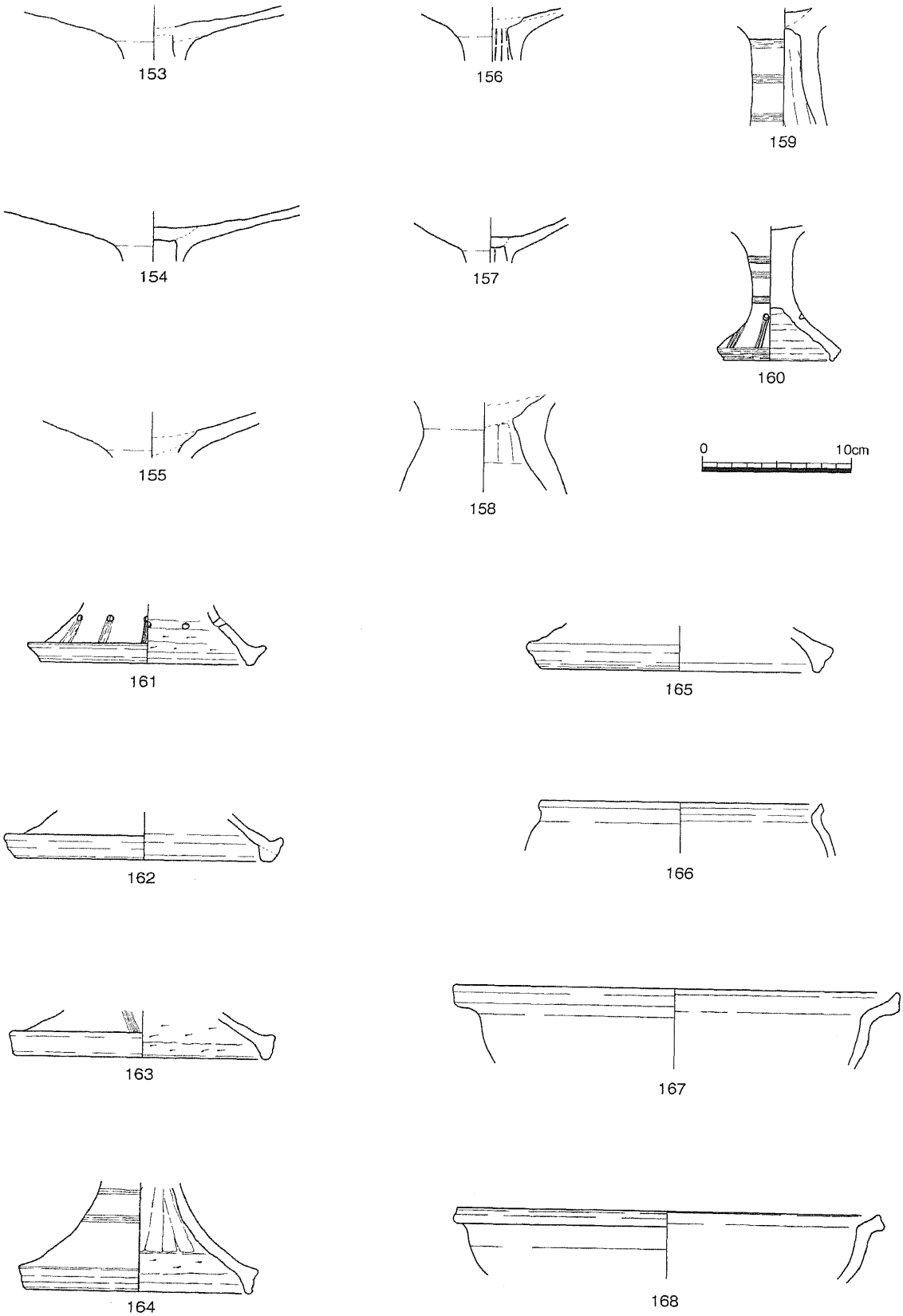
第45図　遺構に伴わない遺物①（1／4）



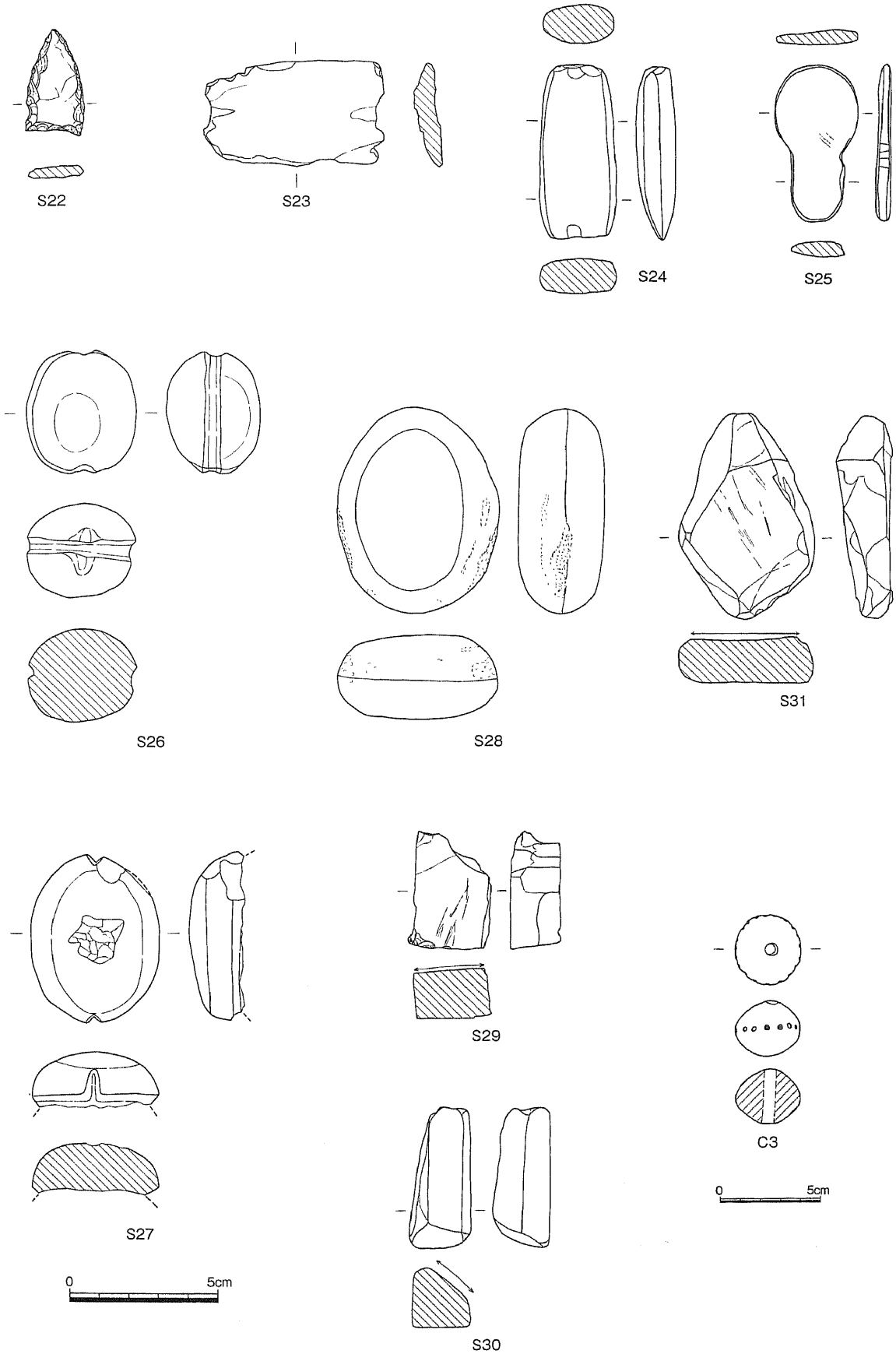
第46図　遺構に伴わない遺物②（1／4）



第47図　遺構に伴わない遺物③（1／4）



第48図　遺構に伴わない遺物④（1／4）



第49図　遺構に伴わない遺物⑤（1／2・1／3）

第３節　古墳時代以降の遺構と遺物

第50図　古墳時代以降の遺構全体図（1/200）

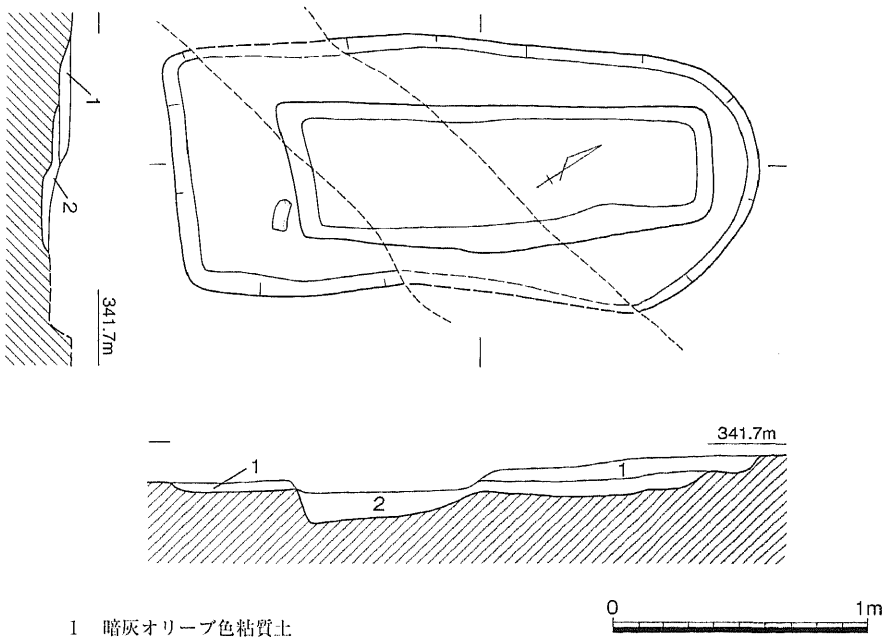
１　概要

表土層除去の後、検出した遺構である。古墳時代以降の遺構としては、土壙墓１基、土壙12基、溝４条及び柱穴である。標高342.5mの等高線よりも以下の西側緩斜面において遺構を検出している。先述したが、尾根頂部周辺で遺構が検出されない理由は、気象観測機器設置に伴うコンクリート造成や昭和30年代の造成工事の際に地形改変がなされているために遺構が削平を受けている可能性が考えられる。平成17年度の試掘調査では、古代の土器片が出土しているが当該期の遺構は検出されていない。検出した遺構では、弥生時代の包含層を掘削しており弥生土器やサヌカイト片が出土しているが遺物は皆無である。包含層から８点の土器が出土したのみである。そのために時期の位置づけを古墳時代以降としている。

2　土壙墓

土壙墓１（第50・51図、図版13－２）

調査区西側の中央、土壙30の北約1.5mにおいて検出した。遺構の中央部分を溝６によって切られている。掘り方の平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸231 cm、短軸103 cm、検出面からの深さは19 cmを測る。当初、土壙と考えて調査をしていたが、精査を重ねるにあたり、内側に長方形を呈する掘り方を検出した。埋土は外側の掘り方には、混入しない炭が含有されており、区別することができた。規模は長軸164 cm、短軸64 cmを測る。小口の幅は北東側で43 cm、南西側で54 cmを測り、南西側が11 cm広くなる。断面形は、検出面から４cmで平坦となり、さらに南側で15 cm下がる。断面形では二段掘り状になっている。壙内からは長さ11 cmの流紋岩が検出されたが、遺物は確認されなかった。



1　暗灰オリーブ色粘質土
2　暗灰オリーブ色粘質土〈炭含〉

第51図　土壙墓１（1/30）

3　土壙

土壙22（第50・52図）

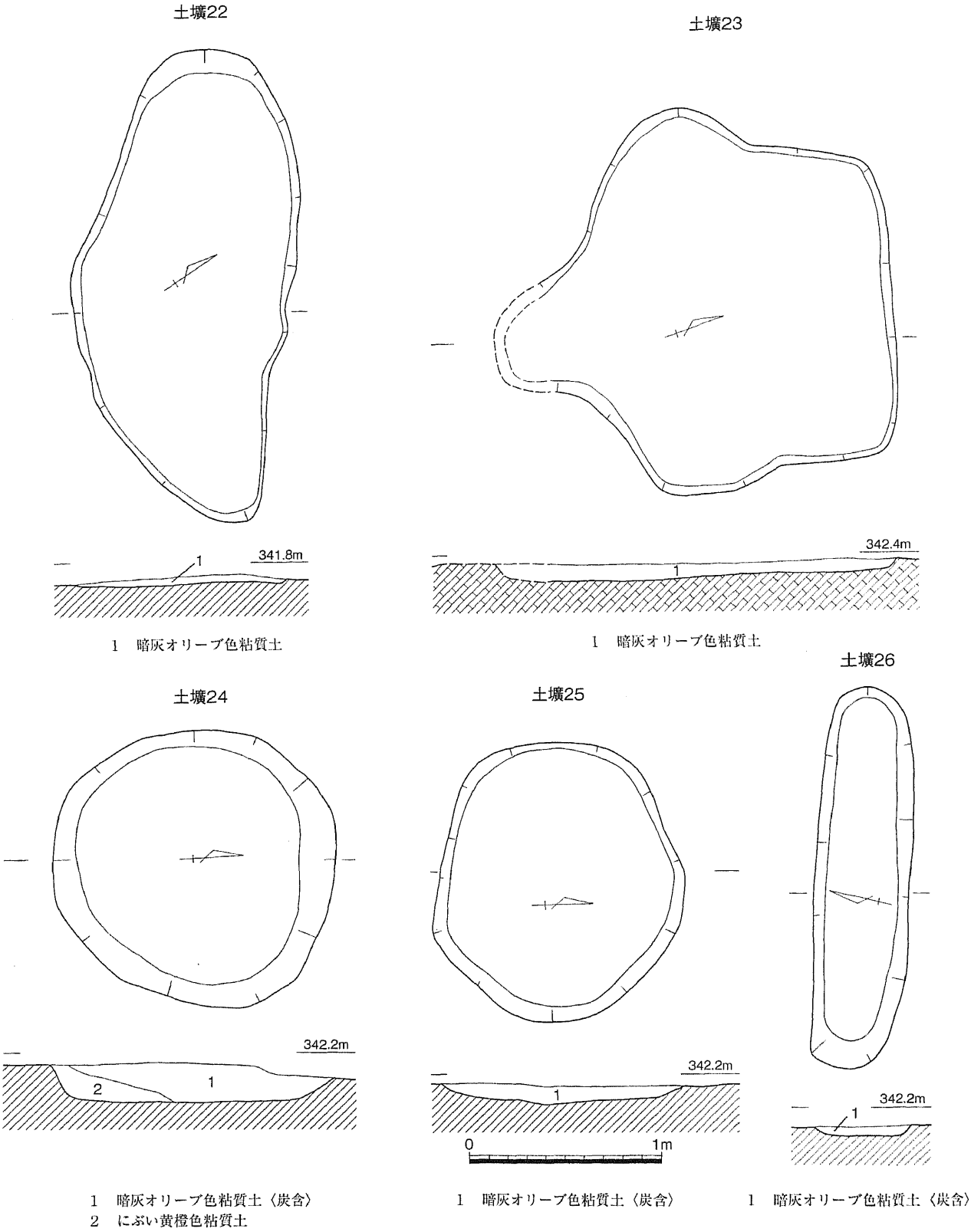
調査区の北西部に位置する。平面形は、不整な楕円形を呈しており、規模は長軸245cm、短軸114cm、検出面からの深さは４cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

遺物は出土していない。

土壙23（第50・52図、図版13－３）

調査区の中央に位置する。平面形は不整形を呈しており、規模は長軸207cm、短軸200cm、検出面からの深さは９cmを測る。基盤層を掘り込んでいる。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

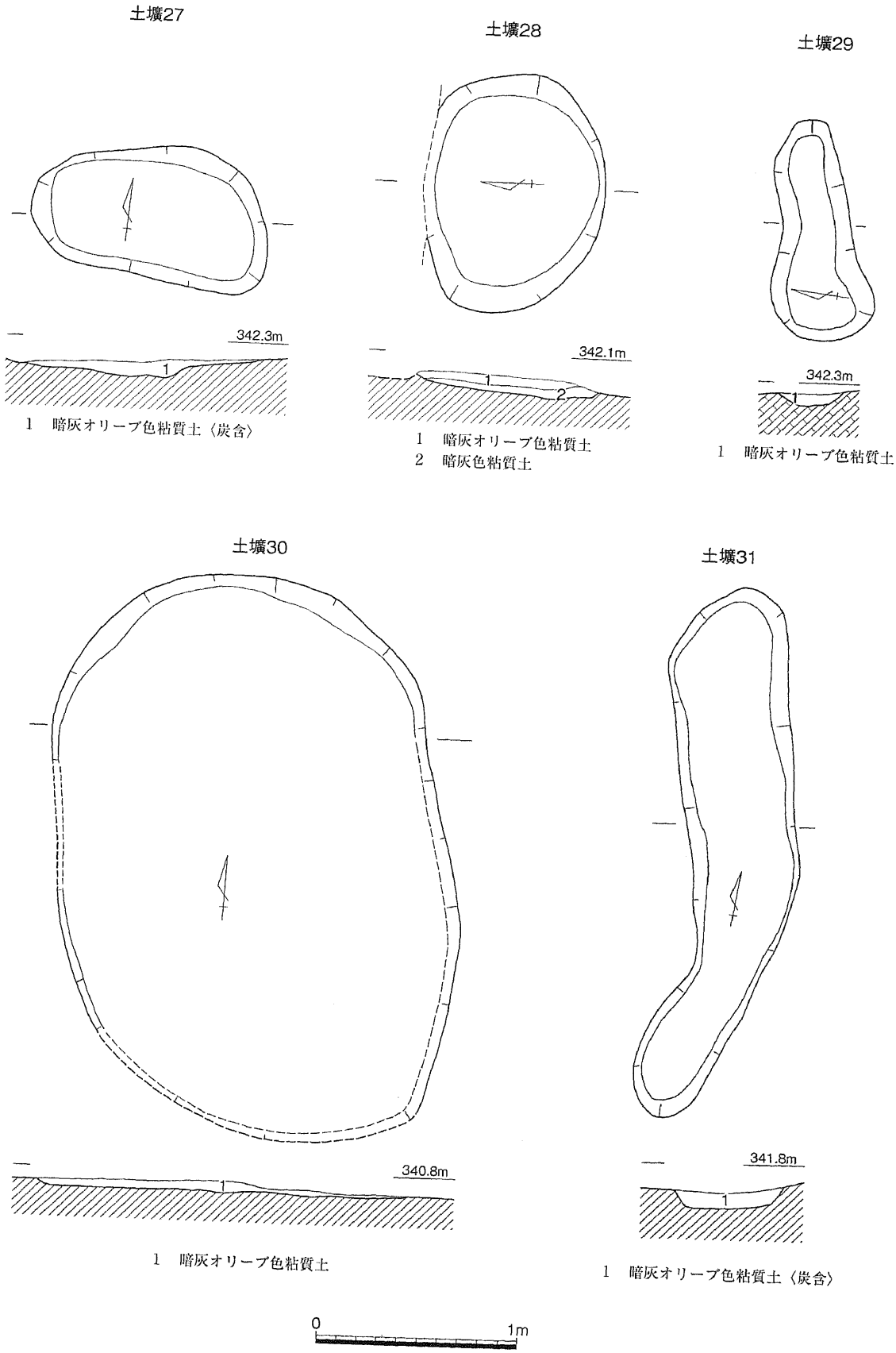
遺物は出土していない。



第52図　土壙22～26（1/30）

土壙24（第50・52図）

調査区の北西部に位置する。溝４を切っている。平面形は円形を呈し、規模は長軸145cm、短軸143cm、検出面からの深さは21cmであり、古墳時代以降の土壙の中では最も深いものである。埋土は、



第53図　土壙27～31（1/30）

上層が炭を含む暗灰オリーブ色粘質土であり、下層がにぶい黄橙色粘質土である。

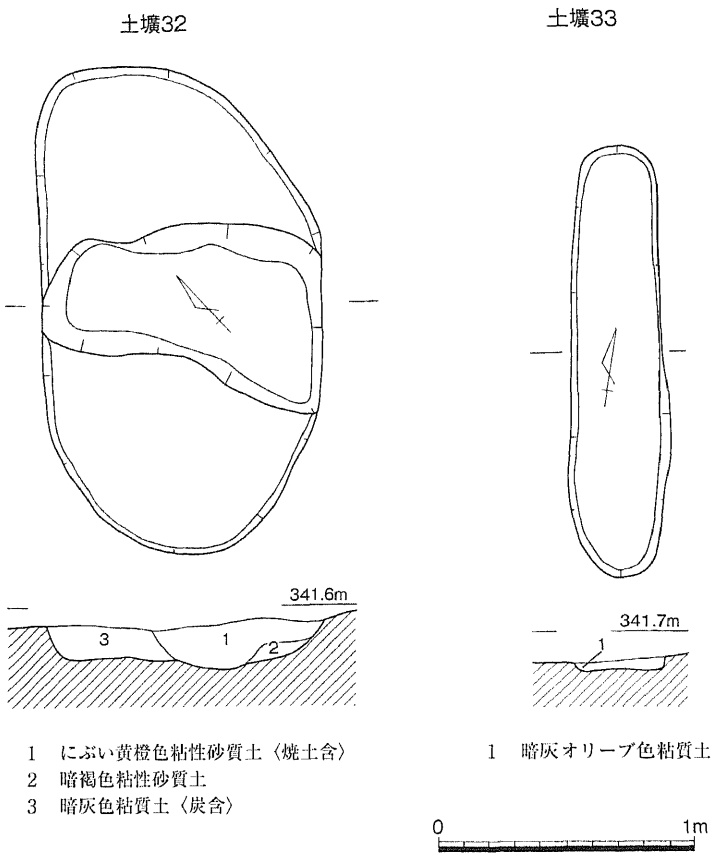
土壙25（第50・52図）

調査区の北西部に位置する。溝５を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸144cm、短軸127cm、検出面からの深さは９cmを測る。埋土は炭を含む暗灰オリーブ色粘質土である。

遺物は出土していない。

土壙26（第50・52図）

調査区の北西部、溝４の北側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸197cm、短軸48cm、検出面からの深さは５cmを測る。埋土は炭を含む暗灰オリーブ色粘質土である。



第54図　土壙32・33（1/30）

土壙27（第50・53図）

調査区の北西部、溝４と溝５の間に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸116cm、短軸70cm、検出面からの深さは９cmを測る。埋土は炭を含む暗灰オリーブ色粘質土である。

土壙28（第50・53図）

調査区の北西部、溝５の南側に位置する。溝５に北側を切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸119cm、短軸90cm、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は上層が暗灰オリーブ色粘質土であり、下層が暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

土壙29（第50・53図）

調査区の中央、土壙23の北西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸51cm、検出面からの深さは６cmを測る。基盤層を掘り込んでいる。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

土壙30（第50・53図）

調査区の西側中央部に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は現存長であるが、長軸280cm、短軸185cm、検出面からの深さは６cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

土壙31（第50・53図）

調査区の北西部、溝６の東側に位置する。平面形は長楕円形を呈するが、南側においてやや西へ湾曲している。溝状を呈しているが、溝６と連結していないことや底面に傾斜が認められないことから、本書では土壙として扱うこととする。規模は長軸264cm、短軸59cm、検出面からの深さは10cmを測

る。埋土は炭粒を含む暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

土壙32（第50・54図）

調査区の西側中央部、土壙31と土壙33の間に位置する。平面形は楕円形を呈し、中央において段をなし、一段低くなる。規模は長軸193cm、短軸112cm、検出面からの深さは最深部で19cmを測る。埋土は３層あり、にぶい黄橙色粘性砂質土には若干、焼土が混じる。また暗灰色粘質土には炭が混じる。

遺物は出土していない。

土壙33（第50・54図）

調査区の西側中央部、土壙32の南側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸170cm、短軸39cm、検出面からの深さは５cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

４　溝

溝４（第50・55図）

調査区の北西部に位置し、東から西へと流走する溝である。土壙24と柱穴に切られている。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は9.3mであり、上端幅64 cm、底面幅46 cm、検出面からの深さは３cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

溝５（第50・55図）

調査区の北西部、溝４と溝６の間に位置する。土壙25に切られており、土壙28を切っている。東から西へと流走する溝である。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は14.7mであり、上端幅40 cm、底面幅30 cm、検出面からの深さは７cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

溝６（第50・55図）

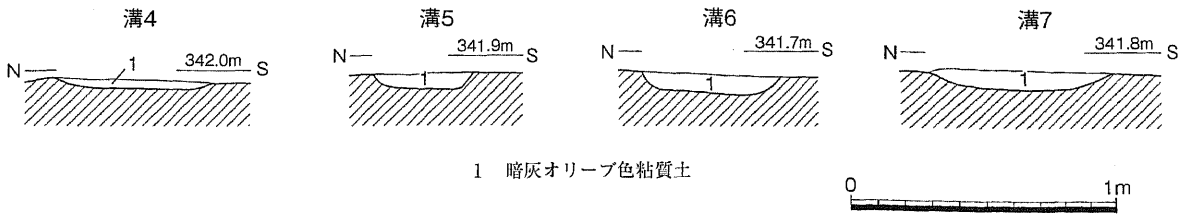
調査区の西側中央部、溝５の南に位置し、土壙墓１を切っている。東から西へと流走する溝である。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は４mであり、上端幅54 cm、底面幅35 cm、検出面からの深さは７cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

溝７（第50・55図）

調査区の南西部に位置する、東から西へと流走する溝である。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は8.1mであり、上端幅71 cm、底面幅47 cm、検出面からの深さは８cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。



第55図　溝４～７（1/30）

5　遺構に伴わない遺物

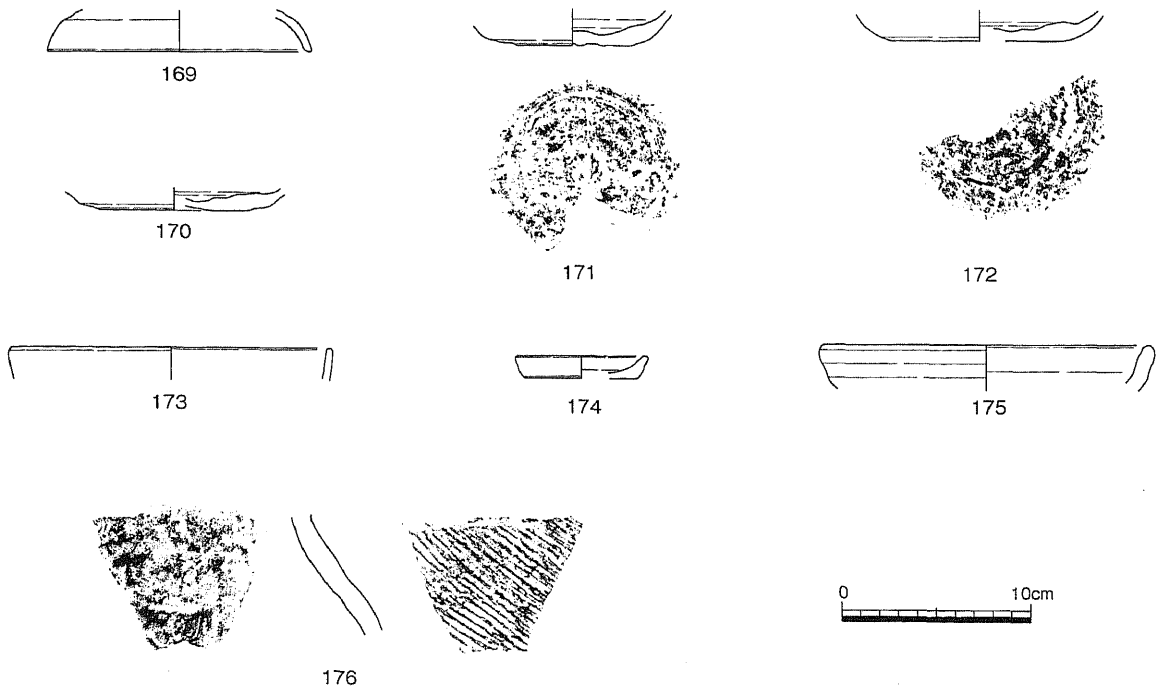
遺構に伴わない遺物（第56図・図版15－２）

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器のうち図示可能遺物、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げる。

169は須恵器の杯蓋の口縁部である。口縁部の端部は丸く仕上げられており、肩部はナデによって若干の段がみられる。古墳時代後期と考えられる。**170**～**172**は須恵器の杯身の底部である。復元径は7.4～9.0cmであり、底面外面はヘラキリが行われ、その後整形は省略されている。内面はナデにより整形されている。胎土には0.2cm程度の白色礫を多く含有している。ヘラキリがみられることから古墳時代後期から古代にかけての時期が考えられる。**173**は須恵器の杯身または椀の口縁部である。端部は丸く仕上げられている。小片のため、時期は不明である。**174**は須恵器の小皿である。口縁部の復元径は7.4cmである。内外面ともにナデにより整形が行われており、胎土は比較的精緻なものである。古代末から中世の範疇でとらえることができよう。**175**は瓦質土器の椀の口縁部と考えられる。端部は丸く仕上げられており、内面は工具によるナデの痕跡が認められる。胎土には１～５㎜程度の赤色粒が混在する。**176**は亀山焼の甕である。破片上方において、外へと屈曲する様相が観察されることから、頸部であると考える。外面には右下がりの平行タタキ、内面にはナデ調整が行われている。外面に平行タタキが施されていることから、12世紀末から13世紀前半のものと考えられる[1]。

註

(1)岡田博「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　岡山県教育委員会1988



第56図　遺構に伴わない遺物（1／4）

第４章　まとめ

第１節　集落構造と変遷

今回の竹林寺天文台遺跡の調査では、弥生時代の集落跡や古墳時代以降の遺構を確認した。なかでも弥生時代の遺構が大半を占め、調査区の広範囲に認められることから、丘陵頂部全体が弥生時代の集落跡を中心とした遺跡であることが判明した。弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居５軒、掘立柱建物２棟で構成されており、全て弥生時代後期の範疇に収まる。

平成15年度に西側丘陵頂部の確認調査が実施されている（第４図参照)。調査の結果、第１地点から多角形の竪穴住居１軒が検出されており、弥生時代後期前葉～中葉の土器が出土している。第２地点から焼失住居と推定される円形の竪穴住居１軒が検出されており、弥生時代中期後葉の土器が出土している。第２地点の南側では、昭和42年に観測施設建設時に箱式石棺が不時発見されている。その際に多くの弥生土器、サヌカイト製の石鏃・石包丁などが出土している。このことから、当調査区と対峙する西側丘陵頂部平坦地にも一部墓域を含めた集落が丘陵全体に広がっていると推定できる。

当調査区で集落が形成されるのは、弥生時代後期前葉になってからであり、後期後葉まで営まれる(第８図参照)。後期前葉では、竪穴住居１ａと竪穴住居２ａを配置している。竪穴住居１と掘立柱建物１の関係は、竪穴住居１ａの壁体溝から約１ｍの控えと周堤や垂木等の存在から併存は厳しいと考えられる。竪穴住居１ｂ段階では壁体溝から約２ｍの控えがあり、前段階と比較すると併存は想定できる。掘立柱建物２の時期については詳細な時期は特定できていない。後期後葉段階では、竪穴住居２ａ→ｂ→ｃへと拡張並びに建て替えが認められる。出土した弥生土器からこの段階で東側丘陵頂部での集落機能が停止しているものと考える。（水田）

註

間壁 忠彦「３ 山上の弥生遺跡」『鴨方町史 本編』 鴨方町 1990

小林 利晴「竹林寺天文台遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』34　岡山県教育委員会 2004

第２節　周辺の弥生時代遺跡

竹林寺天文台遺跡は、標高約340～360ｍに位置する弥生時代の高地性集落である。竹林寺山山麓地域には、弥生時代の集落及び散布地が存在する（第２図参照)。当遺跡の山麓は、南北地域において地形が異なる。北側の矢掛町は小田川水系で、支流である道々川による扇状地が広がる。南側の浅口市は里見川水系で、支流である本庄川による河岸段丘となっている。

南側の本庄川周辺の山腹標高約120ｍには段林遺跡・道面遺跡が立地しており、弥生時代後期後葉の竪穴住居が両遺跡から検出され、特異な立地状況をみせる。内平遺跡は標高約70ｍの丘陵上に立地し、調査の結果、弥生時代後期の集落遺跡とみられる。和田遺跡は標高約40ｍの丘陵の先端部に立地し、弥生時代後期後葉の袋状土壙が検出されている。当遺跡から約６㎞南側に位置する森山遺跡では

低丘陵に立地し、弥生時代後期前葉の竪穴住居を検出し、南側の山麓一帯に集落の広がりが想定される。

北麓地域は、道々川西岸の山裾の里山田には弥生時代中期から後期の遺跡が広がりをみせる。東岸の中山の裾部に位置する白江遺跡では弥生時代後期前葉と後期末葉の多量の土器が出土している。また、中池ノ内遺跡は弥生時代後期後葉の竪穴住居を検出しており、この一帯に大規模な集落の存在が想定できる。道々川下流域に位置する清水谷遺跡は、弥生時代後期には水田域への土地利用の変化が認められる。小田川北岸の奥迫遺跡では弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。

後期末葉になると南麓では和田遺跡、北麓では芋岡山遺跡や中池ノ内遺跡で土壙墓や土器棺を中心とした墓域が形成され、特殊壺や特殊器台が共伴する。

両地域において弥生時代後期の集落が展開していることを概観してきた。なお、当遺跡からは小田川流域の方を広範囲に確認することができることから、北麓地域と双方向的視認関係にある。

当遺跡は、瀬戸内海沿岸部特有の高地性集落の臨海性と同時に遙照山山系によって隔絶された小田川流域と瀬戸内海沿岸部とを連携する集落としての機能を兼備していると考えられる。　（水田）

註

各発掘調査報告書の成果による。

第3表　竹林寺天文台遺跡周辺の主要弥生遺跡

番号	遺跡名	立地	弥生時代中期			弥生時代後期				遺構	備考
			中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	後期末葉		
1	森山遺跡	丘陵		■■■■	■■■■	━━	━━			竪穴住居・土壙・溝・土器溜り	
2	和田遺跡	丘陵				━━	━━	━━	━━	袋状土壙・土壙墓	特殊器台 玉類
3	内平遺跡	丘陵				━━	━━			溝	
4	向原遺跡	丘陵		■■■■							
5	段林遺跡	丘陵		■■■■	■■■■			━━	■■■■	竪穴住居・土壙・布跡	鉄鏃 管玉
6	道面遺跡	丘陵				━━	━━	━━		竪穴住居・柱穴列・貯蔵穴・柱穴群・土器溜り	
7	里山田下谷遺跡	平地					━━	■■■■		土壙・溝	特殊壺
8	神之脇遺跡	丘陵		━━		━━				柱穴・溝	
9	上山遺跡	平地		━━						溝	
10	奥迫遺跡	平地		■■■■	■■■■	━━	━━			竪穴住居・土壙・溝	
11	白江遺跡	平地			■■■■	━━			━━	土器溜り・溝	
12	中池ノ内遺跡	平地		■■■■	■■■■	■■■■	━━	━━	━━	竪穴住居・土器棺墓・土壙墓・土壙・柱穴	
13	芋岡山遺跡	丘陵						━━	━━	土壙墓	特殊器台 特殊壺
14	清水谷遺跡	平地			■■■■	■■■■	━━	━━		柱穴・溝・水田・落ち込み	

━━ 遺構が認められる　■■■ 土器のみが出土

第3節　竹林寺天文台遺跡からの眺望

竹林寺天文台遺跡は、標高約340～360mに位置する弥生時代後期を中心とする高地性集落である。その立地の性格から眺望は非常に良好である。当遺跡は中央の鞍部を境にして、天文台の所在する西側頂部平坦地と当調査区の東側頂部平坦地から構成されているものと現時点では考えられる。当遺跡の東側約1.5㎞には、当地域での最高峰である遙照山（標高405m）がそびえる。当調査区は標高約340mにあり、西側頂部平坦地との比高差は約20mを測ることから眺望が規制されている。この節で述べる眺望とは、西側頂部平坦地からの肉眼観察による可視範囲であることを意味する。

東方向は、遙照山の北側を通じて中国山地最南端に位置する鬼城山や旭川水系である岡山平野の中心部や操山丘陵西端を望む。南東方向は、遙照山から南側に派生する尾根の影響により児島や塩飽諸島の北側島嶼部の視界が遮られる。しかし、瀬戸大橋の岩黒島大橋から南側を目視することは可能である。備讃瀬戸南岸地域では、五色台・烏帽子山・サヌカイトの産出地である金山・城山・飯野山・大高見峰・象頭山・丸亀平野、そして奥側に讃岐山脈を望む。真南には、直線距離で約40 km先に紫雲出山遺跡の位置する荘内半島、その奥側には四国山地を望むことができる。燧灘沿岸地域では宇摩平野・飯岡台地・高縄半島の北東地域を望む。備後灘沿岸では、松永湾の東側の丘陵に遮られ、芸予諸島は目視できない。西方向は約20 km先の山の切れ目に神辺平野を望む。その方向から北側にかけては吉備高原となり、気象条件が整えば約80 km先に大山を目視することができる。

当遺跡から肉眼で眺望可能な範囲を指摘したが、これには瀬戸内海式気候の影響により常時鮮明に目視することは不可能である。実際、4～7月の発掘調査期間中において対岸地域を確実に目視できた日数は僅かである。

当遺跡の立地的な特徴から瀬戸内海及び沿岸地域を広域的に可視しており、瀬戸内海の眺望的掌握を担っていたと考えられる。

（水田）

註

目視範囲は、現代の気候条件下によるものであり、当時の環境を反映しているとは限らない。

☆ 竹林寺天文台遺跡　■ データ及び肉眼による可視域　□ 山地及び丘陵部

第57図　竹林寺天文台遺跡からの可視域

第４節　竹林寺天文台遺跡出土の石器

今回の竹林寺天文台遺跡の発掘調査では、遺構及び包含層から本書未掲載資料を含め、53点の石器が出土した。これらの石器について、その使用石材を器種別にまとめたものが第４表である。また、調査中には製品のほかに遺構・包含層から多数のサヌカイト片が出土している。特に竪穴住居の中には微細なサヌカイト片が多量に混入しており、住居内の埋土については現場においてふるいをかけて選別を行った。ここでは弥生時代を中心に、竹林寺天文台遺跡出土石器の内容について述べたい。

器種別では、打製石包丁２点（サヌカイト１点・粘板岩１点）、石斧４点（流紋岩２点・泥岩１点・安山岩１点）、石錐３点（サヌカイト３点）、楔形石器１点（サヌカイト１点）、スクレイパー２点（サヌカイト２点）、石鏃５点（サヌカイト５点）、投弾20点（流紋岩20点）、石錘２点（流紋岩２点）、敲石３点（流紋岩１点、砂岩１点、花崗岩１点）、砥石７点（流紋岩２点、泥岩３点、流紋岩質凝灰岩１点、砂岩１点）、台石３点（流紋岩３点）、器種不明１点（粘板岩１点）となる。

重量比別では、流紋岩製品が多く2591.5ｇ（48.53％）、次いで砂岩640ｇ（11.99％）、花崗岩556ｇ（10.41％）、サヌカイト425.51ｇ（7.97％）、安山岩119.5ｇ（2.24％）、粘板岩54ｇ（1.01％）、流紋岩質凝灰岩42ｇ（0.79％）である。この重量比別では、安山岩製の台石３点（総重量31,800ｇ）は除いた数字である。また、当遺跡のサヌカイト製石器の総重量は58.01ｇ、サヌカイト剥片が遺構出土で129ｇ、包含層出土で238.5ｇあり、今回の調査区では総重量425.51ｇを測る。この数字は平成17年度試掘調査での出土品も含まれている。

サヌカイト製石器は、打製石包丁１点・石鏃５点・石錐３点・楔形石器１点・スクレイパー１点であった。サヌカイト剥片は出土しているが、石核や残核は出土していない。

当調査区で石器の主要石材である流紋岩製石器は、石斧・投弾・石錘・敲石・砥石・台石と多器種にわたり使用されている点は特徴といえよう。流紋岩は、竹林寺天文台遺跡周辺では普遍的にみられる石材であり、また、弥生時代の基盤層も流紋岩である。石錘に使用された円礫の流紋岩は、新生代洪積世に形成された山砂利層から産出されたもので、周辺地では、倉敷市真備町岡田・箭田地区～倉敷市船穂町～倉敷市玉島長尾・富地区～浅口市金光町八重・大谷・須恵・佐方地区、鴨方町六条院東・六条院中地区～浅口郡里庄町里見地区にかけて広く分布している。当遺跡からでは、直線距離６㎞圏内で入手することが可能である。泥岩は、遙照山山系とくに当遺跡から西側約1.5㎞離れた小坂東の杉谷地区で産出されることが判っており、在地産石器の可能性が考えられる。

最後に当遺跡では、流紋岩を使用した石器が多く出土している。一見すると粗雑であるため石器としての認識が難しい。そのため、遙照山山系周辺地域での発掘調査の際には粗雑な石材には、取り扱いに留意していただきたい。

（水田）

註

平井 勝『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64　ニューサイエンス社 1991

河合 忍「竹林寺天文台遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』36　岡山県教育委員会 2006

鈴木 茂之氏（岡山大学）の御教授による。

定金 司郎氏（浅口市かもがた町家公園）の御教授による。

第４表　竹林寺天文台遺跡出土石製品一覧表

器種＼石材	サヌカイト	流紋岩	粘板岩	泥岩	安山岩	流紋岩質凝灰岩	砂岩	花崗岩	合計
石包丁	1		1						2
石斧		2		1	1				4
石錐	3								3
楔	1								1
スクレイパー	2								2
石鏃	5								5
投弾		20							20
石錘		2							2
敲石		1					1	1	3
砥石		2		3		1	1		7
台石		3							3
不明			1						1
合計	12	28	2	4	1	1	2	1	53

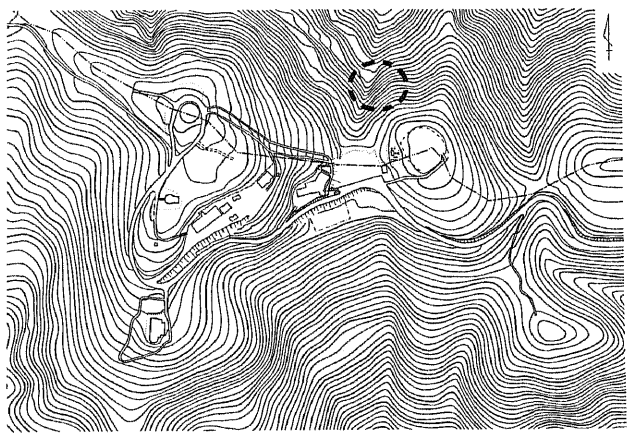
第５節　水の確保の問題

竹林寺天文台遺跡の今回の調査区は、標高約340mの高地に位置する弥生時代後期の集落遺跡である。ここでは生活環境で必要不可欠な存在である水の確保について述べたい。

弥生時代の同時期において近隣の岡山平野や神辺平野の沖積地の集落において井戸が掘削される傾向にある。井戸は、集落内から遠隔地にある河川等の水を確保に比べると集落内で安定的に需要に対して柔軟に対応ができる。当遺跡の位置している遙照山山系の周辺の矢掛町、井原市や浅口市では、発掘調査が少例であるためか弥生時代の時期に掘削された井戸の検出例はない。

竹林寺天文台遺跡の場合では、基盤層が硬質な流紋岩であり、湧水層まで井戸を掘削することは困難である。国立天文台岡山天体物理観測所が本遺跡地内に存在するが、この地まで上水道が敷設されておらず、現状では井戸を掘削して水を取得している状況にある。

当調査区の西側の鞍部（現在の駐車場）から北側の矢掛町へ散策道が整備されている。調査区から20m下った箇所の標高約310～320m付近では、湧水地点が数ヶ所確認することが出来ている。水温は夏期でも低温を保っており、水量も豊富である。湧水地点の周辺には、湿地性植物であるヤマアゼスゲが生育している環境である。このような地点を弥生時代の高地性集落の水源地の候補として想定できるものと考えている。（水田）



第58図　竹林寺天文台遺跡周辺の湧水地点

註

山本 敏夫氏（浅口市文化財保護委員）の御教授による。

第6節　県内出土の弥生時代後期の土玉

1　はじめに

今回の調査において、弥生時代後期の包含層から球状の土製品（C３）が１点出土している。この土製品は稜線上に刺突による装飾が施されているのが特徴的である。これまでの発掘調査報告書では、球状を呈する土製品は、装飾のあるものや穿孔のないものを「土玉」「土製丸玉」、それら以外のものをおおよそ「土錘」として報告している状況であり、明確に分けられているわけではない。そうした土製品の類例を集成し、県内における出土例から若干の検討を試みる。

2　分類

ここでは、断面形が円形、横長の楕円形を呈する土製品を対象とし、用語としては「土玉」を使用することとしたい。なお、最大長が最大幅よりも10㎜以上長い縦長の楕円形を呈するものと孔径が８㎜以上のものは、土錘の可能性が高いと思われるため、対象から除外した。対象とする土玉は、和田晴吾氏の管状土錘e類（断面が円形に近い、いわゆる「球形土錘」）[1]、乗松真也氏の球状土錘（球状を呈し、貫通する孔をもつもの）[2]を一部含む。

県内においては、30遺跡64点の土玉が出土している。分類は、孔・断面形態・装飾を基準に行う。孔が貫通するものを有孔土玉、貫通しないものを無孔土玉とする。また断面形によって、断面円形のものをⅠ類、楕円形のものをⅡ類とする。さらに装飾の有無により、装飾のないものをA、あるものをBとし、有孔ⅠA、無孔ⅡBと表記する。

3　傾向

類型別

類型別では、有孔ⅠAが26点（41％）、有孔ⅠBが１点（１％）、有孔ⅡAが16点（26％）、有孔ⅡBが10点（16％）、無孔ⅠAが８点（11％）、無孔ⅠBが０点、無孔ⅡAが２点（４％）、無孔ⅡBが１点（１％）出土している。また分類の基準別では、有孔が84％、無孔が16％であり、有孔のものが大多数を占めている。また断面形では、円形が53％、楕円形が47％であり、ほぼ半数である。さらに装飾では、装飾なしが82％、装飾ありが18％であり、装飾のあるものは少数であることがわかる。大きな傾向としては、有孔で装飾のないものが多数を占めるということが言える。

第５表　土玉分類表

孔	断面形態	装飾	類型
○	円	○	有孔ⅠA
		×	有孔ⅠB
	楕円	○	有孔ⅡA
		×	有孔ⅡB
×	円	○	無孔ⅠA
		×	無孔ⅠB
	楕円	○	無孔ⅡA
		×	無孔ⅡB

装飾

装飾については、断面円形のものが１点であるのに対し、断面楕円形のものが11点と多数を占めており、装飾は断面楕円形のものに施す傾向が顕著である。装飾の内容は、刺突と線刻が認められる。装飾の部位は全体に及ぶものと最も張り出した部分に施すものとがあり、線刻による装飾は全体に及ぶもののみである。

出土遺構

出土遺構別では、竪穴住居が57.8％、土壙・袋状土壙が10.9％、溝・河道が9.4％、土器溜りが3.1％、包含層が18.8％である。遺構ではない包含層からの出土が比較的高い比率を示しているが、竪穴住居からの出土が約６割を占めており、竪穴住居に伴うという傾向は重要な傾向であろう。

4　おわりに

今回、これまであまり取り上げられることのなかった土玉を対象に県内における出土事例を集成し、それらから分類を行い、いくつかの傾向について指摘を行ってきた。その結果、県内では有孔ＩＡが多数を占め、遺構では竪穴住居からの出土が比較的多く、装飾については断面形態との一定の関係性があるという傾向が認められた。

県外の事例として、1000点以上の土玉が出土している鳥取県青谷上寺地遺跡が挙げられる。出土状態も良好であり、１つの土玉にヒノキの細枝を通して輪状とし、樹皮を巻いて緊縛した状態で出土している。青谷上寺地遺跡の場合、溝からの出土が大多数を占めている[3]。土玉の機能や用途を考えるうえでは非常に良好な資料であろう。

第６表　土玉一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	計測値 最大長(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	類型	装飾	報告書掲載番号	文献
1	西江遺跡	新見市哲西町	竪穴住居	23.0	24.0	－	－	無孔ＩＡ	－	11	1
2	旦山遺跡	真庭市(久世町)	竪穴住居	22.0	21.0	－	－	無孔ＩＡ	－	C2	2
3			竪穴住居	29.0	33.0	2.0	－	有孔ＩＡ	－	C3	
4			竪穴住居	21.0	23.0	4.0	－	有孔ＩＡ	－	C4	
5			包含層	30.0	38.0	6.0	－	有孔ⅡＢ	刺突	C6	
6			包含層	22.0	31.0	5.0	－	有孔ⅡＡ	－	C7	
7	惣台遺跡	真庭市(久世町)	竪穴住居	28.0	(42.0)	7.0	24.6	有孔ⅡＡ	－	C1	
8			竪穴住居	25.0	35.0	5.0	－	有孔ⅡＡ	－	C3	
9	野辺張遺跡	真庭市(久世町)	竪穴住居	24.0	30.0	4.0	19.5	有孔ⅡＡ	－	C2	
10	下市瀬遺跡	真庭市(落合町)	包含層	23.0	28.7	4.6	－	有孔ⅡＡ	－	9	3
11	宮の前遺跡	真庭市(落合町)	竪穴住居	28.0	28.0	4.0	－	有孔ＩＡ	－	2	4
12	二宮遺跡	津山市	竪穴住居	25.0	34.0	6.0	－	有孔ⅡＡ	－	26	5
13	小中遺跡	勝田郡勝央町	竪穴住居	20.2	22.5	2.3	－	有孔ＩＡ	－	C1	6
14			竪穴住居	20.7	23.0	－	－	無孔ＩＡ	－	C1	
15			竪穴住居	20.0	20.0	－	－	無孔ＩＡ	－	C1	
16	用木山遺跡	赤磐市(山陽町)	竪穴住居	17.7	18.7	－	－	無孔ＩＡ	－	18	7
17	熊山田遺跡	瀬戸内市邑久町	土壙	20.0	19.0	6.0	－	有孔ＩＡ	－	C3	8
18	原遺跡	岡山市(御津町)	竪穴住居	21.0	28.0	2.0	－	有孔ⅡＢ	刺突	95	9
19			竪穴住居	22.0	28.0	2.0	－	有孔ⅡＢ	刺突	96	
20	雄町遺跡	岡山市	竪穴住居	22.3	21.0	3.0	9.0	有孔ＩＡ	－	15	10
21	百間川兼基遺跡	岡山市	竪穴住居	17.0	21.0	4.0	－	有孔ⅡＡ	－	5	11
22			土器溜り	21.0	21.0	3.0	－	有孔ＩＡ	－	6	
23			溝	43.0	38.0	3.0	－	有孔ⅡＢ	線刻	C10	12
24	百間川原尾島遺跡	岡山市	竪穴住居	24.0	30.0	3.0	－	有孔ⅡＢ	刺突	1	13
25			溝	36.0	35.0	6.0	34.0	有孔ＩＡ	－	C4	14
26			土器溜り	24.0	35.0	4.0	20.0	有孔ⅡＡ	－	C12	15
27			竪穴住居	17.9	22.7	3.0	8.2	有孔ⅡＢ	刺突	C4	16
28			竪穴住居	26.0	29.0	4.5	－	有孔ⅡＡ	－	C7	
29			溝	25.0	24.0	4.5	－	有孔ＩＡ	－	C18	
30			溝	28.0	33.5	2.0	－	有孔ⅡＡ	－	C25	
31	津島遺跡	岡山市	竪穴住居	26.0	29.0	－	－	無孔ⅡＡ	－	C2	17
32			河道	15.0	18.0	－	－	無孔ＩＡ	－	C22	
33			包含層	28.5	33.0	－	－	無孔ⅡＡ	－	C15	18
34	立田遺跡	岡山市	竪穴住居	28.0	29.0	3.0	25.9	有孔ＩＡ	－	C1	19
35	加茂政所遺跡	岡山市	竪穴住居	24.0	25.5	－	－	無孔ＩＡ	－	C78	20
36			竪穴住居	14.0	23.0	3.0	－	有孔ⅡＢ	刺突	C79	
37			竪穴住居	34.0	33.0	7.0	－	有孔ＩＡ	－	C82	
38			袋状土壙	28.0	28.0	4.0	－	有孔ＩＡ	－	C90	
39			土壙	(19.0)	21.0	3.0	5.2	有孔ⅡＢ	線刻	C92	
40			包含層	22.0	22.0	3.0	－	有孔ＩＡ	－	C101	
41	津寺遺跡	岡山市	竪穴住居	22.0	24.0	2.0	12.7	有孔ＩＡ	－	C26	21
42			包含層	22.0	23.0	2.0	38.3	有孔ＩＡ	－	C29	
43	津寺三本木遺跡	岡山市	竪穴住居	23.0	24.0	2.0	－	有孔ＩＡ	－	C1	22
44	高塚遺跡	岡山市	土壙	16.0	19.5	3.0	5.8	有孔ⅡＡ	－	C82	23
45			包含層	22.0	36.0	4.5	－	有孔ⅡＡ	－	C87	
46			包含層	25.0	30.0	4.0	－	有孔ⅡＡ	－	C88	
47			竪穴住居	26.0	31.0	4.0	－	有孔ⅡＡ	－	C129	
48			竪穴住居	19.0	24.0	2.0	－	有孔ⅡＢ	線刻	C133	
49	足守川加茂B遺跡	岡山市	竪穴住居	26.0	28.0	2.0	－	有孔ＩＡ	－	C4	20
50			竪穴住居	30.0	32.0	2.0	－	有孔ＩＡ	－	C5	
51			竪穴住居	25.0	26.0	4.0	－	有孔ＩＡ	－	C6	
52			竪穴住居	14.0	17.0	4.0	－	有孔ⅡＡ	－	C18	
53	足守川矢部南向遺跡	倉敷市	竪穴住居	23.0	23.0	4.0	－	有孔ＩＢ	－	C9	
54			土壙	17.9	17.2	－	5.4	無孔ＩＡ	－	C33	
55	矢部堀越遺跡	倉敷市	土壙	19.0	18.0	2.0	－	有孔ＩＡ	－	C1	24
56	上東遺跡	倉敷市	竪穴住居	29.0	30.0	3.0	－	有孔ＩＡ	－	8	25
57			包含層	23.0	24.0	2.0	－	有孔ＩＡ	－	C23	26
58			河道	24.0	29.0	－	－	無孔ⅡＢ	刺突	C30	
59	南溝手遺跡	総社市	竪穴住居	21.2	27.2	3.0	15.1	有孔ⅡＡ	－	C134	27
60	窪木遺跡	総社市	竪穴住居	22.5	25.5	4.5	－	有孔ＩＡ	－	C1	28
61	井手見延遺跡	総社市	包含層	22.0	23.0	4.0	9.8	有孔ＩＡ	－	C3	29
62	高越遺跡	井原市	土壙	29.0	27.0	6.0	－	有孔ＩＡ	－	C16	30
63	森山遺跡	浅口市鴨方町	包含層	36.0	35.0	7.0	33.5	有孔ＩＡ	－	C5	31
64	竹林寺天文台遺跡	浅口市鴨方町 小田郡矢掛町	包含層	27.5	33.0	6.0	24.0	有孔ⅡＢ	刺突	C3	32

今回は県内出土のものを中心に扱ってきたが、出土事例が少なく、土玉の機能や用途について検討することはできなかった。この点に関しては、周辺地域における出土事例や共伴遺物など広い視点から比較検討していくことが今後必要となってくるだろう。（三浦）

註

（１）和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』小林行雄先生古希記念論文集　小林行雄先生古希記念論文集刊行委員会編　平凡社　1982

（２）乗松真也「漁業用の錘からみた地域間交流」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会　2006

（３）北浦弘人ほか『青谷上寺地遺跡３』鳥取県教育文化財団調査報告書72　財団法人鳥取県教育文化財団　2001

文献

1　岡山県教育委員会「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20　1977
2　岡山県教育委員会「旦山遺跡・惣台遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　1999
3　岡山県教育委員会「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』３　1974
4　岡山県教育委員会「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　1976
5　岡山県教育委員会「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』28　1978
6　岡山県教育委員会「小中遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117　1997
7　山陽町教育委員会「用木遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』4　1978
8　邑久町教育委員会「熊山田遺跡」『邑久町埋蔵文化財発掘調査報告』１　2004
9　御津町教育委員会「原遺跡」『御津町埋蔵文化財報告』３　1988
10　岡山県教育委員会「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』１　1972
11　岡山県教育委員会「百間川兼基遺跡１ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982
12　岡山県教育委員会「百間川兼基遺跡４ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』208　2007
13　岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1984
14　岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　1994
15　岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97　1995
16　岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡６」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179　2004
17　岡山県教育委員会「津島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173　2003
18　岡山県教育委員会「津島遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181　2004
19　岡山県教育委員会「加茂政所遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999
20　岡山県教育委員会「足守川加茂Ａ遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995
21　岡山県教育委員会「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　1995
22　岡山県教育委員会「津寺三本松遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』142　1999
23　岡山県教育委員会「高塚遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150　1999
24　岡山県教育委員会「矢部堀越遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993
25　岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　1974
26　岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158　2001
27　岡山県教育委員会「南溝手遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107　1996
28　岡山県教育委員会「窪木遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120　1997
29　岡山県教育委員会「井手見延遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156　2000
30　井原市教育委員会「高越遺跡」『井原市埋蔵文化財発掘調査報告』２　2004
31　浅口市教育委員会「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』１　2008
32　本書

竹林寺天文台遺跡周辺の地形・地質

定　金　司　郎

1　位置・地形

岡山県の南西部に位置する浅口市は、県南部を東西に拡がる瀬戸内沿岸山地・丘陵地と瀬戸内沿岸平野の地形域に属する。市の南縁は瀬戸内海に面し、北縁は阿部山・遙照山系の稜線上で矢掛町と境を面している。

市内の中南部は大部分が花崗岩であるため浸食が進み、標高50m前後の丘陵地と100～200mの山地となっているが、北部の阿部山・遙照山系の稜部は流紋岩類で覆われているために浸食が遅れ、300～400mの高度を保っている。また、平野部のほとんどが縄文海進時に進入した海底に堆積した沖積層で、10～30mの標高で丘陵地や山地の凹部を埋めて拡がっている。

阿部山・遙照山系は西の笠岡市吉田付近の谷部に端を発し、笠岡ゴルフ場（365m）を経て浅口市に入り、阿部山（397m）、天文台（366m）、遙照山（405m）と続き、更に東へ高度をやや下げながら玉島北部の弥高山（307m）へと続き、船穂町柳井原で高梁川に没する。山系の北斜面はやや急峻で小田川に至り、南側はややゆるやかな傾斜で、玉島から笠岡の平野部に裾野を拡げている。東西約25㎞、南北幅5～7㎞に及ぶ山地である。山系の稜線部は、吉備高原の連続面ではないかと思われる程平坦で、ゆるやかな起伏の頂部が連なっている。また、稜線部分の窪地には湿地帯やため池が多数点在している（近年は湿地帯は減少している）。

山系中間部の竹林寺山（366m）には国立天文台岡山天体物理観測所が設置されている。天文台の東側の頂部（355m）が今回の竹林寺天文台遺跡の発掘現場である。

2　地質

前記山系の山麓部あるいは中腹部から頂部にかけては、白亜紀中～後期に活動したと考えられる流紋岩類が覆い（阿部山付近の流紋岩の放射性年代測定で69Maの値が得られている：岡山大・鈴木）、その下位には白亜紀末～新生代初期にかけて迸入したと考えられる花崗岩が山系の裾野から平野部の丘陵地や山地にかけて広く分布している。則ち、流紋岩類が屋根のような形で花崗岩の上に乗っかるルーフペンダント構造（屋根状構造）となっている。両者の接触部付近では流紋岩類が花崗岩の熱作用を受けて接触変成岩となっている。丘陵地や山地を埋める平野部は海底に堆積した沖積層である。瀬戸内海に浮かんでいた三郎島は近年の干拓で陸続きとなった。

竹林寺天文台遺跡付近の流紋岩類は、下位より流紋岩質凝灰岩、泥質岩（砂質岩）、流紋岩質火山礫凝灰岩（一部には火砕流石質凝灰岩）の順に累積し、最上位を流紋岩質溶岩が覆っている。

下位の凝灰岩・泥質岩（砂質岩）は帯状に広く分布しており、杉谷池の上付近から地蔵峠下、遙照山下から富付近に連続し、北斜面の山田付近に顔を覗かせている。走向は東西～南北系で10～25°中心に傾斜するベースン構造（盆状構造）となっている。また、これらは湖沼成の堆積物で層理が発達し、杉谷池上の泥質岩からは多数の植物化石を産出する。

火山礫凝灰岩は溶岩の下位に分布している。径1～数cmの火山礫を凝灰岩が埋めており、湖沼成の

ものと火砕流による石質凝灰岩のものとが認められる。

溶岩は竹林寺山や遙照山などの山系の頂部に分布している。天文台や遺跡付近のものには長石・石英・黒雲母の斑晶が観察され緻密で硬い。またこの付近の溶岩にはタマネギ状構造が見られ、遙照山の溶岩では流理構造が認められる。

流紋岩類の累積構造や岩質、産出する化石等から、当地域の火山は活動の静止期に大きなカルデラ湖ができ、湖の周辺には豊かな森が出現、湖には周りから土砂が流入したり、活動を再開した火山から火山灰や火山礫が降り注いでいたのではないかと想像される。

花崗岩は流紋岩の火山活動の後に流紋岩類の下位に迸入したもので、山系稜線部には流紋岩類が残されているが、山系の北側と南側では流紋岩類が浸食されたために、花崗岩が地表に表れたものである。杉谷池左岸に流紋岩類と花崗岩との接触部が露出しており、花崗岩が40°の傾斜で流紋岩類の下から迸入している構造が観察される。また、接触部付近の流紋岩質凝灰岩は花崗岩マグマの熱作用を受けて変質しており、ロウセキ鉱床も胚胎されている。かつてはロウセキを採掘する鉱山があった。

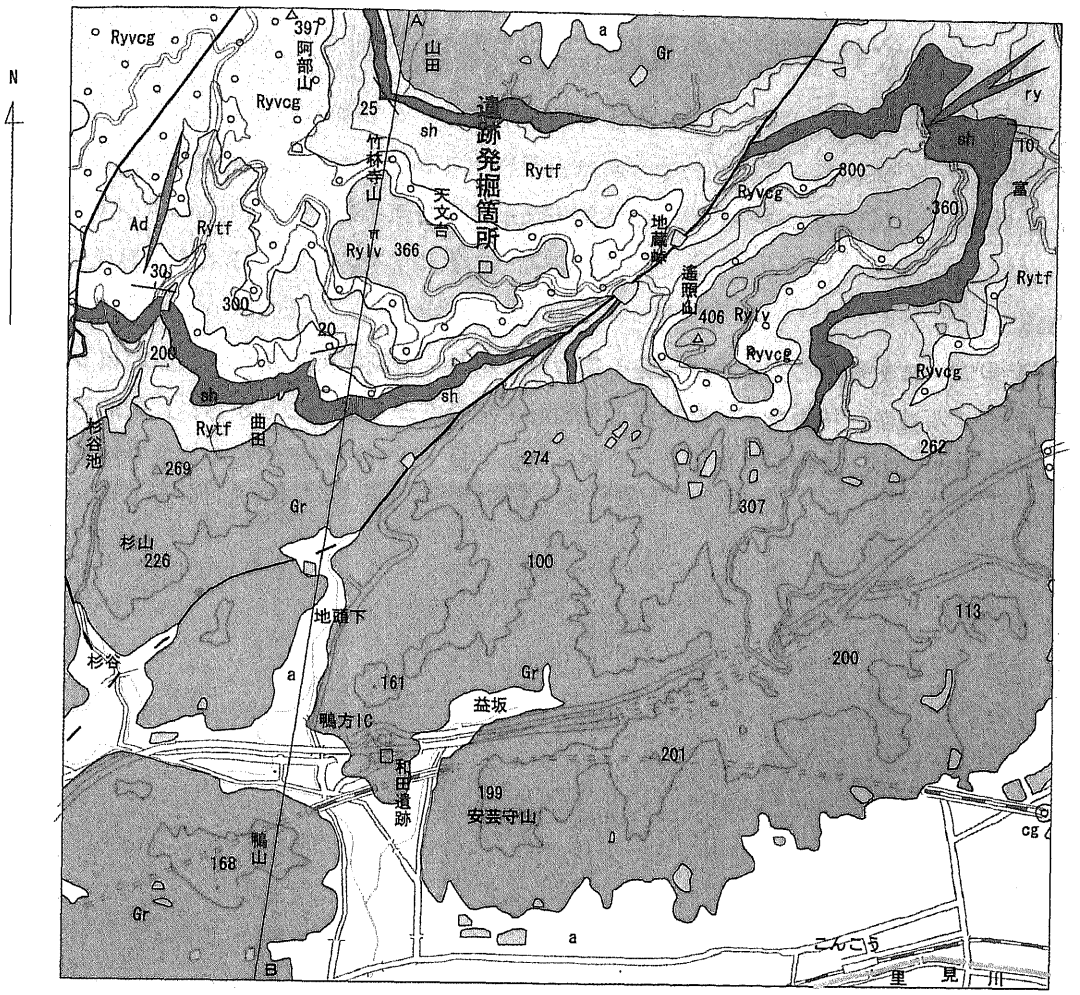
花崗岩迸入後の地殻変動時には断層ができたり、岩石の割れ目などに岩脈が貫入したりした。域内には２本の断層が認められる。地蔵峠を走る断層は北東～南西方向に伸びており、矢掛町横谷から地頭下を通り金山峠に至っている。以前には、地頭下から地蔵峠に上がる谷沿いの岩盤に、断層運動の摩擦で生じた鏡肌を観察することができた（現在はコンクリートで覆われている）。阿部山付近を南北に走る断層の破砕帯が杉谷池から日原方面につながる道路沿いに現れており、泥質岩の連続が断層で絶たれている。阿部山付近には安山岩質の岩脈が、富付近では流紋岩質の岩脈を観察することができる。

南部の平地部の山陽本線沿いの丘陵地には、洪積世の間氷期に吉備高原から瀬戸内沿岸地域にかけて氾濫した河川の堆積物（山砂利層）が分布しており、本地質図の右下にその一部が掲載されている。

最後のウルム氷期が終わると、玉島から笠岡にかけての低地に海が侵入し、南の竜王山～御嶽山山地を前衛島とした三日月形の入り海が出現していた。江戸時代に入り海の玉島側と笠岡側の入口を堰き止めたり、土手を築いて塞いだため陸地となった。入り海時代の海底の堆積物（泥や砂）が沖積層であり、現市内の平野部となっている。また六条院小学校校庭（標高10m）のボーリング調査では地下10mで基盤の花崗岩に達している。これらのことから縄文海進時の海面は現在の標高30m前後までに達し、沖積層の層厚は40m位であると考えられる。

3　地形・地質からみた古代人の生活領域

縄文海進時の海面は当該地域では、益坂・地頭下・杉谷の谷部まで達していた。現在の鳴方ＩＣ付近は海に面した小高い丘となっていたが、その他の沿岸部は比較的急峻で生活の場としては適していなかった。益坂や地頭下から300m程登った阿部山・遙照山の頂部は見通しもよく、ゆるやかな起伏をしており、また流紋岩類で覆われているために保水性に富み湿原が点在していたために水の確保もできる。生活環境としては海岸部よりは山上の方が有利であったであろう。

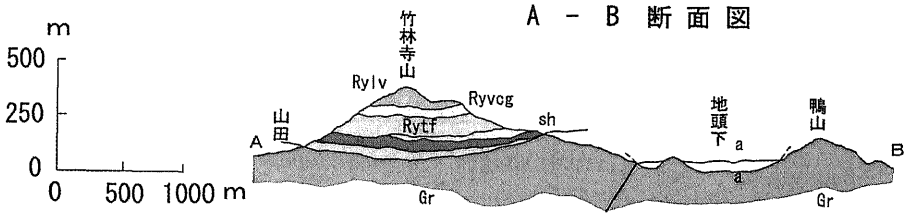


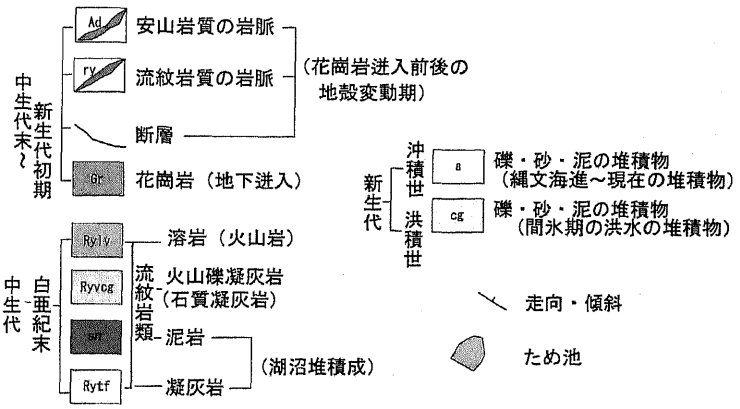
天文台遺跡周辺地質概図

(2009・1　調査作図；定金)

0　500　1000m

A－B断面図





第１図　竹林寺天文台遺跡周辺地質概図

竹林寺天文台遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、弥生時代の竪穴住居２より出土した炭化材１点である。

3．方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表１　竹林寺天文台遺跡における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）
竪穴住居２	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　コナラ属アカガシ亜属

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版１

横 断 面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

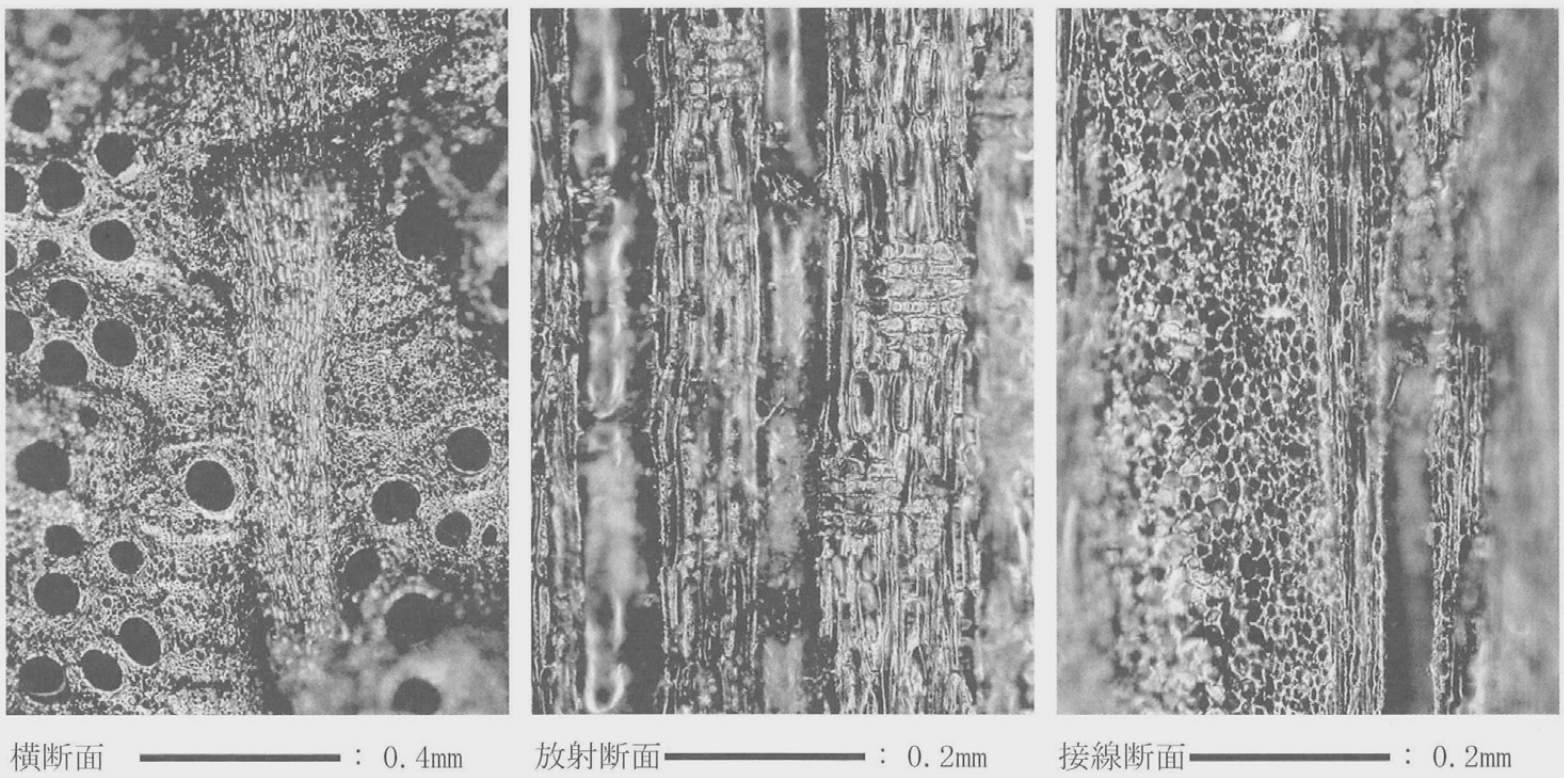
放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。とくに農耕具に用いられる。

5．所見

竹林寺天文台遺跡出土の炭化材は、コナラ属アカガシ亜属１点であった。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。硬堅な材であり、広く用いられる。竹林寺天文台遺跡の炭化材は、当時遺跡の周辺地域に生育し、容易にもたらされたと推定される。



図版１　竪穴住居２　コナラ属アカガシ亜属

Ⅱ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

２．試料と方法

測定試料は、弥生時代の竪穴住居２より出土した炭化材１点である。測定は、試料を調製後、加速器質量分析計を用いて行った。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.，の協力を得た。測定試料と方法を表２にまとめた。

表２　測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	竪穴住居２	炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．結果

年代測定結果を表３に示す。

表３　測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C年代[1)] (年BP)	$\delta^{13}C$[2)] (‰)	補正^{14}C年代[3)] (年BP)		暦年代（西暦）[4)]
No.1	249677	1880±40	-25.4	1870±40	交点：cal	AD 130
					1σ：cal	AD 80～210
					2σ：cal	AD 60～240

１）^{14}C年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

２）$\delta^{13}C$（デルタ）測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えて算出した年

代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68％確率）と2σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4．所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代較正を行った結果、試料№1では1870±40年BP（同じくAD 60～240年）の年代値が得られた。

参考文献

・佐伯浩、原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100．

・島地謙、伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

・山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242

・Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

・尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14-15．

・中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36．

遺構一覧表・遺物観察表

凡例

1　遺構一覧表

・「平面形」は検出面での形状を示した。「(　)」は、推定される形状を示した。

・「断面形」は壁面の形状を示した。

・「規模」の「－」は計測不能を示した。

・「時期」の「(　)」は推定される時期を示した。

2　遺物観察表

土器

・「色調（外面）」は『新版標準土色帖（2002年度）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修）を使用した。

・「状態」は、主要計測部位である口縁部を「口」、胴部を「胴」、底部を「底」、脚部を「脚」などと表し、残存状況を分数あるいは小破片は「片」と示した。また、復元も含めて全体の残存状況が高いものは、「完形」「ほぼ完形」と表した。

土製品

・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。「色調（外面）」の識別基準は土器観察表に準じる。「時期」の「(　)」は推定される時期を示した。

石器・石製品

・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。「時期」の「(　)」は推定される時期を示した。

金属器

・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。

遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	床面積(㎡)	柱穴本数	平面形	中央穴(cm) 長×短	深さ	壁体溝	時期
竪穴住居1a	円	660	(650)	(34.19)	8	台形	62×54	31	○	弥・後
竪穴住居1b	円	540	(485)	(22.89)	6	不整円	75×73	37	○	弥・後
竪穴住居2a	円	486	(480)	(18.51)	6	不整楕円	119×82	28	○	弥・後
竪穴住居2b	円	800	(700)	(50.24)	8	不整楕円	119×82	28	○	弥・後
竪穴住居2c	円	800	(700)	(50.24)	8	不整楕円	119×82	28	○	弥・後

掘立柱建物

遺構名	規模	柱間距離(cm) 桁	柱間距離(cm) 梁	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(㎡)	棟方向	柱穴 平面形	柱穴 深さ(cm)	時期
掘立柱建物1	1×1	283・285	252・269	283～285	252～269	7.29	N-1°-W	円～楕円	29～45	弥・後
掘立柱建物2	2×1以上	164・181	230	345	230	(7.94)	N-82°-W	円～楕円	8～16	弥・後

土壙墓

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙墓1	隅丸方形	段	231	(103)	(19)	古墳以降	

土壙

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙1	不整楕円	椀＋段	(102)	(70)	(15)	弥・後	
土壙2	不整楕円	逆台形	(103)	(93)	(12)	弥・後	
土壙3	楕円	段	135	94	19	弥・後	
土壙4	不整	椀	(200)	(105)	9	弥・後	
土壙5	楕円	椀＋段	(302)	(110)	74	弥・後	
土壙6	不整楕円	段	100	82	18	弥・後	
土壙7	不整楕円	段	144	50	23	弥・後	
土壙8	楕円	椀	238	103	21	弥・後	
土壙9	不整	椀＋段	249	91	12	弥・後	
土壙10	円	椀＋段	(70)	(70)	24	弥・後	
土壙11	楕円	逆台形＋段	120	80	21	弥・後	
土壙12	不整楕円	椀＋段	86	74	32	弥・後	
土壙13	不整楕円	逆台形＋段	125	90	10	弥・後	
土壙14	楕円	椀	81	44	10	弥・後	
土壙15	不整円	逆台形	53	(48)	8	弥・後	
土壙16	不整円	椀＋段	(105)	(62)	10	弥・後	
土壙17	不整楕円	段	182	65	10	弥・後	
土壙18	不整楕円	椀＋段	188	81	32	弥・後	
土壙19	楕円	椀＋段	178	114	16	弥・後	
土壙20	不整楕円	椀＋段	175	66	16	弥・後	
土壙21	不整楕円	逆台形＋段	(256)	130	28	弥・後	
土壙22	不整楕円	段	245	114	4	古墳以降	
土壙23	不整	椀	(207)	200	9	古墳以降	
土壙24	円	逆台形	145	143	21	古墳以降	
土壙25	不整円	椀	144	127	9	古墳以降	
土壙26	長楕円	逆台形	197	48	5	古墳以降	
土壙27	楕円	段？	116	70	9	古墳以降	
土壙28	楕円	椀	119	90	10	古墳以降	
土壙29	不整楕円	逆台形	110	51	6	古墳以降	
土壙30	楕円	段	(280)	185	6	古墳以降	
土壙31	長楕円	段	264	59	10	古墳以降	
土壙32	楕円	椀＋段	193	112	19	古墳以降	
土壙33	長楕円	段	170	39	5	古墳以降	

溝

遺構名	断面形	上端幅（cm）	底面幅（cm）	深さ（cm）	時期	備考
溝 1	逆台形	69	65	7	弥・後	
溝 2	逆台形	35	30	7	弥・後	
溝 3	椀＋段	68	23	15	弥・後	
溝 4	椀	64	46	3	古墳以降	
溝 5	椀	40	32	7	古墳以降	
溝 6	椀	54	35	7	古墳以降	
溝 7	逆台形	71	47	8	古墳以降	

柱穴

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	時期	備考
柱穴 1	円	椀	55	42	28	弥・後	
柱穴 2	不整円	椀＋段	61	48	45	弥・後	
柱穴 3	楕円	椀＋段	78	46	25	弥・後	
柱穴 4	円	方	40	40	56	弥・後	

新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査年度	調査時No.
竪穴住居 1	H20	33
竪穴住居 2	H20	36
掘立柱建物 1	H20	35
掘立柱建物 2	H20	28
土壙墓 1	H20	8
土壙 1	H20	44
土壙 2	H20	46
土壙 3	H20	42
土壙 4	H20	38
土壙 5	H20	34
土壙 6	H20	45
土壙 7	H20	32
土壙 8	H20	29
土壙 9	H20	21
土壙10	H20	41
土壙11	H20	20
土壙12	H20	19
土壙13	H20	22
土壙14	H20	30
土壙15	H20	31
土壙16	H20	27
土壙17	H20	26
土壙18	H20	40
土壙19	H20	23
土壙20	H20	37

報告書遺構名	調査年度	調査時No.
土壙21	H20	39
土壙22	H20	7
土壙23	H20	17
土壙24	H20	11
土壙25	H20	14
土壙26	H20	6
土壙27	H20	9
土壙28	H20	15
土壙29	H20	18
土壙30	H20	5
土壙31	H20	3
土壙32	H20	1
土壙33	H20	2
溝 1	H20	47
溝 2	H20	43
溝 3	H20	25
溝 4	H20	10
溝 5	H20	13
溝 6	H20	4
溝 7	H20	12
柱穴 1	H20	YP19
柱穴 2	H20	YP23
柱穴 3	H20	24
柱穴 4	H20	YP5

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	計測値（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
1	竪穴住居1	弥生土器	壺	明赤褐	口～頸1/6	14.5		5.0	
2	竪穴住居1	弥生土器	壺	赤	口1/6	14.8		4.3	内外面に赤色顔料
3	竪穴住居1	弥生土器	壺	にぶい黄褐	底～胴1/2以下		6.2	9.8	外面に赤色顔料
4	竪穴住居1	弥生土器	甕	褐	口～肩1/8			5.5	
5	竪穴住居1	弥生土器	甕	明黄褐	口～胴1/4	13.4		9.2	
6	竪穴住居1	弥生土器	甕	明褐	口1/7以下	9.0		2.7	
7	竪穴住居1	弥生土器	甕	黄褐	口1/5以下	14.2		1.9	
8	竪穴住居1	弥生土器	甕	橙	口1/8以下	16.0		3.0	
9	竪穴住居1	弥生土器	甕	明赤褐	口1/5	15.0		3.1	内外面とも赤色顔料
10	竪穴住居1	弥生土器	甕	褐	口～肩1/10以下			2.4	
11	竪穴住居1	弥生土器	甕	褐	口～肩1/12	13.5		3.1	
12	竪穴住居1	弥生土器	甕	にぶい赤褐	口～肩1/7以下	14.4		3.6	
13	竪穴住居1	弥生土器	甕	明黄褐	底～胴1/4以下		9.8	6.0	外面に黒斑
14	竪穴住居1	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底1/5		8.2	4.8	
15	竪穴住居1	弥生土器	甕	明黄褐	底1/4以下		7.6	4.0	外面に黒斑
16	竪穴住居1	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底1/8		13.8	3.0	
17	竪穴住居1	弥生土器	甕	褐灰	底1/5		8.6	2.2	
18	竪穴住居1	弥生土器	甕	にぶい黄橙	底1/6		7.2	2.5	
19	竪穴住居1	弥生土器	甕	黄灰	底1/6		6.6	3.2	
20	竪穴住居1	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	口1/15以下	20.2		2.1	内外面とも赤色顔料
21	竪穴住居1	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	杯1/5以下			3.8	
22	竪穴住居1	弥生土器	高杯	にぶい黄橙	杯1/6			2.4	
23	竪穴住居1	弥生土器	高杯	赤褐	杯3/4	18.8		6.5	
24	竪穴住居1	弥生土器	高杯	明褐	脚1/4		11.8	2.4	外面に赤色顔料
25	竪穴住居1	弥生土器	高杯	明褐色	脚1/4		12.2	1.9	外面に赤色顔料
26	竪穴住居1	弥生土器	高杯	明褐	脚柱ほぼ完存			5.1	内外面とも赤色顔料
27	竪穴住居1	弥生土器	器台	にぶい黄橙	底1/12	29.0		2.0	
28	竪穴住居1	弥生土器	鉢	明褐	口～胴1/12以下	30.0		5.5	外面に黒斑
29	竪穴住居1	弥生土器	鉢	橙	口～底1/3	37.8	8.6	17.7	
30	竪穴住居1	弥生土器	製塩土器	にぶい黄	脚ほぼ完存		4.4	2.1	
31	竪穴住居2	弥生土器	壺	明黄褐	口1/11以下	21.0		2.4	
32	竪穴住居2	弥生土器	壺	明赤褐	頸～肩1/3			9.0	外面に赤色顔料
33	竪穴住居2	弥生土器	壺	にぶい黄	底1/3		9.4	6.2	
34	竪穴住居2	弥生土器	壺	にぶい黄褐	底1/4以下		8.8	3.5	
35	竪穴住居2	弥生土器	甕	灰黄褐	口1/12	17.8		2.0	外面に赤色顔料
36	竪穴住居2	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口1/10	16.0		2.0	
37	竪穴住居2	弥生土器	甕	褐	口1/10	18.2		2.8	
38	竪穴住居2	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～肩1/10	18.7		2.6	
39	竪穴住居2	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	口1/8	11.9		2.6	外面に煤付着
40	竪穴住居2	弥生土器	甕	黄褐色	口1/5以下	14.0		2.3	
41	竪穴住居2	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口1/8	13.8		1.9	
42	竪穴住居2	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～肩1/8	15.0		2.5	
43	竪穴住居2	弥生土器	甕	明赤褐	口1/8	12.8		1.5	
44	竪穴住居2	弥生土器	甕	明褐色	口1/6	12.4		2.4	
45	竪穴住居2	弥生土器	甕	にぶい橙	口1/8	15.0		2.7	外面に黒斑
46	竪穴住居2	弥生土器	甕	橙	口1/8	16.5		2.7	

掲載番号	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	計測値（cm） 口径	底径	器高	特徴・備考
47	竪穴住居２	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口1/8	15.8		3.2	
48	竪穴住居２	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口1/10以下	(17.2)		2.2	
49	竪穴住居２	弥生土器	甕	黄褐	肩1/5			3.3	
50	竪穴住居２	弥生土器	甕	にぶい黄橙	胴1/5			5.4	
51	竪穴住居２	弥生土器	甕	にぶい褐	底3/4		9.0	4.7	外面に黒斑
52	竪穴住居２	弥生土器	甕	黒	底1/3		9.2	3.7	外面に煤
53	竪穴住居２	弥生土器	甕	にぶい赤褐	底1/2		4.8	2.5	外面に黒斑
54	竪穴住居２	弥生土器	甕	明赤褐	底1/4		6.0	2.7	外面に黒斑
55	竪穴住居２	弥生土器	甕	橙	底3/4		4.1	2.6	
56	竪穴住居２	弥生土器	高杯	橙	口～杯1/16	21.7		2.2	
57	竪穴住居２	弥生土器	高杯	赤褐	口～杯1/16	20.0		2.4	内外面とも赤色顔料
58	竪穴住居２	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	口～杯1/12	20.6		2.5	内面に赤色顔料
59	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/16以下	13.6		3.0	内外面とも赤色顔料
60	竪穴住居２	弥生土器	高杯	灰黄褐	口1/10	15.0		1.5	
61	竪穴住居２	弥生土器	高杯	褐	口～杯1/14	20.2		2.7	内外面とも赤色顔料
62	竪穴住居２	弥生土器	高杯	赤	口～杯1/12以下	22.6		2.5	内外面とも赤色顔料
63	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/ 4以下	17.2		3.8	内外面とも赤色顔料
64	竪穴住居２	弥生土器	高杯	赤	口～杯1/11以下	19.6		3.5	内面に赤色顔料
65	竪穴住居２	弥生土器	高杯	橙	口～杯1/8	15.8		3.6	内外面とも赤色顔料
66	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/12	19.2		2.0	内外面とも赤色顔料
67	竪穴住居１	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/16	15.8		3.1	内外面とも赤色顔料
68	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/8	17.6		3.3	外面に赤色顔料
69	竪穴住居２	弥生土器	高杯	赤	脚1/7		14.2	2.7	外面に赤色顔料
70	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/10		13.5	2.4	外面に赤色顔料
71	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/4		14.8	3.9	外面に赤色顔料
72	竪穴住居２	弥生土器	高杯	暗褐	脚1/8		11.4	2.0	外面に赤色顔料
73	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/12		12.3	3.7	外面に赤色顔料
74	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/8		17.6	2.3	外面に赤色顔料
75	竪穴住居２	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/6		14.2	2.3	外面に赤色顔料
76	竪穴住居２	弥生土器	鉢	明黄褐	口～胴1/15以下	24.2		4.4	外面に赤色顔料・外面に煤付着
77	竪穴住居２	弥生土器	鉢	明黄褐	口～胴1/8以下	26.4		5.8	内外面とも赤色顔料
78	竪穴住居２	弥生土器	鉢	橙	口～胴1/10	25.8		6.1	
79	竪穴住居２	弥生土器	鉢	明黄褐	胴1/7	31.6		8.8	
80	竪穴住居２	弥生土器	鉢	黒	口～胴1/8	34.0		8.5	
81	竪穴住居２	弥生土器	有孔鉢	暗灰黄	胴～底1/4			3.9	
82	竪穴住居２	弥生土器	台付直口壺	明黄褐	胴下方～脚柱1/3			7.7	
83	竪穴住居２	弥生土器	台付壺	明赤褐	胴ほぼ完存			8.5	
84	竪穴住居２	弥生土器	ミニチュア土器	にぶい黄橙	底完存		1.5	2.1	外面に黒斑
85	竪穴住居２	弥生土器	ミニチュア土器	灰	底ほぼ完存		1.8	2.5	
86	掘立柱建物１	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	脚1/8		11.4	2.5	外面に黒斑、内面に赤色顔料
87	土壙５	弥生土器	甕	明赤褐	口1/6	17.6		1.7	外面に赤色顔料
88	土壙８	弥生土器	壺	橙	口1/12以下	25.0		3.0	
89	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	灰	口1/8以下	21.0		2.5	内面に赤色顔料
90	遺構に伴わない遺物	弥生土器	細頸壺	明赤褐	胴1/4以下			5.3	内外面に赤色顔料
91	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	暗灰黄	口1/7	15.8		3.0	
92	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい橙	口1/6以下	13.2		3.4	

掲載番号	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	計測値（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
93	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	橙	口1/7	12.8		2.1	
94	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	暗灰黄	底1/6		5.4	3.3	
95	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	黄灰	底4/5		6.5	2.6	
96	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい褐	口1/14	20.4		2.6	外面に赤色顔料
97	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	橙	口～杯1/8以下	21.8		2.4	
98	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	口1/8	18.4		2.1	内外面に赤色顔料
99	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	杯～脚柱1/5			4.7	
100	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	橙	脚1/8以下	13.8		3.3	外面に赤色顔料
101	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	脚1/5		14.4	2.7	外面に赤色顔料
102	遺構に伴わない遺物	弥生土器	器台	にぶい黄褐	胴1/4			8.2	外面に赤色顔料
103	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	にぶい赤褐	脚1/8以下		6.4	2.3	
104	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	橙	口－	15.4		1.8	
105	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	橙	口～頸1/7	14.6		4.0	内外面に赤色顔料
106	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	にぶい黄褐	口1/7	15.6		1.4	内面に赤色顔料
107	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	口1/6	16.0		2.3	
108	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	にぶい橙	口～肩完存	19.0		8.6	外面に赤色顔料
109	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	にぶい黄橙	底1/5以下		11.4	5.0	
110	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明赤褐	口1/8	18.6		3.4	内外面に赤色顔料
111	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	褐灰	口1/8	16.2		3.7	内外面に赤色顔料
112	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	灰黄褐	口1/7	14.6		1.6	内外面に赤色顔料
113	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～肩1/4	21.8		5.8	外面に赤色顔料
114	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～胴1/4	16.2		5.2	
115	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～肩1/8	14.4		2.9	
116	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	橙	口1/8	15.4		2.2	内外面に赤色顔料
117	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～肩1/6	14.0		3.0	
118	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口1/6	16.6		1.8	
119	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	黄褐	口1/6	13.0		3.0	
120	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明赤褐	口1/5	16.0		3.3	外面に赤色顔料
121	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明赤褐	口1/8	13.6		3.8	外面に赤色顔料
122	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明褐	口～胴1/4	17.0		4.3	
123	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口～肩1/4	15.0		4.5	
124	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄橙	口1/4	17.6		2.7	
125	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	褐	口～肩1/6	16.8		3.1	
126	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	橙	口1/5	12.6		3.4	
127	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	オリーブ褐	口～肩1/4以下	12.4		4.5	
128	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい褐	口1/10	14.4		1.9	
129	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明褐	肩～胴1/5			8.4	外面に赤色顔料・黒斑
130	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄	底1/4		11.6	5.2	外面に黒斑
131	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	褐灰	底1/4		7.0	3.0	外面に赤色顔料・黒斑
132	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	暗灰黄	底ほぼ完存		5.5	2.1	外面に黒斑
133	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	オリーブ黒	底1/4	8.6		4.0	外面に黒斑
134	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明黄褐	底1/4		7.0	3.3	外面に黒斑
135	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄橙	底1/4		6.4	2.3	
136	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	暗灰黄	底1/5		4.6	3.0	
137	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底完存		5.2	2.4	
138	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底1/4		4.8	1.8	

掲載番号	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	計測値（cm） 口径	底径	器高	特徴・備考
139	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	橙	底1/3以下		4.6	2.1	外面に赤色顔料
140	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	灰黄褐・明赤褐	底1/4		5.6	1.9	
141	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	橙	底1/3		5.8	2.3	外面に黒斑
142	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい褐	底1/3		6.2	3.1	外面に黒斑
143	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄橙	底1/4		5.4	3.6	外面に黒斑
144	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	黄灰	底1/2		3.6	2.0	
145	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底完存		6.9	2.0	外面に黒斑
146	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	口～杯1/8	21.6		2.8	内面に赤色顔料
147	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	口～杯1/7	19.8		3.2	内外面に赤色顔料
148	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/7	22.2		3.8	内外面に赤色顔料
149	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/8以下	17.4		3.0	内外面に赤色顔料
150	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	口～杯1/8以下	22.5		2.4	内外面に赤色顔料
151	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明褐	口1/12	20.4		1.7	内面に赤色顔料
152	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	口～杯1/4	32.9		5.5	内外面に赤色顔料
153	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤褐	杯～脚柱－			3.5	内面に赤色顔料
154	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい褐	杯～脚柱1/4			3.2	内面赤色顔料
155	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	杯～脚柱1/4以下			3.1	内外面に赤色顔料
156	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	口～脚柱1/4			3.7	外面に赤色顔料
157	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	杯～脚柱3/4			2.9	内外面に赤色顔料
158	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい黄橙	脚柱1/4			6.0	外面に赤色顔料
159	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	脚柱ほぼ完存			7.8	外面に赤色顔料
160	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	脚柱～脚ほぼ完存		7.6	8.9	内外面に赤色顔料
161	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	底1/6以下		14.2	4.0	外面に赤色顔料、内面に黒斑
162	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	橙	脚1/8		17.0	3.2	外面に赤色顔料
163	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明赤褐	脚1/6		16.8	3.1	外面に赤色顔料
164	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	脚1/5		14.6	7.3	外面に赤色顔料
165	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	赤	脚1/6		18.4	2.9	外面に赤色顔料
166	遺構に伴わない遺物	弥生土器	鉢	明褐	口～肩1/4	18.8		3.4	内面に赤色顔料
167	遺構に伴わない遺物	弥生土器	鉢	赤・褐灰	口～胴1/7以下	29.6		5.1	
168	遺構に伴わない遺物	弥生土器	鉢	にぶい黄橙	口～胴1/12	28.0		4.5	内外面に赤色顔料
169	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	灰	口1/9	13.6		2.2	
170	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	灰	底1/4		7.4	1.2	底部ヘラ切り
171	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	灰黄	底5/6		8.0	1.9	底部ヘラ切り
172	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	灰	底1/2		9.0	1.6	底部ヘラ切り
173	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身もしくは椀	灰	口1/20	16.1		1.7	
174	遺構に伴わない遺物	須恵器	小皿	灰黄	口～底1/4	7.4	6.0	1.2	
175	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	椀	暗灰黄	口1/16		17.0	2.4	
176	遺構に伴わない遺物	亀山焼	甕	灰	－			6.3	

金属製品観察表

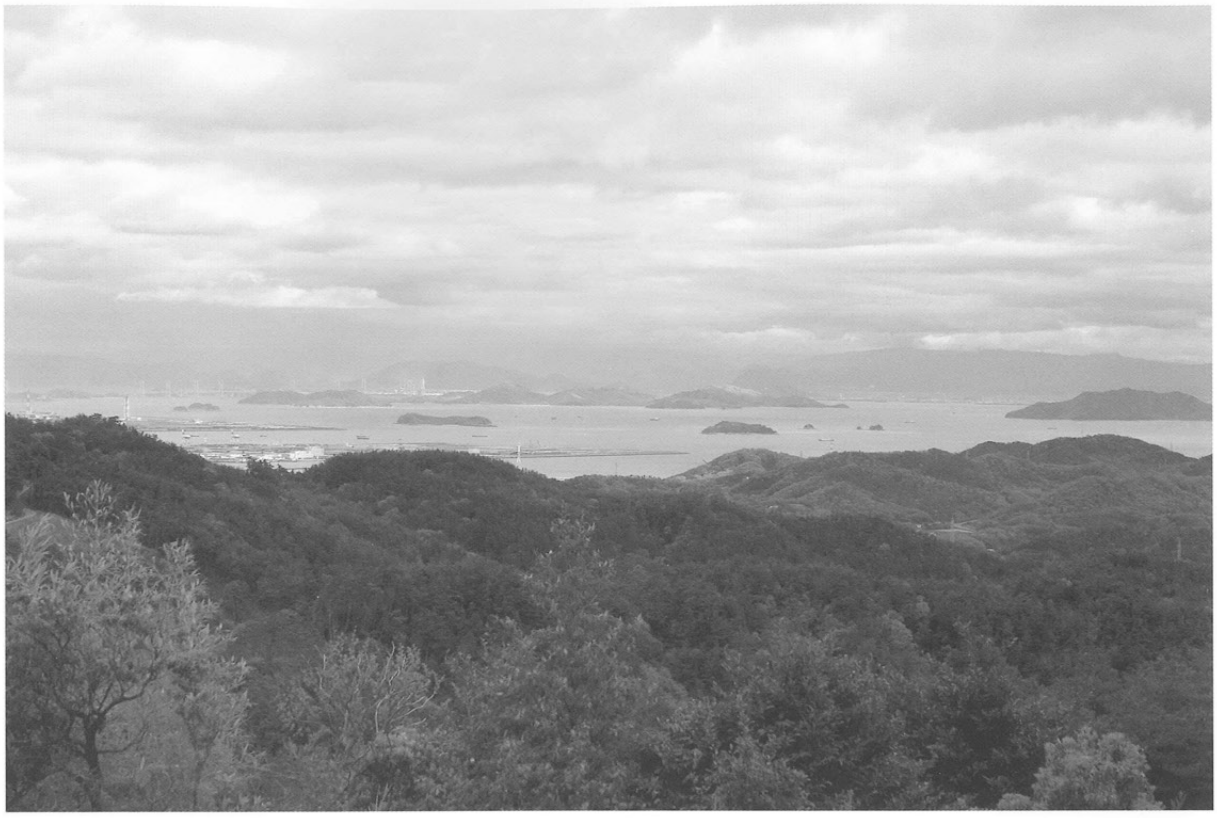
掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値（mm） 最大長	最大幅	最大厚	重量（g）	残存状況	備考
M1	竪穴住居2	鉈	鉄	26.0	18.0	6.0	2.05	刃部のみ	
M2	竪穴住居2	鉈	鉄	52.0	23.0	12.0	7.04	刃部のみ	

石器・石製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	竪穴住居1	石錐	55.0	14.0	6.0	3.00	サヌカイト	完形	
S2	竪穴住居1	石斧	127.0	51.0	31.0	239.00	流紋岩	ほぼ完形	
S3	竪穴住居1	砥石	90.0	43.5	26.0	144.50	流紋岩		
S4	竪穴住居1	投弾	49.0	47.0	39.0	96.00	流紋岩	完形	
S5	竪穴住居1	投弾	44.0	43.0	29.0	53.50	流紋岩	完形	
S6	竪穴住居1	投弾	49.0	43.5	34.0	64.50	流紋岩	完形	
S7	竪穴住居1	投弾	51.5	42.0	30.5	77.50	流紋岩	完形	
S8	竪穴住居1	投弾	50.0	39.0	28.0	49.00	流紋岩	完形	
S9	竪穴住居1	台石	224.0	212.0	106.0	6800.0	流紋岩	完形	
S10	竪穴住居1	台石	216.0	216.0	105.0	5600.0	流紋岩	完形	
S11	竪穴住居1	台石	366.0	312.0	152.0	19400.0	流紋岩	完形	
S12	竪穴住居2	石鏃	43.5	16.5	5.0	3.50	サヌカイト	完形	
S13	竪穴住居2	石鏃	38.0	16.0	5.0	2.50	サヌカイト	完形	
S14	竪穴住居2	石錐	40.5	14.0	5.5	3.50	サヌカイト	ほぼ完形	
S15	竪穴住居2	石斧	87.0	46.0	18.0	130.50	泥岩	ほぼ完形	
S16	竪穴住居2	石斧	139.0	38.5	70.0	477.00	流紋岩	1/2	
S17	竪穴住居2	砥石	49.0	21.5	28.0	25.00	流紋岩		
S18	竪穴住居2	砥石	81.0	68.5	43.0	444.00	泥岩		薄い凝灰石と互層
S19	竪穴住居2	敲石	143.0	68.0	44.0	545.00	砂岩		
S20	竪穴住居2	敲石	72.0	63.0	54.0	289.00	流紋岩		
S21	掘立柱建物1	砥石	59.0	29.5	22.0	42.00	流紋岩質凝灰岩		
S22	遺構に伴わない遺物	石鏃	36.0	19.0	4.0	3.00	サヌカイト	完形	
S23	遺構に伴わない遺物	石包丁	60.0	35.0	9.0	21.50	粘板岩	ほぼ完形	
S24	遺構に伴わない遺物	石斧	89.5	39.0	20.0	119.50	安山岩	完形	
S25	遺構に伴わない遺物	石製品	79.0	41.0	9.0	32.50	粘板岩(千枚岩)	完形	
S26	遺構に伴わない遺物	石錘	41.0	36.5	31.0	66.50	流紋岩	完形	山砂利層産の円礫
S27	遺構に伴わない遺物	石錘	56.5	43.0	19.0	62.00	流紋岩	1/2	山砂利層産の円礫
S28	遺構に伴わない遺物	敲石	104.0	81.5	44.0	556.00	花崗岩	完形	新鮮な円礫、河原石
S29	遺構に伴わない遺物	砥石	59.0	39.0	25.0	86.50	泥岩		
S30	遺構に伴わない遺物	砥石	71.0	31.0	29.0	95.00	砂岩		
S31	遺構に伴わない遺物	砥石	104.5	68.0	28.0	250.00	泥岩		

土製品観察表

掲載番号	遺構名	種類	計測値（mm）				重量（g）	色調	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
C1	竪穴住居1	土錘	53.0	45.0		11.0	87.00	にぶい黄褐色（10YR6/3）	3/4	
C2	竪穴住居2	勾玉	62.5	19.0		5.0	19.00	褐灰色（10YR4/1）	ほぼ完形	
C3	遺構に伴わない遺物	土玉	27.5	33.0		6.0	24.00	にぶい黄褐色（10YR5/4）	完形	刺突文



1　天文台から備讃瀬戸を望む

2　弥生時代の遺構全景（上が北）

図版２

１　竪穴住居１
（南から）

２　竪穴住居１a
中央穴
（南東から）

３　竪穴住居１
壁体溝断面
（東から）

１　竪穴住居１
壁体溝　工具痕
（南西から）

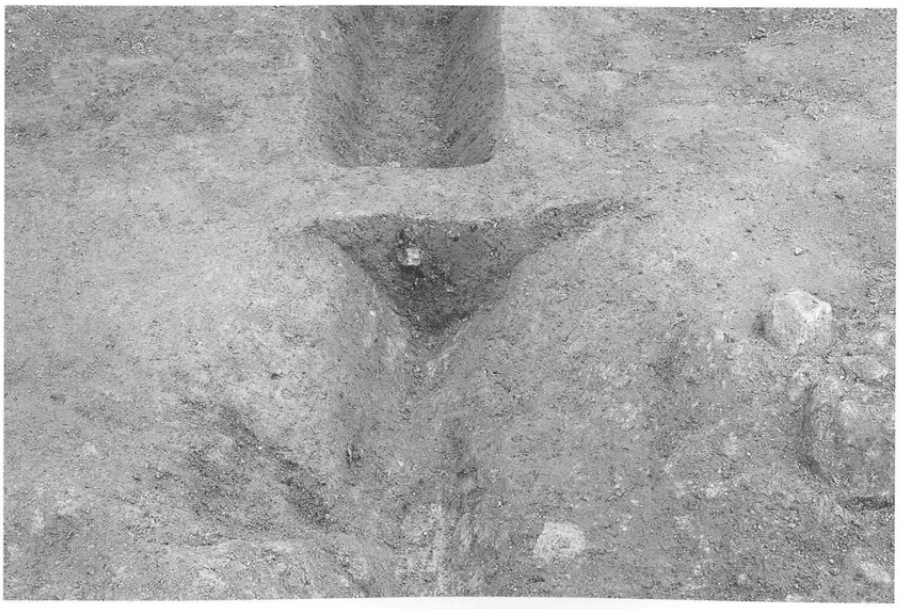
２　竪穴住居１
中央穴
切り合い状況
（北から）

３　竪穴住居１
柱穴
（南から）

図版４

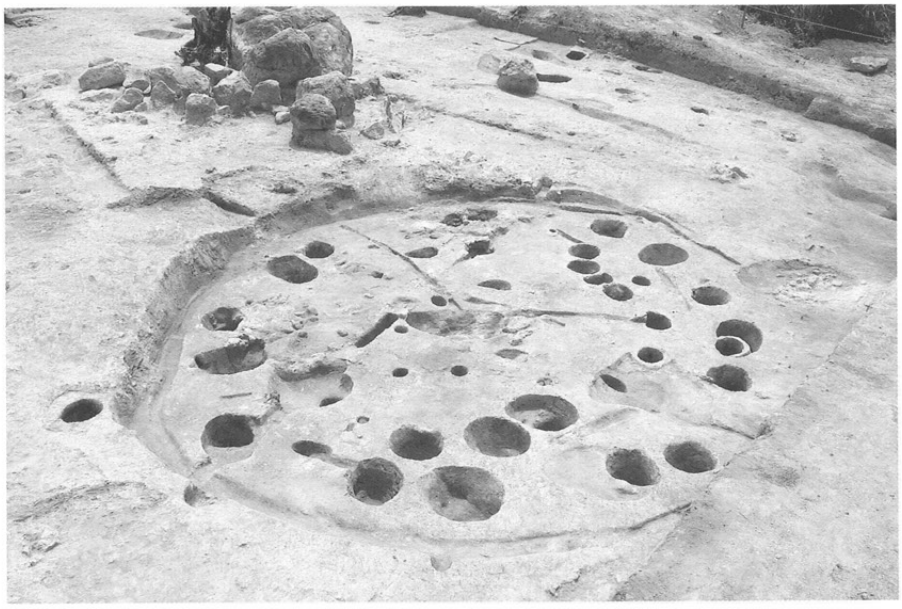
１　竪穴住居１ｂ
中央穴
遺物出土状況
（西から）

２　竪穴住居１ｂ
中央穴　完掘状況
（南から）



３　竪穴住居１ｂ
排水溝　断面
（南西から）

１　竪穴住居１ｂ
土器出土状況
（西から）



２　竪穴住居２
（北西から）

３　竪穴住居２
土層断面
（南西から）

図版６

１　竪穴住居２
土層断面
（西から）

２　竪穴住居２b･c
壁体溝　断面１
（西から）

３　竪穴住居２b･c
壁体溝　断面２
（西から）

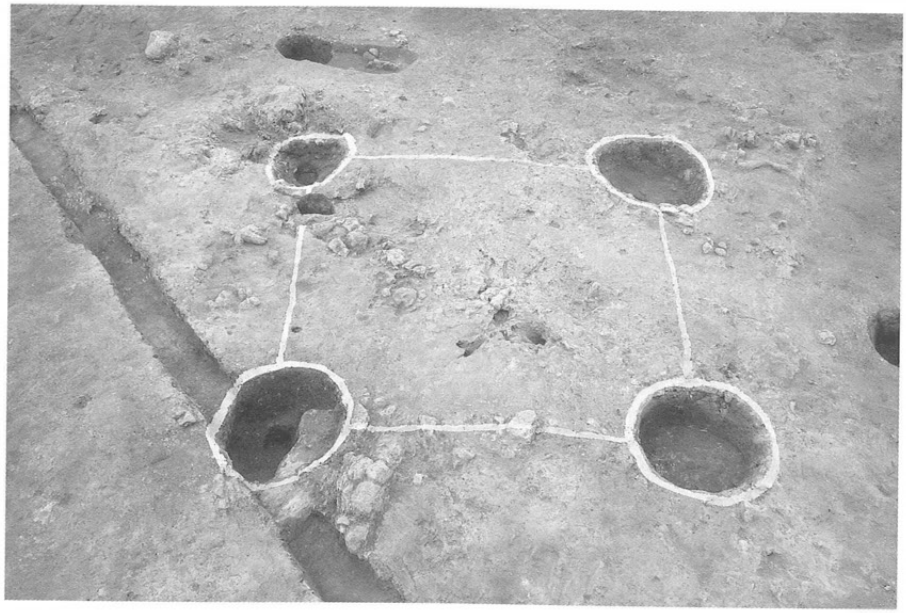
1　竪穴住居２
中央穴　断面
（南から）

2　竪穴住居２
中央穴
（南から）

3　竪穴住居２
P12　断面
（南東から）

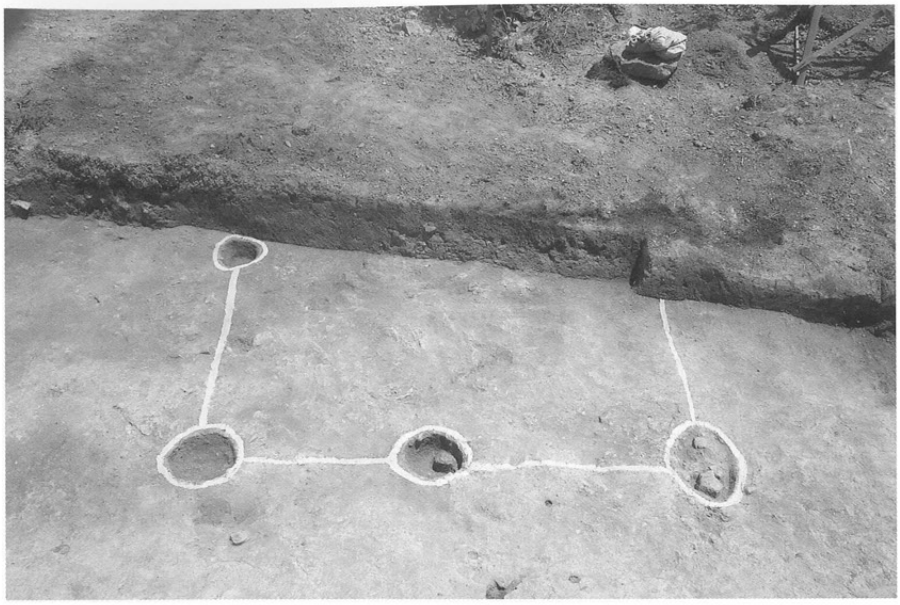
図版８

１　竪穴住居２
P15
（北から）



２　掘立柱建物１
（北から）

３　掘立柱建物１
P2
（北東から）



１　掘立柱建物２
（北から）

２　土壙７
（南西から）

３　土壙８
（南東から）

図版10

1　土壙11
（南から）

2　土壙12
（西から）

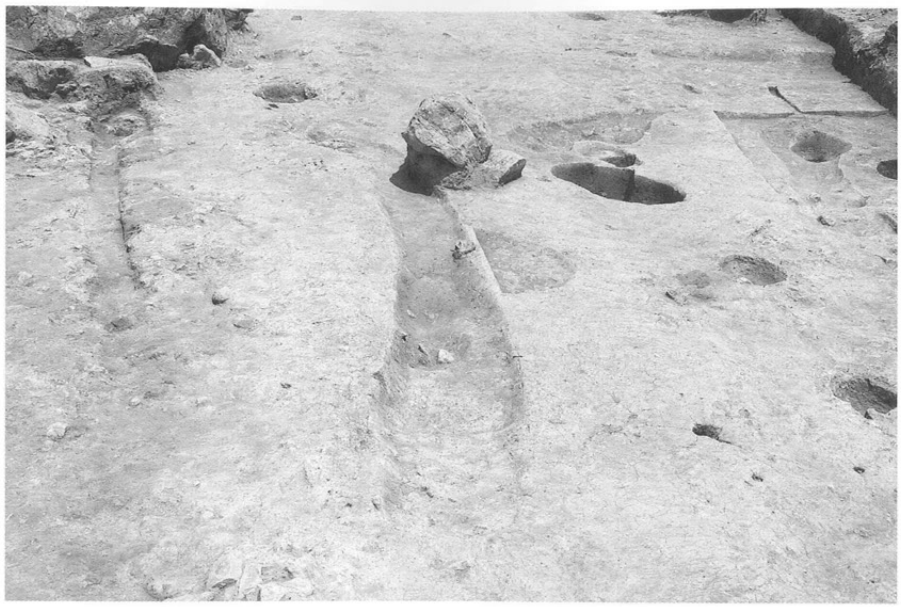
3　土壙14
（西から）

1　土壙18
（南から）

2　土壙20
（北東から）

3　溝１
（南西から）

図版12



1　溝３
（西から）

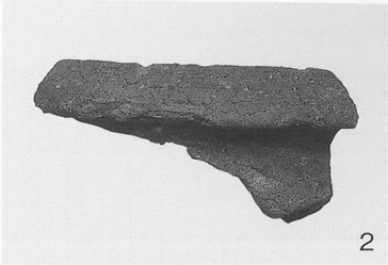
2　包含層
土器（108）出土状況
（北から）

3　包含層
土器（160）出土状況
（東から）

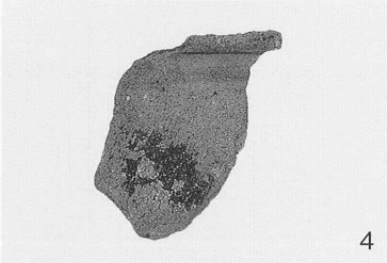
1　古墳時代以降の
遺構　全景
（北西から）

2　土壙墓１
検出状況
（南西から）

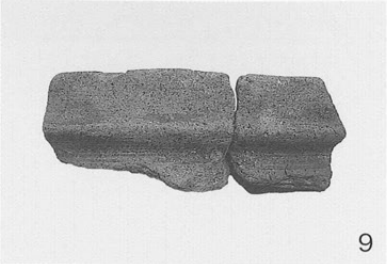
3　土壙23
（南から）

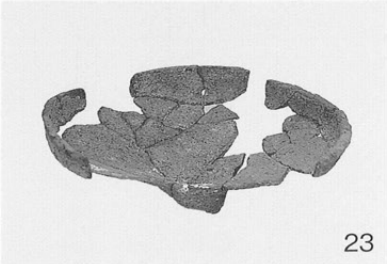

2

3


4

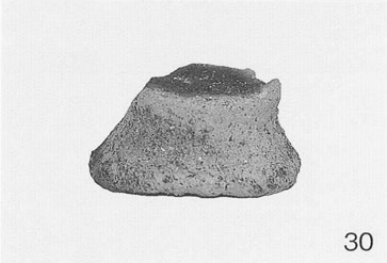
5


9

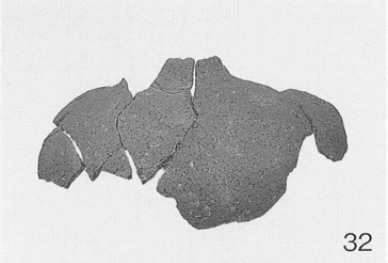

23

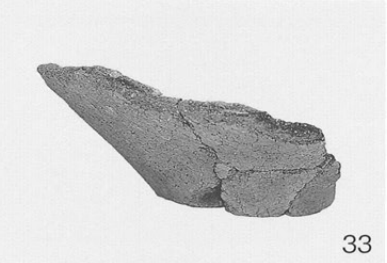
24

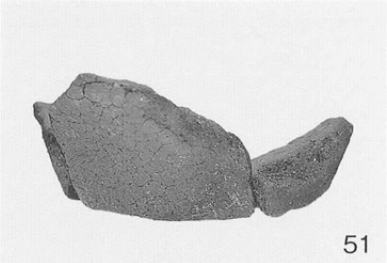
29

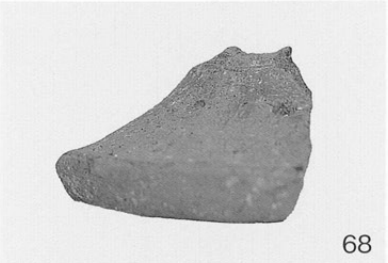

30

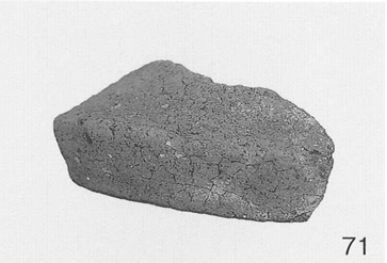
1　竪穴住居１　出土遺物

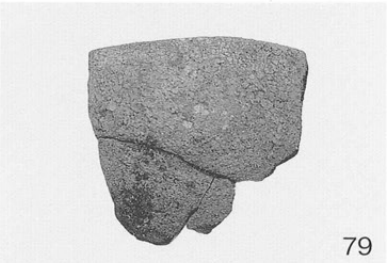

32


33

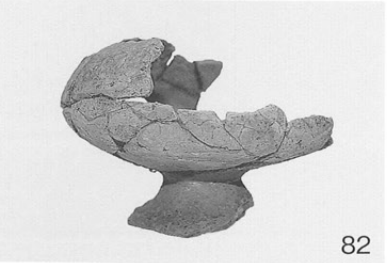

51

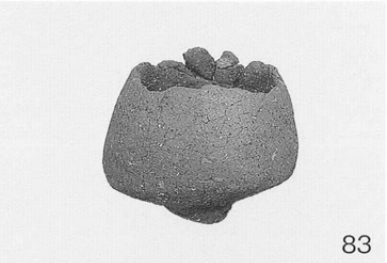

68


71

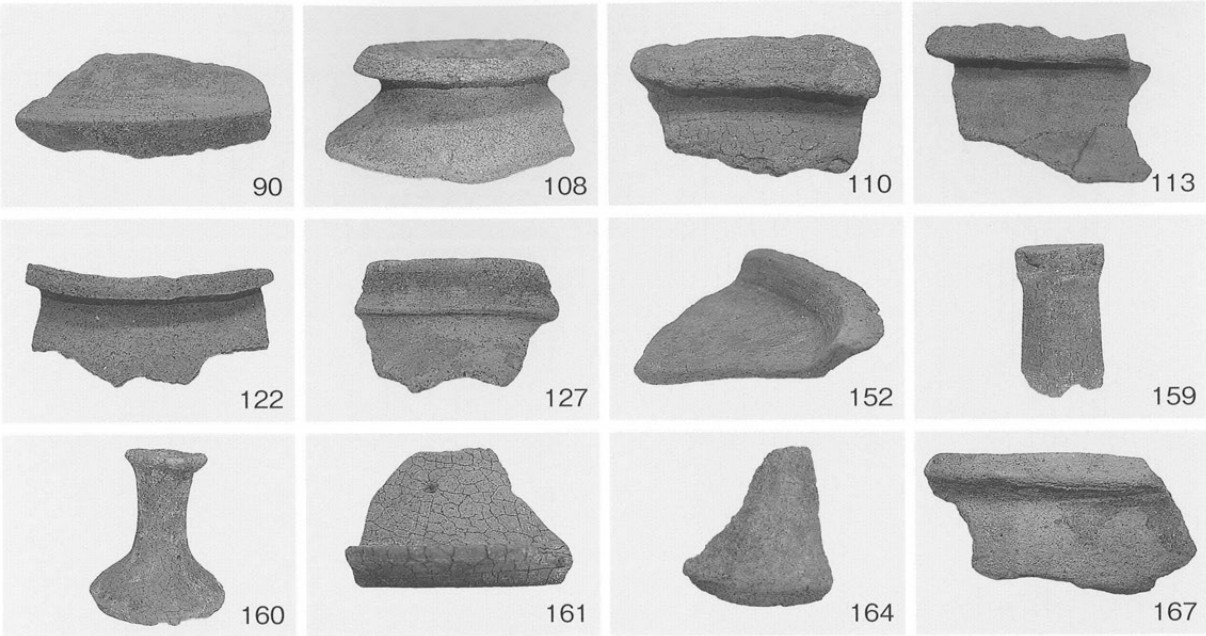

79

80

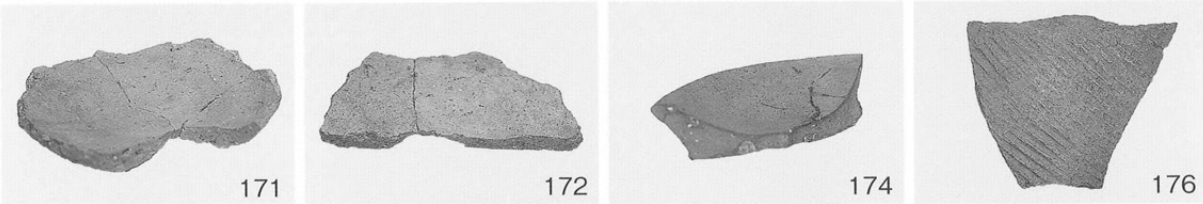

82


83

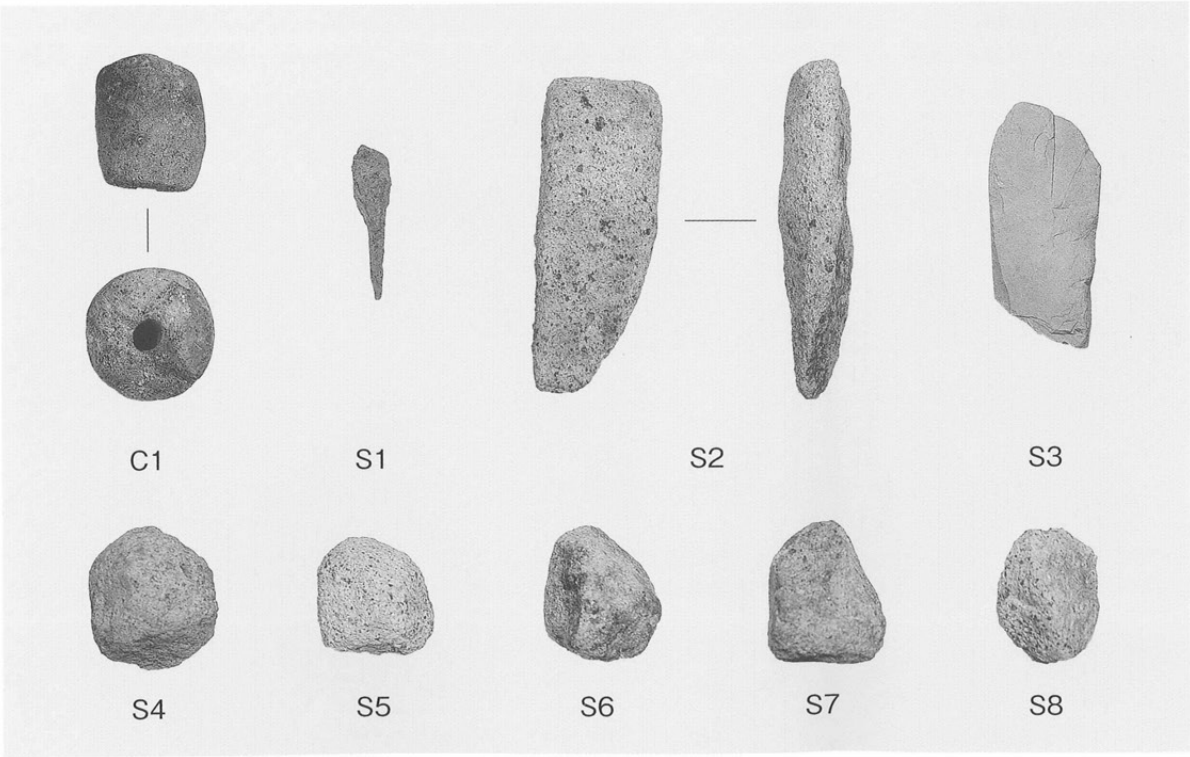
2　竪穴住居２　出土遺物



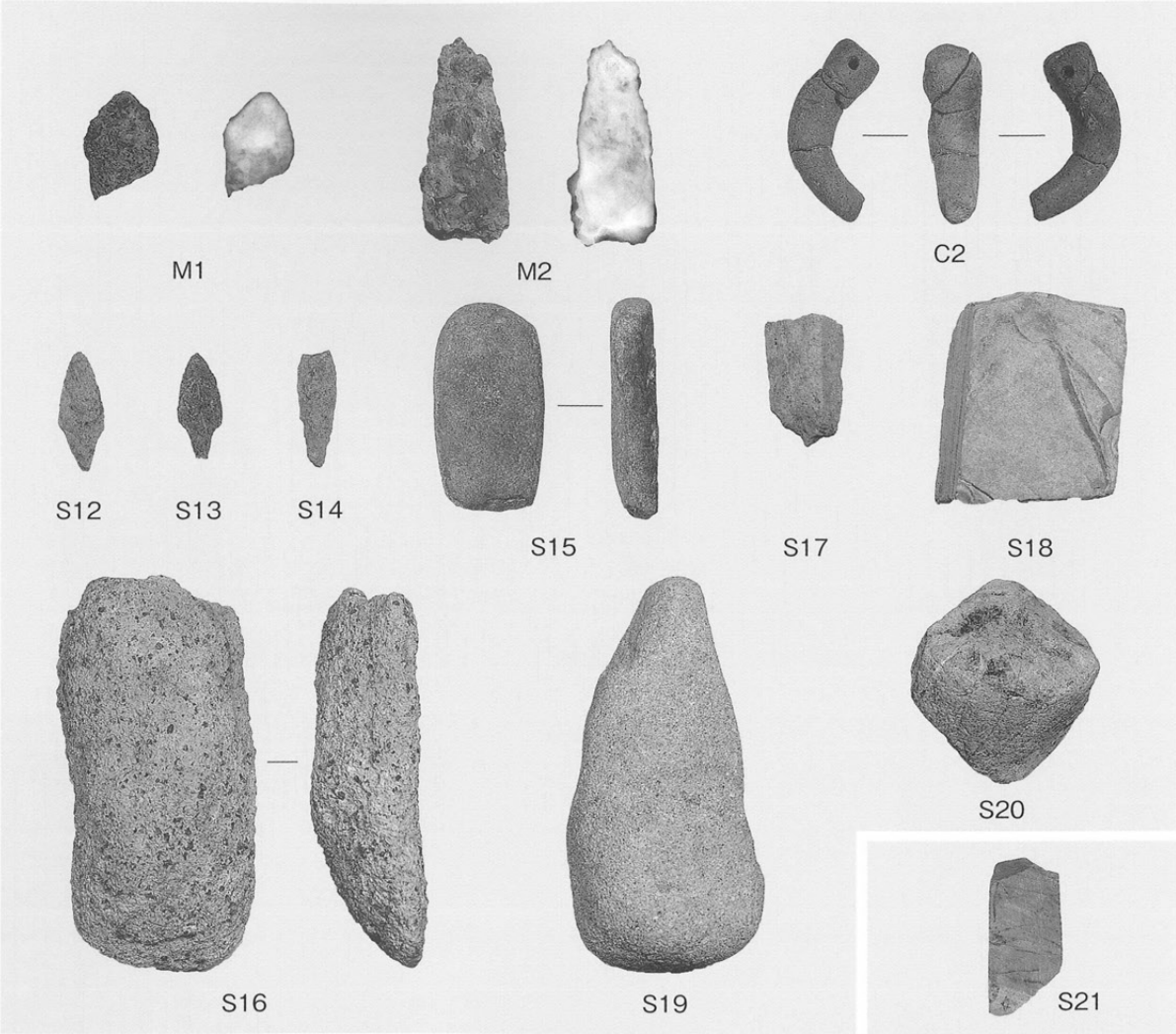
1　弥生時代 遺構に伴わない遺物



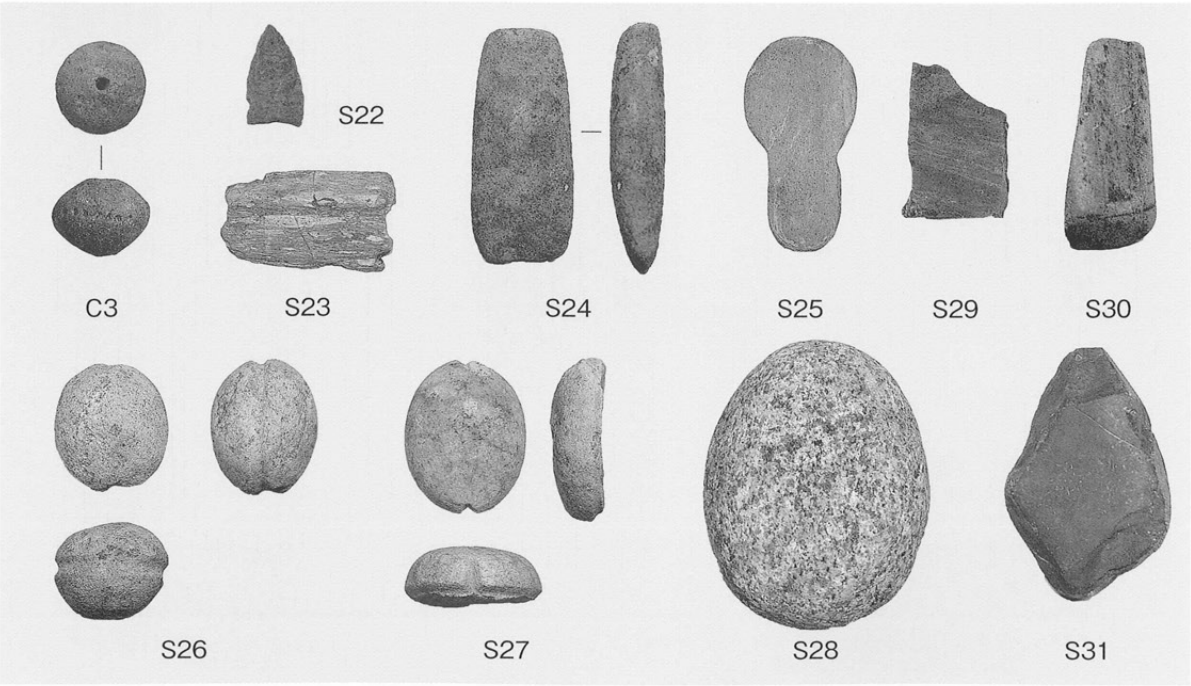
2　古墳時代以降 遺構に伴わない遺物



3　竪穴住居1 土製品・石器・石製品



1　竪穴住居２ 鉄器・土製品・石器・石製品　　2　掘立柱建物１ 石器



3　遺構に伴わない遺物 土製品・石器・石製品

報告書抄録

ふ り が な	ちくりんじてんもんだいいせき
書　　名	竹林寺天文台遺跡
副 書 名	国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査
巻　　次	1
シ リ ー ズ 名	浅口市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	2
編 著 者 名	水田貴士　三浦孝章　藤原範子　光永真一
編集・発行機関	浅口市教育委員会
所　在　地	〒719-0243　岡山県浅口市鴨方町鴨方2244－2　　TEL 0865－44－7055
発 行 年 月 日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
竹林寺天文台 遺　跡	岡山県浅口市 鴨方町本庄 3037-5 小田郡矢掛町 南山田2808-27	33216 33461	3	34° 34′ 36″	133° 35′ 48″	2008. 4.30 ～ 2008. 7.29	700	新観測所 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹林寺天文台 遺　跡	集落	弥生時代 古墳時代 以降	竪穴住居５軒、掘立柱建物２棟、土壙21基、溝３条、 土壙墓１基、土壙12基、溝４条	土器（弥生土器、須恵器、亀山焼） 石器（石鏃、石錐、石斧、石錘、敲石、台石、石製品） 土製品（土製勾玉、土玉、土錘） 金属器（鉈）	標高約340mに位置する弥生時代後期の高地性集落

要約	調査地は浅口市と小田郡矢掛町との境にあたる標高約340mの山頂に位置する。弥生時代後期には竪穴住居５軒、掘立柱建物２棟など、山頂部に集落が形成されており、土器や石器が多数出土した。標高約340mに位置する高地性集落の存在が明らかとなった。また、古墳時代以降の遺構や遺物も出土している。

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告　2

竹　林　寺　天　文　台　遺　跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

平成21年3月19日　印刷

平成21年3月19日　発行

編集　浅口市教育委員会

岡山県浅口市鴨方町鴨方2244－2

発行　大学共同利用機関法人自然科学研究機構

東京都三鷹市大沢2－21－1

浅口市教育委員会

印刷　㈱玉島活版所

岡山県倉敷市玉島中央町１－20－８